

上新田新田西遺跡(2)

国道354号(玉村バイパス)社会資本総合整備
(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

上新田新田西遺跡(2)

国道354号(玉村バイパス)社会資本総合整備
(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県では県内交通網の充実を目的とした「7つの交通軸構想」が策定され、そのうちのひとつである東毛軸として、東毛広域幹線道路の整備が進められています。高崎市を起点とし茨城県鉾田市まで続く国道354号の整備事業もその中に組み込まれており、本報告書で扱った上新田新田西遺跡はこの国道354号(玉村バイパス)の建設事業に伴って発掘調査が実施されたものです。

上新田新田西遺跡は佐波郡玉村町にあり、関越自動車道の東側に位置しており、発掘調査は平成22年の4月から5月にかけて実施されました。これは平成20年度に調査が行われ、平成21年度に報告書が刊行された本線部分の北側道調査区にあたります。今回調査では、本線調査部につながる平安時代の水田跡が確認されました。残念ながら明確な畦畔は検出できなかったものの、本地域で判明している平安時代水田と同様の東西南北に走る条里区画を確認することができました。古代日本の土地区画制度として重要なテーマである条里制について、その実態を示す貴重な歴史資料を提供できたものと考えております。今後、本報告書が貴重な埋蔵文化財の調査記録として保存され、かつ歴史研究や教育の場で活用されることを切に願っております。

最後に、発掘調査から報告書の作成に至るまで、群馬県伊勢崎土木事務所をはじめ、群馬県教育委員会、玉村町教育委員会、並びに地元関係者の皆様には多大なご指導、ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝を申し上げて序といたします。

平成25年6月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 榮 一

例 言

1. 本書は、平成21年度国道354号(玉村バイパス)地域活力基盤創造事業に伴い発掘された上新田新田西遺跡の調査成果を、平成24年度国道354号(玉村バイパス)社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う上新田新田西遺跡の発掘調査報告書として刊行したものである。
2. 上新田新田西遺跡は群馬県佐波郡玉村町上新田597-1、600-2に所在する。
3. 事業主体 群馬県伊勢崎土木事務所
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月1日以前は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)
5. 整理主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査の体制と期間は次のとおりである。

平成22年度

調査担当 石守晃(上席専門員)
宮下寛(主任調査研究員)

遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル
地上測量及び空中写真撮影 技研測量設計株式会社

履行期間 平成22年3月31日～平成23年3月31日
調査期間 平成22年4月1日～平成22年5月31日
調査面積 2,041㎡
7. 整理事業の体制と期間は次のとおりである。

整理担当：関晴彦(上席専門員) 長谷川博幸(主任調査研究員)

履行期間：平成24年10月1日～平成25年3月31日
整理期間：平成24年10月1日～平成25年3月31日
8. 本書作成関係者
編集 関晴彦 長谷川博幸
本文執筆 長谷川博幸(主任調査研究員)
デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺構写真 発掘調査担当者
遺物写真 佐藤元彦(補佐(総括))
遺物観察・観察表執筆
弥生時代の土器 谷藤保彦(上席専門員)
石製品 岩崎泰一(上席専門員)
古墳時代以降の土器 桜岡正信(資料統括)
陶磁器 大西雅広(上席専門員)
保存処理 関邦一(補佐(総括))
9. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、玉村町教育委員会事務局管理部文化財保護課の指導と助言を得た。
10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

- 本文中に使用した方位は、総て国家座標(国家座標第IX系)の北を用いた。調査区はX=34,560～34,510、Y=-66,500～-66,290の範囲に収まる。
- 遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
- 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則1／3とし、それ以外のものは明記した。
- 遺物番号は出土遺構ごとの通し番号とし、器種・分類順に記載した。番号は遺構図、遺物実測図、遺物観察表、遺物写真図版とも一致している。
- 遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合N-○°-Eとした。遺構の面積は、上端を計測した。計測はプランメーターで3回行いその平均値を採用した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し()で表した。
- 遺構からの出土遺物点数は大型製品片・中型製品片・小型製品片に分類し記載している。土師器の大型製品に分類した器種は壺・甕類、土釜、中型品は高杯類、小型製品は椀・杯類である。須恵器の大型製品に分類した器種は壺・甕類・羽釜・瓶類、中型製品は高杯・盤類・ハソウ、小型製品は椀・杯・皿類である。
- 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
 - 計測値の()は推定値を、[]は現存値を示す。
 - 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に基づいている。
 - 胎土表記中の細砂・粗砂・礫は、径2mm以上を礫、径2～0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
 - 計測値の略は、口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、稜：模倣杯などの稜径、最内湾口縁部杯での口縁部最大径、胴：甕・壺などの胴部最大径、摘：摘み径である。
- 本書で使用した浅間山噴火による降下火砕物等の呼称については、以下のように表記する。

浅間A軽石：As-A 浅間B軽石：As-B 浅間C軽石：As-C
- 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地勢図1：200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)
「長野」(平成10年2月1日発行)
国土地理院 地形図1：25,000「高崎」(平成22年12月1日発行)
「前橋」(平成22年12月1日発行)
「大胡」(平成22年12月1日発行)
「伊勢崎」(平成15年2月1日発行)
玉村町 1：2,500玉村町都市計画域図6(平成6年発行)
玉村町 1：2,500玉村町都市計画域図7(平成6年発行)

目次

序		
例言		
凡例		
目次		
挿図目次		
表目次		
写真図版目次		
第1章 調査の経過		
第1節 発掘調査に至る経緯	1	
第2節 調査の方法と経過	2	
1 調査区の設定	2	
2 調査区名称改訂	2	
3 調査経過	2	
4 調査日誌抄録	3	
5 整理作業の経過	3	
第2章 遺跡の立地と環境、標準土層		
第1節 遺跡の立地	5	
第2節 遺跡周辺の歴史環境	7	
1 縄文時代	7	
2 弥生時代	7	
3 古墳時代	7	
4 奈良・平安時代	8	
5 中世	9	
6 近世	10	
第3節 標準土層	16	
第3章 調査の概要	16	
第4章 中近世の遺構と遺物		
第1節 概要	19	
第2節 土坑・ピット	19	
第3節 井戸	23	
第4節 溝	24	
第5節 復旧坑	31	
第5章 古代の遺構と遺物		
第1節 概要	33	
第2節 竪穴状遺構	33	
第3節 土坑・ピット	37	
第4節 井戸	40	
第5節 溝	41	
第6節 水田	43	
第7節 遺構外出土遺物	45	
第6章 自然科学分析		
第1節 上新田新田西遺跡の土層とテフラ	47	
1 はじめに	47	
2 土層の層序	47	
3 テフラ検出分析	47	
4 屈折率測定	48	
5 考察	48	
6 まとめ	48	
第2節 上新田新田西遺跡におけるプラント・オペー ル分析	51	
1 はじめに	51	
2 試料	51	
3 分析法	51	
4 分析結果	51	
5 考察	51	
6 まとめ	51	
第7章 調査の成果		
第1節 上新田新田西遺跡の溝遺構と土地区画につい て	53	
第2節 本遺跡調査成果	54	
遺物観察表	56	
写真図版		
報告書抄録		

挿 図 目 次

第1図	上新田新田西遺跡と群馬の地勢(国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成10年2月1日「宇都宮」平成18年4月1日発行を使用)・1
第2図	上新田新田西遺跡の位置(国土地理院1/25,000地形図「高崎」平成22年12月1日発行を使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第3図	上新田新田西遺跡調査区図(1:2,500玉村町都市計画区域図6・7(平成6年発行)使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第4図	周辺地形分類図(『群馬県史通史編1』付図2を改変使用)・・ 6
第5図	周辺遺跡位置図(国土地理院1/25,000地形図「高崎」平成22年12月発行「前橋」平成22年12月発行「大胡」平成22年12月発行「伊勢崎」平成15年2月発行を使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第6図	基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第7図	上新田新田西遺跡V区・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第8図	上新田新田西遺跡I・VII区・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第9図	上新田新田西遺跡II・VII区・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第10図	VI区1～6号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第11図	VII区1・3号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第12図	VI区1～7号ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第13図	VI区8・9号ピット、VII区3号ピット・・・・・・・・・・ 23
第14図	V区5号井戸・出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第15図	VI区1号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第16図	VI区2・3号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第17図	VI区2号溝出土遺物(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

第18図	VI区2号溝出土遺物(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第19図	VI区4・5号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第20図	VI区6号、VII区2・5～7・9号溝・出土遺物・・・・・・・・ 30
第21図	VII区復旧坑2群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第22図	VII区復旧坑1群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第23図	VII区1号竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第24図	VII区1号竪穴状遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第25図	VII区2号竪穴状遺構・出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第26図	VII区2号竪穴状遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第27図	VII区3号竪穴状遺構・出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第28図	VII区4号竪穴状遺構・出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第29図	VI区7～9号・VII区2・4号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第30図	土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第31図	VII区1・2・4～7号ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第32図	VII区8～10号ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第33図	VII区1号井戸・出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第34図	VII区1・3号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第35図	VII区8号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第36図	VII区水田・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第37図	遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第38図	II区No.148R杭1.2m地点の土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第39図	V区旧石器試掘坑南壁西SP0.7m東地点の土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第40図	自然科学分析試料採取地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第41図	上新田新田西遺跡 溝遺構と圃場整備前土地区画・・・・・・・・ 55

表 目 次

第1表	遺構名称相対表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第2表	主な周辺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第3表	中近世検出遺構一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第4表	中世ピット一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第5表	古代検出遺構一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

第6表	古代ピット一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第7表	遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第8表	テフラ分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第9表	屈折率測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第10表	上新田新田西遺跡におけるプラント・オパール分析結果・・ 52
第11表	遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

写 真 図 版

P L . 1	1 上新田新田西遺跡全景(北から) 2 VII区2面全景(北から)
P L . 2	1 VI区1号溝全景(南から) 2 VI区2・3号溝全景(南から)
P L . 3	1 VI区4号溝全景(南から) 2 VI区5号溝全景(北から)
P L . 4	1 VI区6号溝全景(北から) 2 VII区1号溝全景(西から)
P L . 5	1 VII区2号溝全景(東から) 2 VII区3号溝全景(南から)
P L . 6	1 VII区5・6号溝全景(南から) 2 VII区5・9号溝全景(南から)
P L . 7	1 VII区6号溝全景(北から) 2 VII区7号溝全景(北から)
P L . 8	1 VII区8号溝全景(南西から) 2 VII区1群復旧坑全景(南から)
P L . 9	1 VI区1号土坑全景(南から) 2 VI区2号土坑全景(東から) 3 VI区3号土坑セクション(北から) 4 VI区4号土坑全景(東から) 5 VI区5号土坑全景(北から) 6 VI区6号土坑全景(北から) 7 VI区7号土坑全景(北から) 8 VI区8号土坑セクション(北から)
P L . 10	1 VI区9号土坑全景(東から) 2 VI区10号土坑全景(南から) 3 VII区1号土坑全景(南から) 4 VII区2号土坑全景(北から)

5	VII区3号土坑セクション(南から)
6	VII区4号土坑セクション(東から)
7	VII区1号井戸セクション(南から)
8	VII区調査風景(東から)
P L . 11	1 VI区1号ピット全景(南から) 2 VI区2号ピット全景(南から) 3 VI区3号ピット全景(南から) 4 VI区4号ピット全景(南から) 5 VI区5号ピット全景(東から) 6 VI区6号ピット全景(東から) 7 VI区7号ピット全景(北から) 8 VI区8号ピット全景(南から)
P L . 12	1 VI区9号ピット全景(南から) 2 VII区1号ピット全景(南から) 3 VII区2号ピットセクション(東から) 4 VII区3号ピット全景(南から) 5 VII区4号ピット全景(南東から) 6 VII区4号ピットセクション(南東から) 7 VII区5号ピット全景(南から) 8 VII区6号ピット全景(南東から)
P L . 13	1 VII区7号ピット全景(南東から) 2 VII区8号ピット全景(北から) 3 VII区9号ピット全景(南西から) 4 VII区10号ピット全景(南から) 5 VII区2号竪穴状遺構全景(南から)
P L . 14	1 VII区3号竪穴状遺構(南から) 2 VII区4号竪穴状遺構(南から)
P L . 15	1 VII区As-B下水田全景(南東から) 2 VII区As-B下水田全景(南東から)
P L . 16	V区5号井戸・VI区2号溝・VII区2号溝・VII区竪穴状遺構出土遺物
P L . 17	VII区竪穴状遺構・土坑・VII区1号井戸・遺構外出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

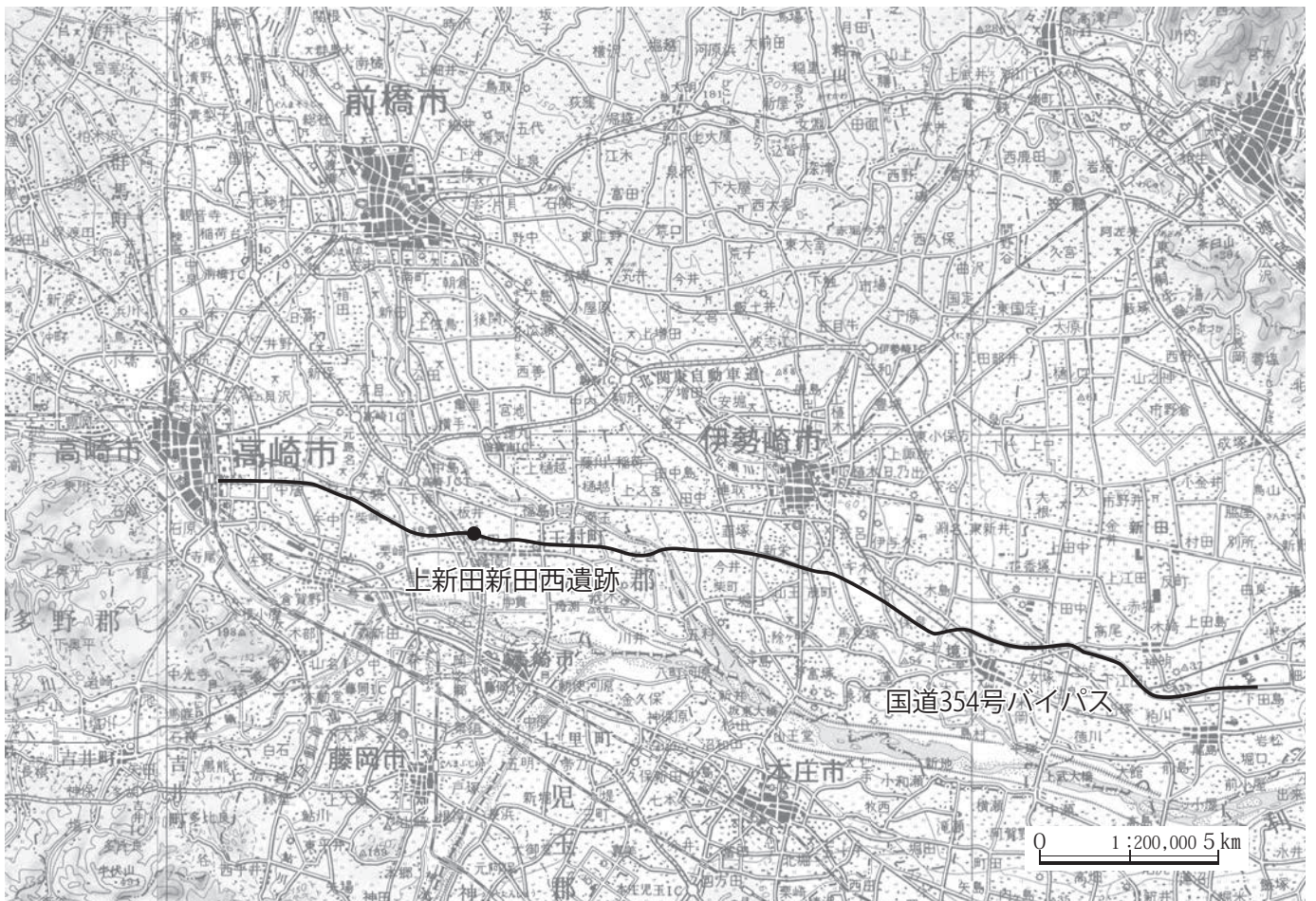
国道354号は高崎駅東口を起点とし、県内では玉村町、伊勢崎市、太田市、大泉町、邑楽町、館林市に至る。群馬県南東部の主要都市を結び、東北自動車道館林インターチェンジを経由して板倉町まで総延長58.6kmの東毛広域幹線道路として整備されている。

国道354号の整備事業は、県央と東毛の地域間の連携を深め、沿道の産業立地・物流の円滑化、生活環境の利便化等、地域発展に貢献する交通整備の一環として始まった。館林インターチェンジ付近の整備から開始され、各地で事業が進み、平成23年度末には46.27km(全体の78.9%)が供用済みである。道路建設と並行して埋蔵文化財調査も継続して進められ、当事業団も平成8年度から発掘調査を受託してきた。

玉村町内の国道354号改築事業は、玉村バイパス延長

5.3kmとして平成5年度に開始された。計画路線内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、県教育委員会、県土木部、伊勢崎土木事務所による協議を経て、平成8年度から当事業団への委託が開始された。調査は、計画区間の東端にある主要地方道藤岡大胡バイパス(平成13年12月15日開通)との交差点の西に接する福島大島遺跡から順次西へ着手することとなった。

本遺跡は平成20年度に本線部分が地域自立活性化交付金事業に伴い調査された。平成22年に側道部分について群馬県教育委員会の調整により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に対し発掘調査が依頼された。これにより群馬県伊勢崎土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で平成22年度の発掘調査の契約が締結され、平成22年4月1日調査開始にむけた届出等の事務処理が進められることとなった。路線南側部分は、工事工程の都合により、調査対象から除外された。



第1図 上新田新田西遺跡と群馬の地勢(国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成10年2月1日「宇都宮」平成18年4月1日発行を使用)

第2節 調査の方法と経過

1. 調査区の設定

平成20年度調査は、遺跡を縦断する現道・用水路等を境界として、5カ所の調査区に区分した。調査区名は東からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区とした(第3図)。Ⅲ区・Ⅳ区は試掘調査により遺構が確認されなかったため、調査除外となった。

平成22年度調査は、Ⅰ区・Ⅱ区の北側部分の調査であった。調査区名はそのままⅠ区及びⅡ区を踏襲した。調査区の座標値は、国家座標第Ⅸ系(世界測地系)を用いた。

2. 調査区名称改訂

整理の過程で、調査時と遺構名称の改訂が生じている。調査時は側道部調査もⅠ区・Ⅱ区としたが、本線部調査と遺構番号等重複が起きてしまった。そのため、側道

部調査である平成22年度調査の調査区をそれぞれ、Ⅰ区をⅥ区、Ⅱ区をⅦ区として整理作業を行った。

また、改訂内容については第1表にまとめた。

3. 調査経過

平成22年の調査は、4月1日より着手した。調査機材・事務所などを準備し、4月15日から西側のⅦ区の表土掘削を行った。

表土掘削には3日間を要した。表土掘削後、遺構確認を行い、順次遺構調査を実施した。ゴールデンウィークを挟み、5月10日にラジコンヘリコプターを使用し、調査区全景を撮影した。

Ⅵ区は5月11日から表土掘削を開始し、13日に終了した。Ⅶ区同様、遺構確認を行い、遺構調査を実施した。

5月27日にラジコンヘリコプターを使用し、調査区全景を撮影した。

5月26日より埋戻を開始し、31日に終了した。同日調



第2図 上新田新田西遺跡の位置(国土地理院1/25,000地形図「高崎」平成22年12月1日発行を使用)

査機材等を撤去し、すべての調査を終了した。

4. 調査日誌抄録

平成22年 4月

- 1日 調査着手、準備
- 15日 VII区表土掘削
- 16日 VII区遺構確認開始
- 19日 VII区表土掘削終了
- 20日 VII区復旧坑調査
- 26日 VII区As-B下水田調査
- 5月
- 10日 VII区調査区全景撮影
- 11日 VI区表土掘削
- 12日 VI区遺構確認開始
- 13日 VI区表土掘削終了
- 17日 VI区溝調査
- 26日 VII区埋戻開始
- 27日 VI区調査区全景撮影
- 28日 VII区埋戻終了、I区埋戻開始
- 31日 VI区埋戻終了、機材撤去、調査終了

5. 整理作業の経過

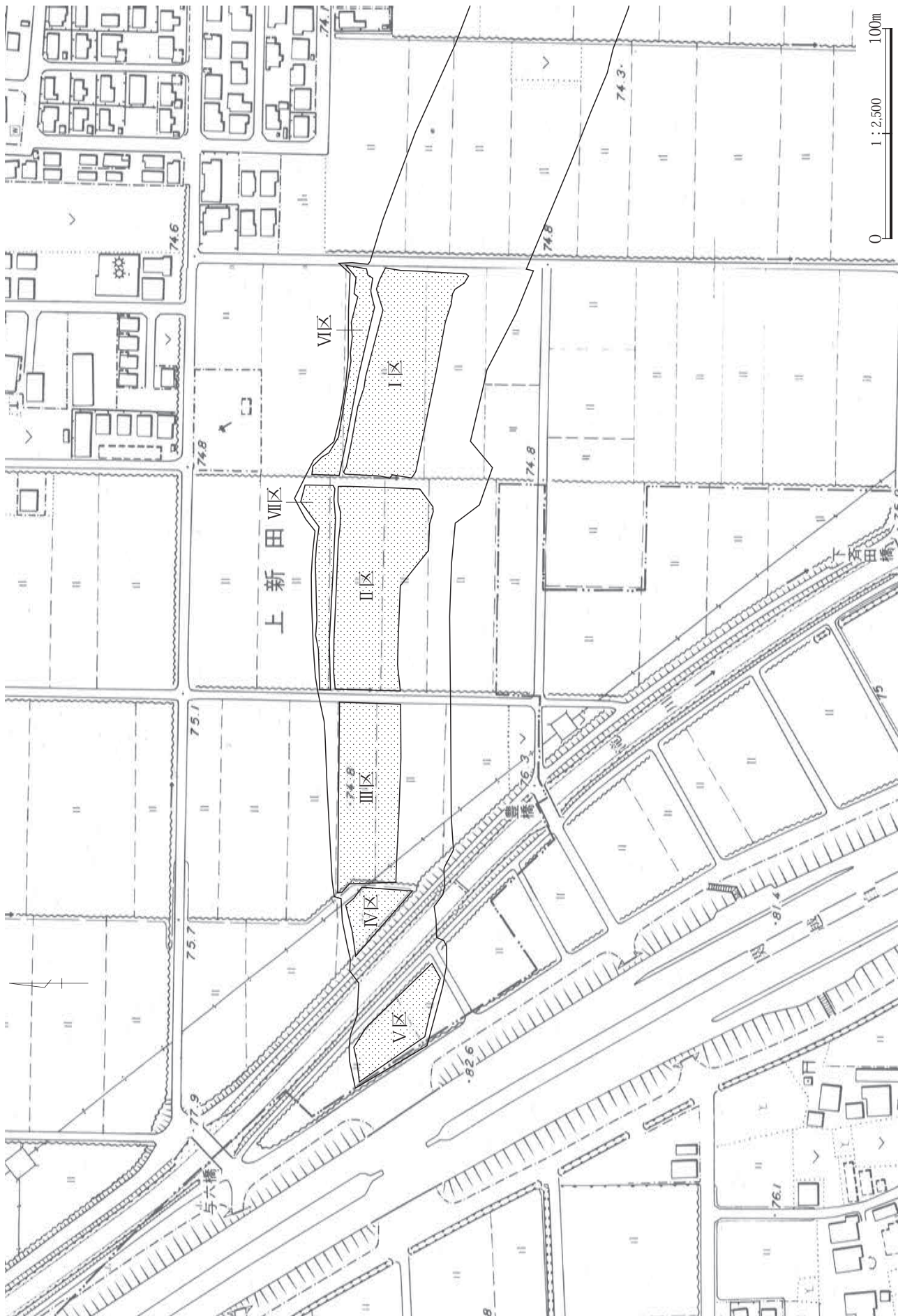
上新田新田西遺跡の整理作業及び報告書編集作業は平成24年10月1日から平成25年3月31日まで実施した。収納されている出土遺物や記録類の確認作業から開始した。次に、デジタル遺構写真のリネーム作業、遺構図の修正作業、土器・石製品の分類・復元作業及び写真撮影などを行った。

その後、報告書に掲載する遺構写真の選び出し作業、遺構図のデジタルトレース作業を行い、原稿を執筆し、報告書作成のための組版作業をデジタルで行った。

整理作業の最後には、遺物管理台帳及び写真管理台帳を作成し、今後の活用に備え遺物やその他資料の収納作業を行った。

第1表 遺構名称相対表

調査時の名称	本報告書での名称	備考欄
I区	VI区	
II区	VII区	
I区9号溝	VI区3号溝	
I区10号溝	VI区4号溝	
I区11号溝	VI区5号溝	
I区12号溝	遺構認定除外、欠番	
I区13号溝	VI区6号溝	
II区4号溝	遺構認定除外、欠番	
II区4号土坑	VII区1号土坑	調査時、1～3号土坑欠番
II区5号土坑	VII区2号土坑	調査時、1～3号土坑欠番
II区6号土坑	VII区3号土坑	調査時、1～3号土坑欠番
II区7号土坑	VII区4号土坑	調査時、1～3号土坑欠番
II区6号ピット	VII区1号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区7号ピット	VII区2号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区8号ピット	VII区3号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区9号ピット	VII区4号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区10号ピット	VII区5号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区11号ピット	VII区6号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区12号ピット	VII区7号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区13号ピット	VII区8号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区14号ピット	VII区9号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区15号ピット	遺構認定除外、欠番	調査時、1～5号ピット欠番
II区16号ピット	遺構認定除外、欠番	調査時、1～5号ピット欠番
II区17号ピット	遺構認定除外、欠番	調査時、1～5号ピット欠番
II区18号ピット	VII区10号ピット	調査時、1～5号ピット欠番
II区1号落込み	VII区1号竪穴状遺構	
II区2号落込み	VII区2号竪穴状遺構	
II区3号落込み	VII区3号竪穴状遺構	
II区4号落込み	VII区4号竪穴状遺構	



第3図 上新田新田西遺跡調査区図（1：2,500 玉村町都市計画区域図6・7（平成6年発行）使用）

第2章 遺跡の立地と環境、標準土層

第1節 遺跡の立地

上新田新田西遺跡は、群馬県佐波郡玉村町上新田597-1番地他に所在する。上新田は、玉村町中央部西端に位置している。佐波郡玉村町は群馬県の中央部にあり、関東平野の北西端を占めている。北は前橋市、東は伊勢崎市、西は高崎市に接し、南は藤岡市及び新町を経て埼玉県上里町、本庄市に至る。玉村からは、南東部に秩父山地・関東平野、西方には観音山丘陵、その背後には妙義山・浅間山を望む。北西方向には榛名山が連なり、中央部中腹には扇状地である相馬ヶ原が見える。北方向には赤城山を望み、榛名山と赤城山の間には子持山や谷川岳をみることができる。赤城山の北東方向には日光、足尾山系が続く。

玉村町は、北西方向から南東方向に緩やかに傾斜する平坦地が形成されている。町域の北東部を北西から南東に利根川が流れ、西には井野川が流下している。また、南には井野川と合流し南東方向に流れる烏川がある。本遺跡を含む玉村町域は、前橋台地と呼ばれている地形面に立地している。

前橋台地は榛名山東南麓から南東方向に広がる台地である。前橋市の北東部から、伊勢崎市西部にかけての旧利根川流路と高崎市西部の烏川に挟まれた部分である。更新世後期に利根川にもたらされた前橋砂礫層が200m以上堆積し、それが基盤となり、下位から前橋泥流堆積層、前橋泥炭層で構成されている。前橋泥流堆積層は、約2～2.4万年前の浅間山山体崩落が原因である岩屑なだれに由来している。渋川市以南の利根川両岸に堆積した前橋泥流堆積層は、高崎市旧群馬町域から平野部へと広がった。前橋泥流堆積層は前橋市内で約15m前後、高崎市南部でも10mを超える厚さで堆積している。

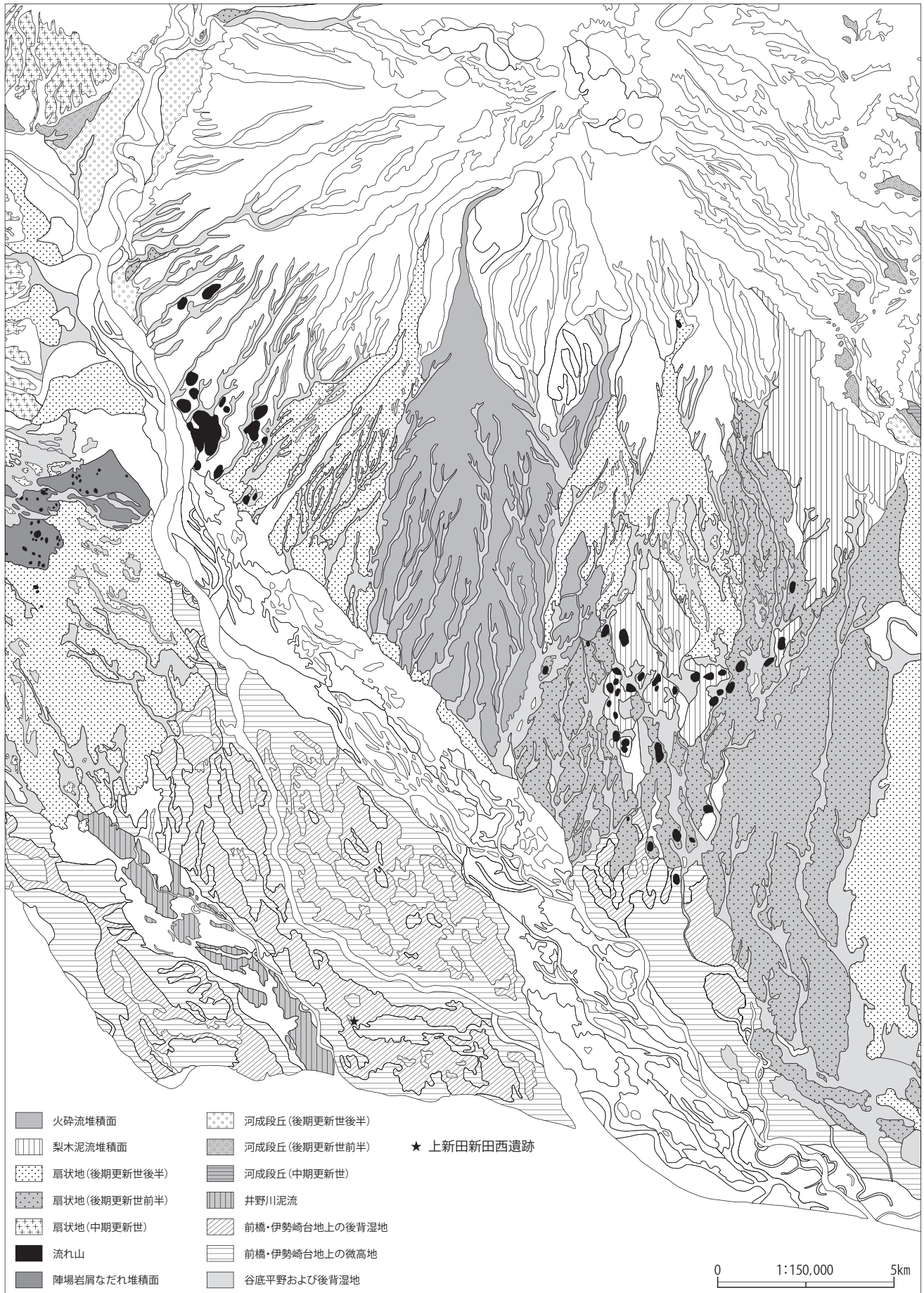
前橋泥流堆積層の上位層である前橋泥炭層は、シルト・粘土・砂・泥炭層などによって構成されている。このシルト・泥炭層は水中や湿潤な環境下で形成されることから、この時期の前橋台地は湿地状態であったと考えられる。水成ローム層に含まれる泥炭質粘土層は、科学分析によると約1.3万年前という測定値が示されている。

前橋台地上には、洪積世後期以降、利根川をはじめとするいくつもの河川が流れ、小規模ながら氾濫原を各所に形成している。現在前橋台地を分断する形で流下する利根川であるが、約2.4万年前には前橋市総社町あたりから新前橋駅近辺を経て染谷川・滝川付近を流れ、井野川に注いでいたとされる。その後、約1.7万年前には榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城山南西麓の広瀬川低地帯にその流路を変更した。玉村町近辺では、現在の広瀬川及びその支流が旧利根川の流路であったと推定されている。現在の流路になったのは、中世後半であると考えられている。

現在の利根川の両岸には自然堤防が形成されているが、その表層は天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う鎌原泥流である。浅間山はこの年の春ごろから小噴火を起していたが、旧暦7月2日ごろより活動が活発となり、8日の午前10時頃、大爆発を起こした。玉村町近辺でも2日ごろからの降灰で昼でも暗かったと言う。8日正午ごろには降灰が止み、空も明るくなった。そのところへ、吾妻川から利根川に流下した泥流が押し寄せた。上福島・樋越・板井・斉田・福島・南玉・下之宮・箱石・飯倉・川井・小泉・五料地区の利根川沿いの地域はその泥流が厚く堆積している。泥流下には古墳や畑などが埋没していることがわかっている。厚く幅の広い自然堤防の下には小規模な微高地や後背湿地が形成されていたと考えられる。現利根川流路以外では、このような微高地が現状でも見てとれる。

近年に至ると、1947(昭和22)年のカスリン台風の直撃を受け、利根川が氾濫し、大きな被害が出た。

玉村町は、米麦二毛作を中心とする農業が営まれてきたが、近年は隣接する前橋市や高崎市、伊勢崎市などのベッドタウンとして住宅建築が増加し、人口もここ数年で著しく増加している。また、大型商業店舗の進出や工場、倉庫などといった生産・物流開業関連の施設も増加の傾向にある。それに伴い主要道路の建設や整備、利根川の橋梁建設などの交通網の整備が大々的に行われ、玉村町はここ数年で著しい発展と変貌を遂げている。



第4図 周辺地形分類図(『群馬県史通史編1』付図2を改変使用)

第2節 遺跡周辺の歴史環境

上新田新田西遺跡が立地する前橋台地には古代を中心に多くの遺跡が残されている。ここでは玉村町域を中心とする前橋台地における各時代の様相について、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代・中世・近世について概要を報告する。

「第5図 周辺遺跡位置図」及び「第2表 主な周辺遺跡」を参照されたい。

1. 縄文時代

縄文時代の遺跡は、ほとんど確認されていない。角瀧城遺跡(46)で前期後半の、福島曲戸遺跡(67)、福島大光坊遺跡(12)、上之手石塚Ⅲ遺跡(18)で中期の土坑が確認されているが、竪穴住居は未検出である。本遺跡では縄文時代遺物は出土していないが、隣接する上新田中道東遺跡(3)では縄文時代中期・後期の土器片及び草創期の有茎尖頭器3点・石鏃28点が出土している。縄文時代の本遺跡周辺は居住域としての利用よりも、狩猟の場などの土地利用が成されていたものと推測される。

2. 弥生時代

弥生時代の遺跡は調査事例が少なかった。その為、弥生時代の本地域は無住の地であるとの説が長らく定説化していた。しかし、近年の調査により遺構・遺物が、徐々にではあるが確認されている。上飯島芝根Ⅱ遺跡(13)では、中期後半の御新田式土器を伴う住居が1軒検出された。一万田遺跡(81)では中期後半の土坑墓2基が、上之手石塚Ⅲ遺跡では土坑1基がそれぞれ検出された。福島飯塚遺跡(7)では、御新田式及び中期後半の南御山式土器などが出土し、上新田中道東遺跡では後期樽式土器、北総系と推定される後期外来系の弥生土器が出土している。本遺跡でも遺構は確認されなかったが、弥生時代後期の樽式土器が1点出土している。

今後の調査事例の蓄積を待つところではあるが、微高地に居を構え、周辺の水田可耕地を開墾していたことも十分に考えられる。少なくとも、無住の地ではなく、開拓を試みた弥生人の姿を捉えることができると言えるのではないだろうか。

3. 古墳時代

古墳時代前期は、多くの遺跡が調査されており、人々の居住が始まるようである。上新田中道東遺跡、福島曲戸遺跡、福島大光坊遺跡、福島飯塚遺跡、上之手八王子遺跡(31)などで前期集落の調査が行われている。これら集落の住居は、S字甕と呼ばれているS字状口縁台付甕など東海西部に由来を持つ土器が伴っている。

上之手八王子遺跡では周溝を持つ竪穴住居が3軒調査されている。同類住居は、伊勢崎市北部に位置する三和工業団地で確認されているが、それ以外では上之手石塚Ⅲ遺跡、綿貫牛道遺跡、上新田中道東遺跡、横手早稲田遺跡、横手湯田遺跡、中内村前遺跡で確認されており、群馬県内の調査事例のほとんどが玉村町域を中心とする旧利根川流路と井野川に挟まれた前橋台地である。いずれの遺跡も、集落の中に2～3軒の割合で周溝を持つ竪穴住居が作られている。外周状の溝は、防水・防湿・排水機能を果たしていたと考えられる。集落内に特殊な住居を構築する意図は居住者の階層によるものと推定されるが、詳細は不明である。しかし、この地域の集落の一つの特徴と言える。

集落以外では、砂町遺跡(71)で北陸北東部に由来する千種甕を伴う溝が調査されている。

前期の墓域は、方形周溝墓が上新田中道東遺跡、福島飯塚遺跡、上之手石塚Ⅲ遺跡、赤城遺跡(23)などで確認されている。群馬県では方形周溝墓に続き、前方後方墳が構築される。元島名將軍塚古墳、前橋八幡山古墳などである。玉村町域では、28基の方形周溝墓が確認された下郷遺跡(17)で、前方後方墳が調査されている。この古墳は、出土する遺物から元島名將軍塚古墳より新しい古墳と言える。その後、県内では前方後円墳が作られる。この時期の前方後円墳は前橋天神山古墳が有名である。墳長約126m、粘土槨の主体部を有し、主体部からは三角縁神獣鏡をはじめとした銅鏡5面、銅鏃・鉄鏃などが出土している。墳丘の規模や豊富な出土遺物から、地域最上位層の首長の墓と見られる。玉村町域では墳長推定約80mの下郷天神塚古墳、墳丘の削平が著しいが墳長約45m以上を有していた川井稲荷山古墳が前期前方後円墳として築造される。下郷天神塚古墳では胴体部分に顔面をイメージした線刻が施されている装飾器台埴輪が出土

している。川井稲荷山古墳では三角縁神獸鏡が出土している。

これら玉村地域の古墳被葬者は、前橋天神山古墳に葬られた大首長の元、玉村町域内のそれぞれの地域を治めていたであろうと想像される。尚、最近の研究では川井稲荷山古墳を下郷天神塚古墳に先行する時期に築造された古墳と捉える見方もあるが、同時代性も含め、築造時期は今後慎重に検討する必要がある。

中期の古墳は5世紀後半に築造された、前方後円墳とされる梨ノ木山古墳(56)がある。他に横堀遺跡で5世紀後半の円墳が検出されている。

後期に入ると、町域の東南部を中心に箱石古墳群(96)、小泉古墳群、川井・茂木古墳群(97)・(98)、角瀧古墳群(99)などの群集墳が作られるようになる。小泉古墳群は、現利根川東岸に位置するが、その存在は近年の発掘調査によるまで明らかになっていなかった。これは、利根川を流下した1783(天明3)年の浅間山噴火に伴う土石流で厚く覆われていた為である。小泉大越3号墳は6世紀中葉に築造された全長46mの前方後円墳で、両袖型横穴式石室を有する。金銅製冠片などの装身具・単鳳環頭大刀などの武具・環状鏡板付轡など副葬品が多く残されていた。烏川左岸沿いに作られた川井・茂木古墳群でも、古墳の築造は6世紀が中心である。川井・茂木古墳群は、昭和41年から44年にかけて群馬大学教育学部史学第二研究室により20基の古墳が調査された。主な古墳として、浄土山古墳(52)、萩塚古墳(49)などが挙げられる。浄土山古墳は調査時現状で約54mの前方後円墳で両袖型横穴式石室を有している。萩塚古墳は調査時現状直径約28mの円墳で、主体部は両袖型横穴式石室である。小泉古墳群、川井・茂木古墳群で挙げたこれら古墳はいずれも石室に6世紀初頭の榛名山噴火に起源する角閃石安山岩を使用している。これら角閃石安山岩を石室に使用する古墳は利根川中流域に多くみられる。玉村町域以外では前橋市富士山古墳、同山王金冠塚古墳、同長山古墳、同大屋敷古墳、伊勢崎市安堀古墳、同阿弥陀古墳などがある。右島和夫氏は共通した造墓技術者集団の手によるものであると分析している^{註1}。その中心となっているのは墳丘・石室・副葬品の規模、どれをとっても最大である観音山古墳の被葬者である。観音山古墳からは豊富な半島系の遺物が出土している。角閃石安山岩を有

している前方後円墳の多くから半島系の遺物が出土している。更なる研究が期待されるが、観音山古墳を中心とした利根川中流域の勢力が想定できる。

玉村町域の群集墳の広がりからは、古墳時代中期・後期の集落域が想定できる。しかし、玉村町域ではこの時期の集落域の調査事例は少ない。福島飯塚遺跡、松原Ⅲ遺跡(78)、角瀧城遺跡等から住居が検出されただけである。しかし、福島飯玉遺跡(6)、斉田中耕地遺跡(4)、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡(8)、福島大光坊遺跡、福島久保田遺跡(68)、福島曲戸遺跡などでは、6世紀代の榛名山噴火に伴うHr-FPあるいはHr-FA泥流下の小区画水田が検出されている。このような状況を考えると、玉村町域の古墳時代中期・後期の集落の存在は確実であると言えよう。

4. 奈良・平安時代

玉村町域を含む前橋台地の地域は、古代には那波郡として整備された。平安時代に成立した『和名類聚抄』によると、那波郡は朝倉(あさくら)、田後(たじり)、倭文(しどり)、葦束(いらつか)、鞆田(さやた)、池田(いけた)、佐味(さみ)の7郷からなるとある。

現在の地名を考えれば、前橋市東南部の朝倉町周辺が朝倉郷、朝倉町に近い前橋市山王町には「田後」の地名が残っており、山王町周辺が田後郷、伊勢崎市上ノ宮町倭文神社周辺が倭文郷、伊勢崎市葦塚町周辺が葦束郷、鞆田(さやた)から斉田(さいた)に、ヤガイに変化したと考えられる。玉村町齊田や高崎市下齊田が比定できる。池田郷と佐味郷は比定できる地名がない。玉村町誌通史編上巻によると、池田は水の淀んだような低地で、利根川と烏川合流付近の伊勢崎南部を比定している^{註2}。佐味郷は、高崎市新町に比定される緑野郡佐味郷がある。もともと一つの地域であったのが、烏川の流れて二つに分断されたとみれば対岸の玉村町域が佐味郷に当たると想定している。

尚、地域内には延喜式内社の倭文神社と火雷神社が鎮座している。この二社は現在の利根川流路により分断されているが、ほぼ南北線上に位置しており、現在の地名でも倭文神社が伊勢崎市上ノ宮町、火雷神社が佐波郡玉村町下ノ宮であり、その関係性が指摘できる。

奈良時代の集落は、福島稲荷木遺跡(11)や上之手八王

子遺跡をはじめ、古墳時代同様微高地上に立地している。本遺跡でも、微高地に位置するV区から奈良時代の住居3軒が検出されている。平安時代の集落は斉田竹之内遺跡(5)、福島飯塚遺跡、上之手八王子遺跡や行人塚遺跡(32)など玉村町のほぼ全域で確認されている。

集落の分布と呼応するように、この時期は水田開発が進んでいる。上新田中道東遺跡では、9世紀後半から末時期と考えられる洪水層で埋もれた用水路と、その東側に広がる水田痕跡が検出されている。時代は下がるが、1108(天仁元)年の浅間山噴火による軽石、浅間B軽石(As-B)で埋没した水田遺構は本遺跡を含む、玉村町域のほぼ全域で調査されており、この地域の沖積地が水田耕作化されていたと考えられる。

一万田遺跡では直径1mの柱穴からなる柵列が検出され、瓦も出土した。9世紀前半から中ごろを中心とする時期に郡衙や寺院などの公的な施設の存在が想定できる。福島曲戸遺跡からは「村長」と線刻された紡錘車や多数の緑釉陶器が出土している。福島飯塚遺跡の大溝からは「家」などの文字が記された墨書土器250点以上が出土している。また、上飯島芝根Ⅱ遺跡からは銅印の出土が知られている。このように律令制に関すると考えられる遺物が町域内から出土している。

砂町遺跡と上福島尾柄町遺跡(73)からは推定東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)と考えられる幅員4mの道路状遺構が検出されている。

5. 中世

1108(天仁元)年の浅間山噴火は、上野国に甚大な被害を及ぼした。中右記には、上野国司が国中の田や畑が壊滅状態であると宮中に伝えた様子が記されている。この噴火の沙石・降灰により、那波郡とその七郷が被害を受け、解体してしまったことはAs-Bに覆われた水田が多数調査されていることから想像に難くない。この災害の復興は荘園という形でなされている。12世紀中ごろには伊勢神宮収領の玉村御厨が構えられていたとする記録がある。これは、玉村が保と呼ばれる国衙領として成立し、保の一部収益が伊勢神宮へ寄進され、伊勢神宮領の玉村御厨となったようである。

平安時代末から中世にかけて赤城南麓一帯で勢力があったのは藤原秀郷を祖とする集団である。そのなかで

も玉村町北東部・伊勢崎市南西部で勢力をふるったのは、藤原兼行を祖とする那波氏である。平安時代末は武士が台頭し、源平に分かれ、覇を競っていた時代である。那波弘澄は、保元の乱では源義朝に、源平内乱では木曾義仲に従っている。平家物語の義仲加茂六条河原合戦の一節には「上野国住人那波太郎広純(弘澄)を先として、其勢百騎ばかりにはすぎざりけり」とある。木曾義仲はこの合戦にて討ち死にしたが、那波弘澄もここで討ち死にしたであろうと考えられる。

鎌倉時代上野国は、上野国奉行人安達氏の支配下にあった。その安達氏の被官となっていたのが、玉村氏である。玉村氏は、玉村御厨成立に寄与した開発領主であると考えられている。また、安達氏は玉村町内に屋敷を持っており、角淵城、高崎市八幡原の八幡原居館がそれであると言われている。角淵八幡宮は初代上野国奉行安達盛長の勧請と伝えられている。

安達氏が霜月騒動により没落すると、玉村御厨は北条氏により没収され、北半分(北玉村)は円覚寺に寄進されている。南半分(南玉村)は北条得宗家の領地となった。

室町時代関東一円は鎌倉公方が支配しており、関東管領上杉氏が補佐していた。玉村の地はその上杉氏に守護された那波氏の領域であった。

戦国時代に入ると、玉村町域を含む上野国一帯が、上杉・武田・後北条氏の3氏による争奪戦の様相を呈した。

玉村町域では、山崎一氏の長年に渡る研究や群馬県教育委員会が実施した城郭分布調査により明らかになったように、城郭や周囲に堀をめぐる屋敷が多数存在することがよく知られている。『群馬県の中世城館跡』によれば中世の城郭・屋敷として玉村町域内で34か所を掲載している。近年の発掘調査でも多数の館跡が検出されている。本遺跡周辺では、斉田中耕地遺跡で13世紀後半から14世紀、斉田竹之内遺跡で15世紀から16世紀、福島飯玉遺跡で14世紀後半から15世紀後半、福島飯塚遺跡で15世紀ごろ、福島大島遺跡で15世紀ごろの中世屋敷に関わる遺構・遺物がそれぞれ確認されている。

生産遺構は、浅間B軽石の上層に浅間B軽石を含む黒褐色土が堆積しており、その層を浅間B混土層と言っているが、その土層に埋没した遺構が確認されている。斉田中耕地遺跡、斉田竹之内遺跡、福島飯玉遺跡、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡では畝間遺構が検出されている。

本遺跡に隣接する上新田中道東遺跡では、水田アゼ痕跡や耕作痕跡が検出されており、中世の耕作が想定される。

- 註1 右島和夫 2009 「6. 玉村地域の横穴式古墳の諸特徴とその歴史的背景」玉村町教育委員会『川井・茂木古墳群』p.126-p.137
註2 玉村町 1992 『玉村町誌』p.79

6. 近世

豊臣秀吉により後北条氏が滅亡し、徳川氏の時代となった。近世の玉村領域は江戸幕府の天領、前橋藩の藩領が複雑に入り組んでいた。

近世に入り、検地により土地制度が確立されると、幕府や諸藩は積極的に領内の農業開発を進めるようになった。玉村町域でも、新田開発が進められた。

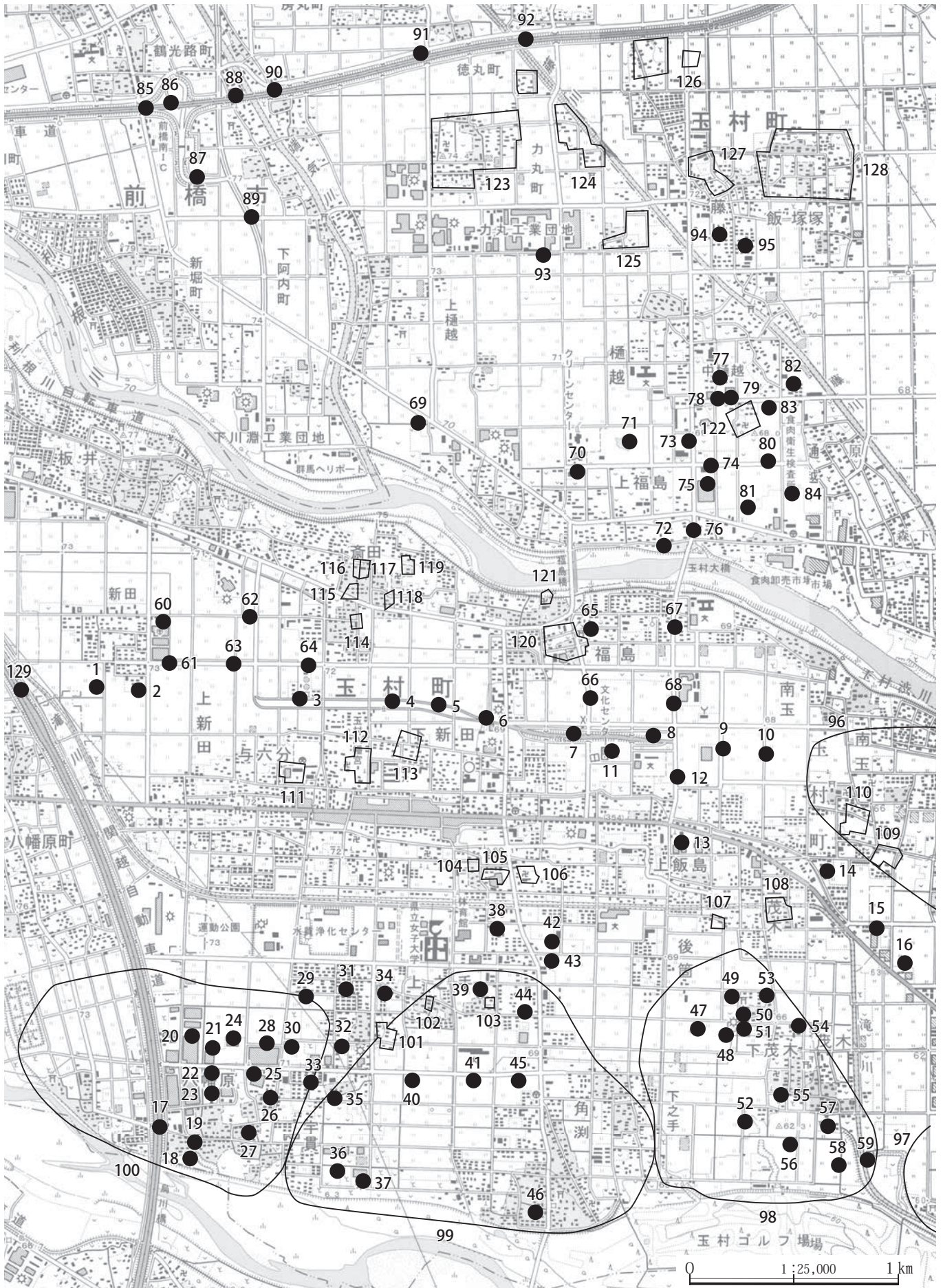
関東郡代伊奈忠次は、長く続いた戦乱により疲弊し、水利に恵まれないまま未開の地となっていた町域中央部に目をつけ、用水を引くことにより新田開発を行った。このとき完成した用水が本遺跡Ⅳ区とⅤ区の間を流れる滝川用水である。本遺跡の位置する上新田は、伊奈忠次が新たに開墾した田であることからこの地名がついている。忠次は、近隣の村民を移住させて集落を形成し、新田村が成立した。新田村はその後玉村八幡宮を境とし、上新田村・下新田村に分かれた。

日光例幣使街道が整備されると上新田村・下新田村は玉村宿となり、宿場町として栄えた。

中世に続き近世の屋敷も数多く形成されている。伊奈忠次の陣屋が置かれたとされる玉村館(113)や、与六屋敷(111)、内田屋敷(104)などがこれに当たる。

1783(天明3)年の浅間山噴火は、利根川を伝わり泥流が玉村町域を襲った。上福島中町遺跡(72)では、この泥流により埋没した建物跡が検出され、陶磁器をはじめとする多種・多様の生活用具が出土している。樋越諏訪前遺跡では、家屋・植え込み・土手畠が検出された。利根添遺跡では、矢川の堤防と下之宮と南玉の村境の役割を兼ねていたと考えられる土手が泥流下に埋没した形で確認されている。

この泥流被害は玉村町域全域に及び、被災した田畑を天地返しによって復旧する溝が、本遺跡をはじめ多くの遺跡で見つかっている。



第5図 周辺遺跡位置図

(国土地理院1/25,000地形図「高崎」平成22年12月発行「前橋」平成22年12月発行「大胡」平成22年12月発行「伊勢崎」平成15年2月発行を使用)

第2章 遺跡の立地と環境、標準土層

第2表 主な周辺遺跡

No	遺跡名	縄文	弥生	古墳			奈良		中世			近世			備考	参考文献
				前	中	後	住	生	住	生	住	生	住	生		
				住墓生	住墓生	住墓生	住	生	敷	水田	島	敷	その他	水田		
1	上新田新田西遺跡						○			○		○	○	本報告の遺跡。	68	
2	上新田赤塚遺跡							○							68	
3	上新田中道東遺跡	●	●	○	□			○		○			○	草創期有舌尖頭器、As-B上からの耕作痕。	69	
4	齊田中耕地遺跡					○		○	○	○			○	奈良・平安洪水下田。	58	
5	齊田竹之内遺跡						○	○	○	○			○	福島飯玉遺跡に西接。	59	
6	福島飯玉遺跡	●					○	○	○	○		○	○		56	
7	福島飯塚遺跡		●	□	○		○	○	○			○	×	弥生土坑。平安大溝。	54・55	
8	福島大島遺跡					○	○	○	○	○			○		57	
9	福島味噌袋遺跡						○	○	○				○			
10	南玉二丁目遺跡						○	○	○				○			
11	福島稲荷木遺跡				○		○	○						古墳時代住居時期不明、稲荷木Ⅱ近接。	41	
12	福島大光坊遺跡	●		○	△		FP	○	○	○	○		○	縄文中期土坑。	51	
13	上飯島芝根Ⅱ遺跡		○				○	○		○				弥生中期住居。	30	
14	十王堂Ⅲ遺跡						○	○							38	
15	十王堂・十王堂Ⅱ遺跡									○					24	
16	三境遺跡									○	○				15	
17	下郷遺跡			○	□			○							60	
18	上之手石塚Ⅲ・Ⅳ遺跡	●	●	○		○	○	○	○			○		弥生土坑。	9・10	
19	八幡原城								○					城郭、一城二郭。	62	
20	八幡原赤塚遺跡													時期不明の溝。	29	
21	八幡原赤塚Ⅲ遺跡														32	
22	八幡原赤塚Ⅱ遺跡						○	○				○			32	
23	赤城遺跡			□					○			○		下郷遺跡・宇貫城に隣接。	37	
24	赤城Ⅱ遺跡													古墳土坑、平安土坑。	12	
25	宇貫館(1)													外郭、東西・南北100m、2重堀。	64・67	
26	宇貫館(2)													2重堀。	64・67	
27	宇貫城													外郭100m、内郭50m、2重堀、戸口。		
28	宇貫遺跡			○			○	○	○					中世井戸・土坑墓。	20	
29	上之手地区遺跡群(1)							○	○			○			19	
30	上之手地区遺跡群(2)							○							19	
31	上之手八王子遺跡			○			○	○	○				○		2	
32	行人塚遺跡						○	○						奈良・平安の溝・土坑。	38	
33	行人塚Ⅲ遺跡						○								23	
34	中郷遺跡														38	
35	新井屋敷								○					堀、土居、石仏。	63	
36	蟹沢Ⅱ～Ⅳ遺跡	●										○			7・8	
37	蟹沢遺跡								○	○		○	○		27	
38	中袋遺跡											○		奈良の土坑。	25	
39	上之手立野遺跡						○	○			○	○			36	
40	宮ノ下遺跡											○	○		22	
41	若王子Ⅱ遺跡									○		○	○		22	
42	曲田遺跡						○							平安の井戸、溝。	17	
43	曲田遺跡Ⅱ							○							18	
44	木暮屋敷								○					南北約30～40m、東西約45m、堀。	66	
45	天神巡りⅢ遺跡				○		○					○	○	土師器焼成坑。	22	
46	角瀨城遺跡	●		○	○	○			○	○		○	○	縄文時代の前期土坑・円墳・中世の土坑・近世の井戸。	28	
47	軍配山古墳			○										円墳、径約40m、高さ約6m。	3	
48	玉村町第3号墳													円墳か。横穴式石室。	3	
49	萩塚古墳				○									6世紀後半、方墳か。	3	
50	下茂木神明Ⅱ遺跡														19	
51	神明遺跡								○	○		○			38	
52	浄土山古墳			○		○								前方後円墳。(前期・後期に再利用)	3	
53	滝川南遺跡						○					○			21	
54	下茂木地区遺跡群														19	
55	下茂木屋敷											○				
56	梨ノ木山古墳				○									前方後円墳。(後期)	3	

第2節 遺跡周辺の歴史環境

No	遺跡名	縄文	弥生	古墳			奈平		中世		近世		備考	参考文献
				前	中	後	住	住	住	住	住	住		
				住墓生	住墓生	住墓生	住	住	屋敷その他	水田	水田	水田		
57	オトカ塚古墳			○ □		○							前方後円墳。(後期)	34
58	殿台山古墳												前方後円墳か。	3
59	房子塚古墳					○							前方後円墳か。	3
60	中道西遺跡								○					14
61	中道西Ⅱ遺跡								○	○			古墳時代溝。	14
62	一本木遺跡								○		○			35
63	中道東遺跡								○	○			古墳時代溝。	40
64	蛭堀東遺跡								○			○	古墳時代溝。	40
65	天神古墳												円墳か。	3
66	福島稲荷木Ⅳ遺跡			□		FA	○		○					41
67	福島曲戸遺跡	●	○			○	○		○ ○		○ ○		縄文中期土坑、土師器焼成遺構、As-A復旧水田。	47
68	福島久保田遺跡	●	○			FP	○	○ ○	○ ○		○ ○		東側に久保田遺跡近接。	51
69	柄田添遺跡						○ ○		○		○ ○			3
70	金免遺跡								○					1
71	砂町遺跡	●	○						○		○		縄文草創期有舌尖頭器、古墳時代用水路。	39
72	上福島中町遺跡	●					○	○ ○		○	○		平安時代の土坑・古墳時代の溝。	52
73	上福島尾柄町遺跡						○		○				推定東山道駅跡。(牛堀・矢野原ルート)	46
74	尾柄町Ⅱ遺跡												奈良道路。時期不明の土坑・溝。	6
75	尾柄町遺跡								○					5
76	上福島遺跡								○			○ ○	古墳時代の溝、ピット。	46
77	松原Ⅱ遺跡								○ ○		○			38
78	松原Ⅲ遺跡					○							古墳時代中期の石製模造品の製作跡。	31
79	松原遺跡													31
80	中之坊遺跡								○		○		奈良平安時代道路状遺構。	39
81	一万田遺跡	● ●					○						弥生後期再葬墓、平安柵列、江戸畑。	33
82	原浦遺跡			○			○				○		古墳前期溝。	16
83	原浦Ⅱ遺跡			○			○	○			○		古墳時代前期の溝。	13
84	神人村Ⅱ遺跡		●				○ ○		○				弥生土坑。	4
85	村中遺跡	●						○ ○	○ ○	○ ○			As-C混土下水田。	48
86	西田遺跡	●			○		○ ○	○ ○	○ ○	○ ○			As-C混土下水田。	48
87	下阿内壱町畑遺跡					FA		○ ○	○ ○	○ ○	○			44
88	鶴光路榎橋遺跡							○ ○	○ ○	○ ○	○			50
89	下阿内前田遺跡	●						○ ○	○ ○	○ ○	○		As-C混土下水田。	44
90	徳丸高堰遺跡		○					○ ○	○ ○	○ ○			4～6世紀中頃水田。	53
91	徳丸仲田遺跡	● ●	○ ○			○ FA	○ ○		○ ○	○ ○			縄文草創期土器・石器、古墳時代前期大水路、新井屋敷。	45・49
92	西善尺司遺跡	●	○ □			FA	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○				43
93	横丹遺跡								○					42
94	藤川前遺跡								○					11
95	前通遺跡								○ ○					26
96	箱石古墳群					○								
97	川井古墳群					○								61
98	茂木古墳群					○								61
99	角洲古墳群					○								
100	若宮・八幡原古墳群					○								
101	原屋敷							○		○			東西130m、南北80m、2重堀、土居、板碑、井戸。	66
102	重田屋敷							○						66
103	秋山屋敷							○					東西約70m、堀。	66
104	内田屋敷							○		○			東西90m、南北150m、2重堀、土居、戸口。	66
105	宮下屋敷							○					堀。	
106	観照寺屋敷							○					2重堀、土居。	
107	後箇屋敷							○					東西・南北75m、2重堀。	
108	茂木館本館(田口屋敷)							○					東西・南北150m、2重堀。	
109	南玉館(原武屋敷)							○					2重堀、土居、戸口。	
110	玉村城(南玉原屋敷)							○					城郭、堀、土居、寺五輪塔、板碑。	

第2章 遺跡の立地と環境、標準土層

No	遺跡名	縄文	弥生	古墳			奈	平	中世		近世		備考	参考文献
				前	中	後			住	生	住	生		
				住墓生	住墓生	住墓生			住	住	敷 屋 敷 の 他	水 田 敷		
111	与六屋敷									○			東西120m、南北100m、堀。	
112	玉村八幡館										○		堀、土居。	
113	玉村館										○		東西150m、南北120m、堀、戸口。	
114	石原屋敷								○		○		東西65m、南北75m、堀。	
115	町田屋敷								○				東西・南北40m、堀。	
116	温井西屋敷								○					
117	温井東屋敷								○					
118	田村屋敷								○				東西70m、南北55m、堀。	
119	田口下屋敷								○				東西75m、南北100m、2重堀。	65
120	福島砦								○				堀。	
121	宇津木館								○					
122	阿左美館								○				東西・南北130m、2重堀、戸口。	
123	力丸城								○				堀、土居、戸口、根小屋。	
124	東力丸環濠遺構群								○				堀。	
125	徳丸東環濠遺構群								○				堀。	
126	横堀環濠遺構群								○		○		6箇所遺構、堀、土居。	
127	藤川環濠集落												堀。	
128	飯塚環濠集落								○		○			
129	下齊田遺跡		● ●					●						70

主な文献No

参考文献

1. 玉村町教育委員会1989『金免遺跡』
2. 玉村町教育委員会1991『上之手八王子遺跡』
3. 玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』
4. 玉村町教育委員会1992『神人村Ⅱ遺跡』
5. 玉村町教育委員会1992『尾柄町遺跡』
6. 玉村町教育委員会1992『尾柄町Ⅱ遺跡』
7. 玉村町教育委員会1993『蟹沢Ⅱ遺跡』
8. 玉村町教育委員会1993『蟹沢Ⅳ遺跡』
9. 玉村町教育委員会1993『上之手石塚Ⅲ遺跡』
10. 玉村町教育委員会1993『上之手石塚Ⅳ遺跡』
11. 玉村町教育委員会1993『藤川前遺跡』
12. 玉村町教育委員会1993『赤城Ⅱ遺跡』
13. 玉村町教育委員会1996『原浦Ⅱ遺跡』
14. 玉村町教育委員会1996『中道西遺跡(第1次・第2次調査)』
15. 玉村町教育委員会1997『三境遺跡・三境Ⅱ遺跡』
16. 玉村町教育委員会1998『原浦遺跡』
17. 玉村町教育委員会1999『曲田遺跡』
18. 玉村町教育委員会1999『曲田Ⅱ遺跡』
19. 玉村町教育委員会1999『上之手地区遺跡群(1)・(2)稲荷森遺跡 天神塚遺跡 宇貫地区遺跡群 稲荷山遺跡群 下茂木地区遺跡群 下茂木神明Ⅱ遺跡 上新田地区遺跡群』
20. 玉村町教育委員会1999『宇貫遺跡』
21. 玉村町教育委員会1999『滝川南遺跡』
22. 玉村町教育委員会2000『宮ノ下遺跡 若王子Ⅱ遺跡 天神巡りⅢ遺跡』
23. 玉村町教育委員会2000『行人塚Ⅲ遺跡』

24. 玉村町教育委員会2000『十王堂・十王堂Ⅱ遺跡』
25. 玉村町教育委員会2000『中袋遺跡』
26. 玉村町教育委員会2000『前通遺跡』
27. 玉村町教育委員会2001『蟹沢遺跡』
28. 玉村町教育委員会2001『角瀨城遺跡』
29. 玉村町教育委員会2002『角瀨伊勢山遺跡・角瀨伊勢山Ⅳ遺跡 下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡 八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』
30. 玉村町教育委員会2002『上飯島芝根遺跡 上飯島芝根Ⅱ遺跡』
31. 玉村町教育委員会2003『松原Ⅲ遺跡』
32. 玉村町教育委員会2003『八幡原赤塚Ⅲ遺跡』
33. 玉村町教育委員会2003『一万田遺跡』
34. 玉村町教育委員会2003『オトカ塚遺跡』
35. 玉村町教育委員会2004『一本木遺跡』
36. 玉村町教育委員会2004『内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡』
37. 玉村町教育委員会2004『赤城遺跡』
38. 玉村町教育委員会2006『神明遺跡 行人塚遺跡 十王堂Ⅲ遺跡 中郷遺跡 松原Ⅱ遺跡 杉山遺跡』
39. 玉村町教育委員会2007『砂町遺跡(第1～3次調査) 尾柄町Ⅲ遺跡 中之坊遺跡』
40. 玉村町教育委員会2008『中道東遺跡 中道西Ⅱ遺跡 蛭堀東遺跡(第2次調査) 中道東Ⅱ遺跡 中道東Ⅱ遺跡(第2次調査)』
41. 玉村町教育委員会2009『福島稲荷木遺跡(第1～3次調査) 福島稲荷木Ⅱ遺跡 福島稲荷木Ⅲ遺跡』
42. 玉村町教育委員会2009『横丹遺跡』
43. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『西善尺司遺跡』
44. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『下阿内壱町畑遺跡 下阿内前田遺跡』
45. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『徳丸仲田遺跡(1)』
46. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『上福島尾柄町遺跡』
47. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『福島曲戸遺跡 上福島遺跡』
48. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『西田遺跡 村中遺跡』
49. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『徳丸仲田遺跡(2)』
50. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『鶴光路榎橋遺跡』
51. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『福島久保田遺跡 福島大光坊遺跡』
52. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『上福島中町遺跡』
53. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『徳丸高堰遺跡』
54. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『福島飯塚遺跡(1)』
55. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『福島飯塚遺跡(2)』
56. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『福島飯玉遺跡』
57. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『福島大島遺跡』
58. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『斉田中耕地遺跡』
59. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2011『斉田竹之内遺跡』
60. 群馬県教育委員会1980『下郷』
61. 玉村町教育委員会2009『川井・茂木古墳群』
62. 山崎 一『群馬県古城壘址の研究』上巻 1978
63. 玉村町教育委員会『上之手石塚Ⅳ遺跡』1993
64. 玉村町教育委員会『宇貫遺跡』1999
65. 玉村町教育委員会『田口下屋敷遺跡』2000
66. 玉村町教育委員会『内田屋敷遺跡 原屋敷遺跡 上之手立野遺跡』2004
67. 玉村町教育委員会『宇貫Ⅱ遺跡(第1次・第2次調査)』2005
68. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『上新田新田西遺跡 上新田赤塚遺跡』
69. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『上新田中道東遺跡』
70. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1987『下斉田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡』

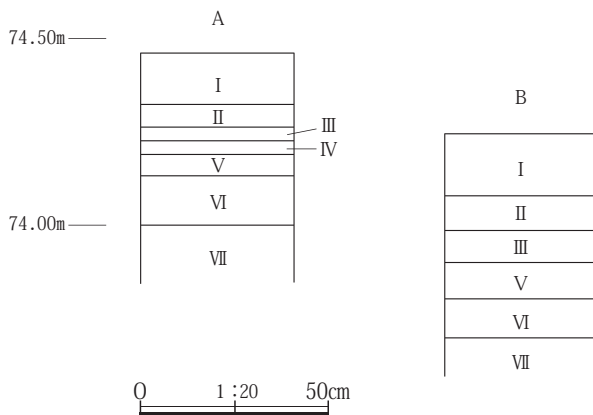
第3節 標準土層

基本土層はⅥ区では西壁で確認をした。Ⅶ区ではテストピットを5カ所設定し、確認したが本稿では代表の1カ所を提示する。(第6図)。基本土層は以下の通りである。

- I層 表土、耕作土
- Ⅱ層 As-A混入耕作土
- Ⅲ層 As-B混入暗褐色土

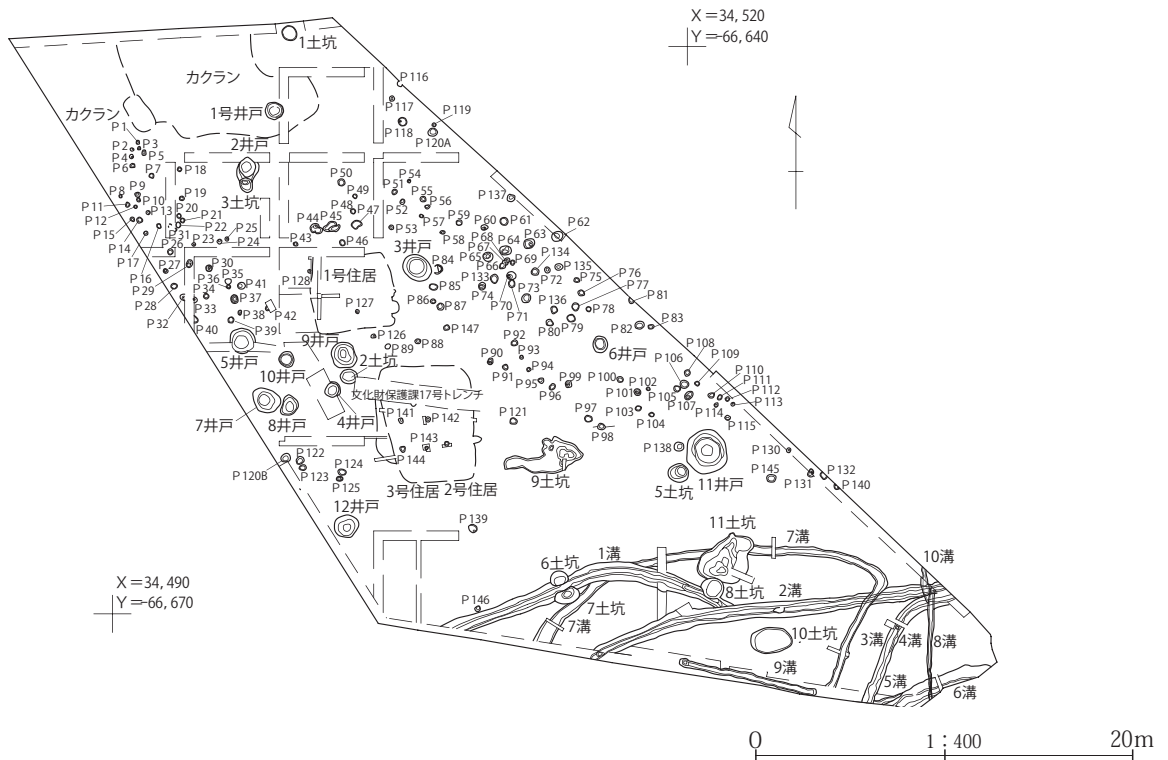
- Ⅳ層 As-B
- Ⅴ層 As-C混入黒褐色土
- Ⅵ層 黒褐色土
- Ⅶ層 暗褐色土

As-AはⅡ層土で確認されたほか、復旧坑などで確認されている。As-BはⅡ区を中心にその堆積が確認された。As-Cは、一次堆積は確認されなかったが、Ⅴ層中に混入が確認された。調査は、As-B降下後のⅢ層を確認面とした第1面及び、As-Bの降下以前のⅤ層を確認面とした第2面で行った。Ⅶ層はローム漸移層であった。



第6図 基本土層

第3章 遺跡の概要



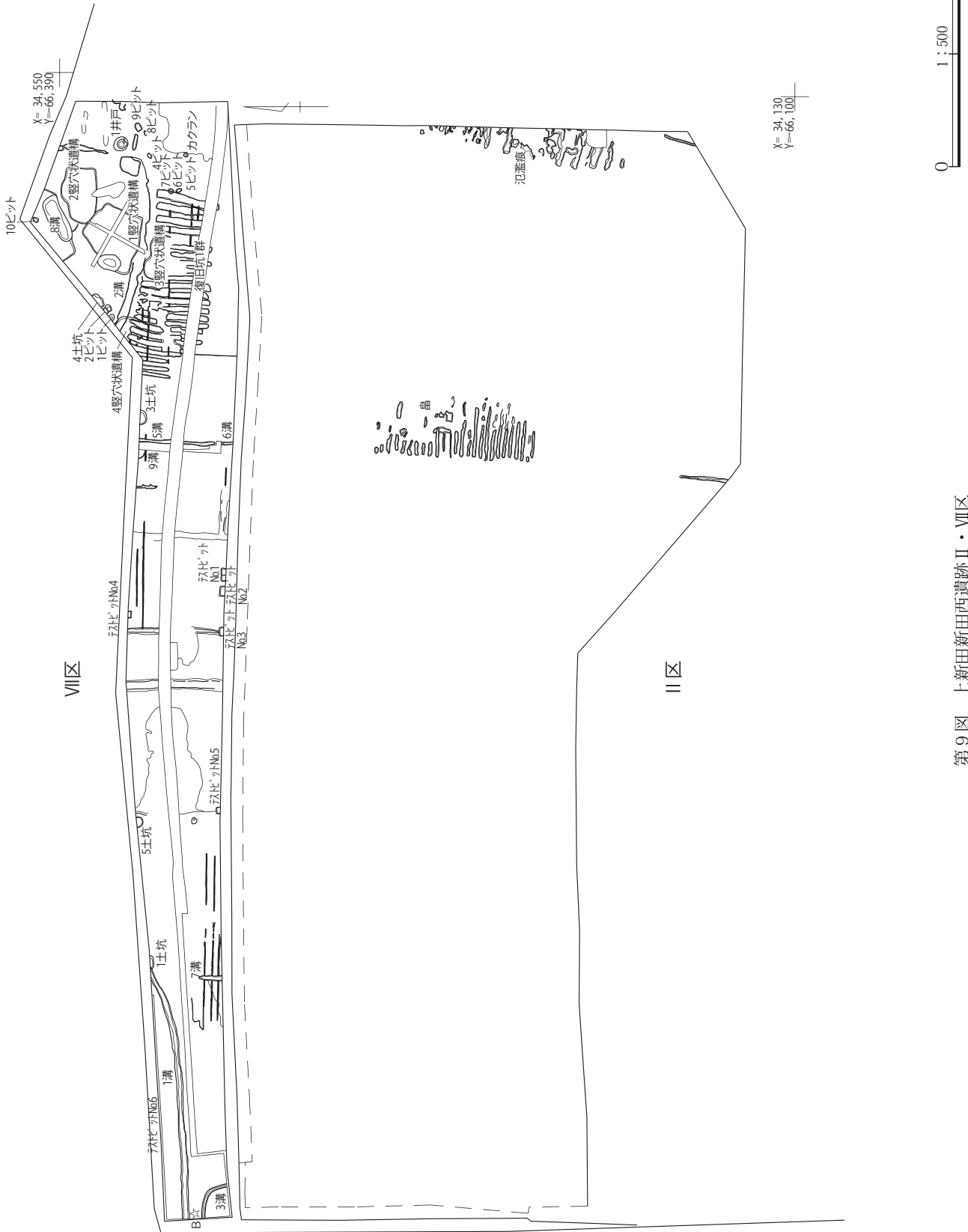
第7図 上新田新田西遺跡Ⅶ区

X=34,550
Y=66,390



0 1:500 20m

第8図 上新田新田西遺跡I・VI区



第9図 上新田新田西遺跡Ⅱ・Ⅶ区

第4章 中近世の遺構と遺物

第1節 概要

本章で報告するのは、表土直下及び浅間Bテフラより上位で確認した遺構である。Ⅵ区・Ⅶ区どちらからも遺構が確認された。検出された遺構の種類と数は、第3表の通りである。Ⅵ区・Ⅶ区は低地帯になっており、掘立柱建物などは確認されなかった。

土坑はⅥ区・Ⅶ区あわせて8基が確認された。中・近世に属する井戸は今回調査では確認されなかった。本線部の報告書である第479集上新田新田西遺跡・上新田赤塚遺跡では、Ⅴ区5号井戸の遺物が未掲載であったので、本報告書で遺構図及び所見を再掲載するとともに、報告する。Ⅴ区は本遺跡において唯一の微高地となっており、古代の住居などが確認されている。Ⅴ区では井戸が12基確認されているが、いずれも中世のものである。石組みを施されていた井戸も確認された。

溝はⅥ区で6条、Ⅶ区で5条確認された。Ⅵ区2号溝はⅠ区1号溝と同一遺構であった。天明3年の浅間山噴火被災に伴う復旧坑はⅦ区で2群が確認された。本線部分ではⅡ区で確認されている。また、Ⅱ区で確認されている近世の氾濫痕は、今回の調査では確認されなかった。

第2節 土坑・ピット

土坑・ピットは、円形もしくは円形に準ずる形状を呈している遺構を土坑・ピットとした。規模の違いで名称を分けているが、形態・機能等に差がないと考えられるためここでは同じ分類とする。中近世の土坑はⅥ区6基・Ⅶ区2基を調査した。ピットはⅥ区8基・Ⅶ区1基を調査した。ピットの規模・形状等は第4表にまとめた

通りである。土坑について詳述する。

Ⅵ区1号土坑(第10図、P L . 9)

位置 X=34,526、Y=-66,328

形状・規模 平面形状は円形を呈する。径0.85mを測る。深さは0.23mであった。

方位 ー

重複 なし

土層 レンズ状に堆積しており自然埋没土と考えられる。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Bの混土を含んでいる。このことから、中世に属する遺構と考えられる。

Ⅵ区2号土坑(第10図、P L . 9)

位置 X=34,531、Y=-66,376

形状・規模 平面形状は楕円形を呈する。長軸0.38m、短軸0.29mを測る。深さは0.07mであった。

方位 N-84°-E

重複 なし

土層 土層中にロームブロック等が含まれていないことから、自然埋没土と考えられる。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Aを含んでいる。このことから、近世以降に属する遺構と考えられる。

Ⅵ区3号土坑(第10図、P L . 9)

位置 X=34,531、Y=-66,375

形状・規模 平面形状は不整形を呈するものと考えられる。長軸1.49mを測る。深さは0.10mであった。

第3表 中近世検出遺構一覧

調査区/遺構	掘立柱建物	土坑	ピット	井戸	堀	溝	耕作痕	復旧坑
上新田新田西遺跡Ⅰ区						7		
上新田新田西遺跡Ⅱ区								
上新田新田西遺跡Ⅴ区				12				1
上新田新田西遺跡Ⅵ区		6	8			6		
上新田新田西遺跡Ⅶ区		2	1	1		5		2
合計		8	9	13		18		3

方位 N-83°-W

重複 なし

土層 レンズ状に堆積しており自然埋没土と考えられる。

出土遺物 なし

所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。埋没土中にAs-Aを含んでいる。このことから、近世以降に属する遺構と考えられる。

Ⅵ区4号土坑(第10図、P L . 9)

位置 X=34,533、Y=-66,379

形状・規模 平面形状は楕円形を呈する。長軸0.93m、短軸0.44mを測る。深さは0.12mであった。

方位 N-15°-E

重複 なし

土層 土層中にロームブロック等が含まれていないことから、自然埋没土と考えられる。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Aを含んでいる。このことから、近世以降に属する遺構と考えられる。

Ⅵ区5号土坑(第10図、P L . 9)

位置 X=34,534、Y=-66,383

形状・規模 平面形状は不整形を呈するものと考えられる。長軸(1.65)m、短軸0.85m～0.58mを測る。深さは0.16mであった。

方位 N-10°-E

重複 なし

土層 ロームブロックを含み、人為的に埋没させたと考えられる。

出土遺物 なし

所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。埋没土中にAs-Aを含んでいる。このことから、近世以降に属する遺構と考えられる。

Ⅵ区6号土坑(第10図、P L . 9)

位置 X=34,533、Y=-66,386

形状・規模 平面形状は不整形を呈するものと考えられる。長軸(2.66)m、短軸1.14m～0.46mを測る。深さは0.06mであった。

方位 N-9°-E

重複 なし

土層 ロームブロックを含み、人為的に埋没させたと考えられる。

出土遺物 なし

所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。埋没土中にAs-Aを含んでいる。このことから、近世以降に属する遺構と考えられる。

Ⅶ区1号土坑(第11図、P L . 10)

位置 X=34,542、Y=-66,469

形状・規模 平面形状は方形を呈するものと考えられる。長軸1.15m、短軸(0.32)mを測る。深さは0.32mであった。

方位 N-85°-E

重複 なし

土層 As-A混土層を多量に含み、人為的に埋没させたと考えられる。

出土遺物 なし

所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。As-Aが多量に含まれていることから、復旧坑の端部であると考えられる。

Ⅶ区3号土坑(第11図、P L . 10)

位置 X=34,543、Y=-66,420

形状・規模 平面形状は方形を呈するものと考えられる。長軸1.27m、短軸(0.58)mを測る。深さは0.21mであった。

方位 N-87°-W

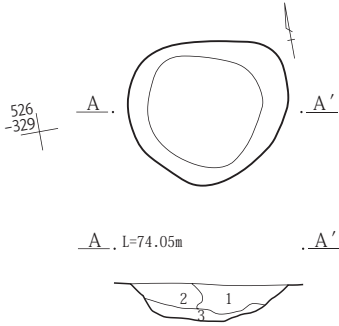
重複 なし

土層 As-A混土層を多量に含み、人為的に埋没させたと考えられる。

出土遺物 なし

所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。As-Aが多量に含まれていることから、復旧坑の端部であると考えられる。

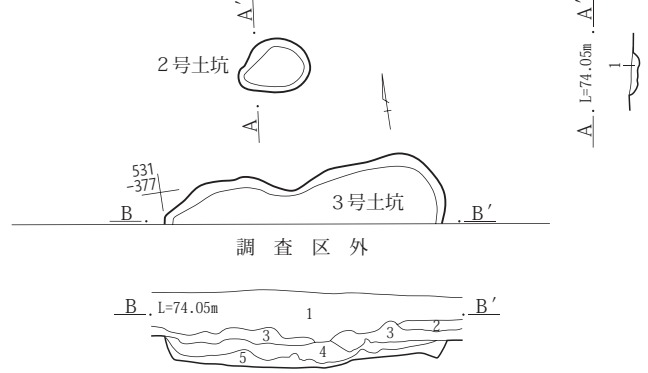
VI区 1号土坑



VI区 1号土坑 A-A'

- 1 灰黄褐色砂質土 As-B混入。
- 2 As-Bと1層土ブロックの混入 1層に比べAs-Bの割合多い。
- 3 黒褐色砂質土 As-B多量に含み1層土ブロック混入。

VI区 2・3号土坑



VI区 2・3号土坑

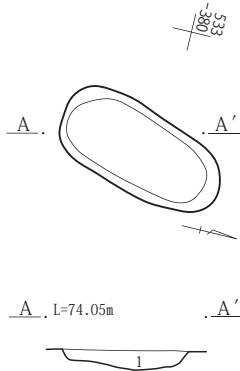
A-A'

- 1 褐灰色砂質土 粘性あり、褐灰色粘質土ブロック・黒褐色粘質土・As-A混入する。

B-B'

- 1 道路本線工事盛土
- 2 明黄褐色砂質土 酸化鉄含む。
- 3 褐灰色砂質土 粘性あり。As-A、酸化鉄と若干の黒褐色土含む。
- 4 褐灰色砂質土 As-A混入。粘性あり。
- 5 黄灰色砂質土 As-A、酸化鉄粒及び黒褐色土含む。粘性弱し。

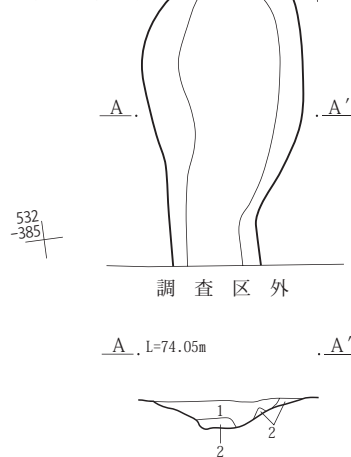
VI区 4号土坑



VI区 4号土坑 A-A'

- 1 黄灰色砂質土 黒色粘質土粒・As-A少量含む。

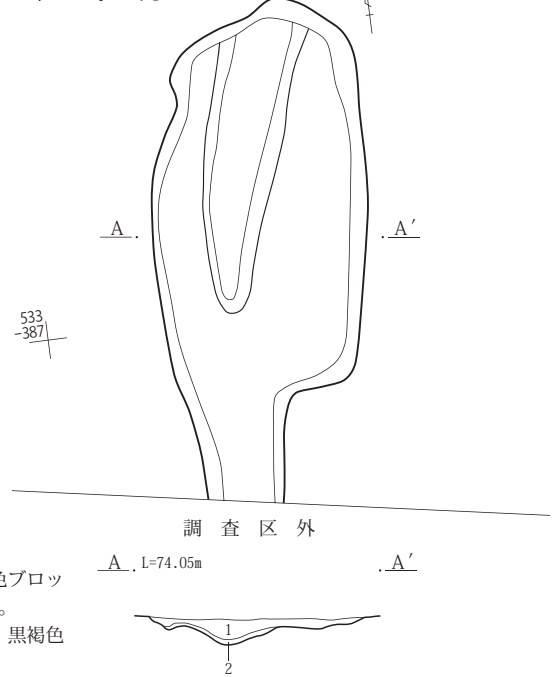
VI区 5号土坑



VI区 5号土坑 A-A'

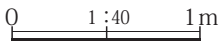
- 1 褐灰色砂質土 黄褐色ブロック・黒褐色ブロック含む。As-A少量含む。
- 2 黄灰色土 やや砂質だが粘性あり。黒褐色ブロック含む。

VI区 6号土坑



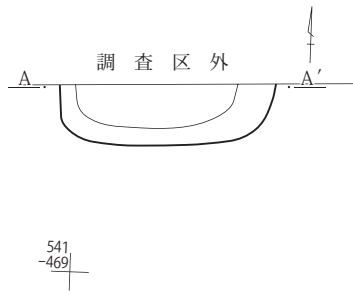
VI区 6号土坑 A-A'

- 1 褐灰色砂質土 黄褐色ブロック・黒褐色ブロック含む。As-A少量含む。
- 2 黄灰色土 やや砂質だが粘性あり。黒褐色ブロック含む。



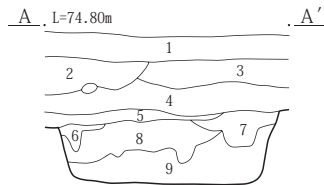
第10図 VI区 1～6号土坑

Ⅶ区 1号土坑

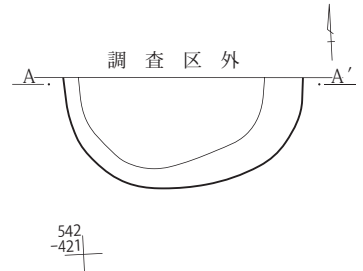


Ⅶ区 1号土坑 A-A'

- 1 暗灰黄色砂質土 現代耕土
- 2 黄灰色土 旧耕土、やや砂質。As-A粒多く含む。
- 3 黄灰色土 旧耕土、やや砂質。2層に類するが、As-A粒少ない。
- 4 褐灰色土 As-A粒若干含む。
- 5 灰色土 As-A含む。
- 6 褐灰色土 As-Aを多量に含む。
- 7 暗灰褐色土 As-Aを含む、粘性・しまりあり。
- 8 暗灰色土 6層に類するが、6層より粘性強い。
- 9 暗灰色土 As-Aを多量に含む。

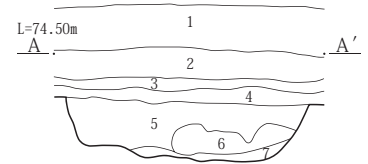


Ⅶ区 3号土坑



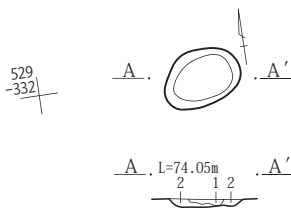
Ⅶ区 3号土坑 A-A'

- 1 暗灰黄色砂質土 現代耕土
- 2 黄灰色土 旧耕土、やや砂質。As-A粒多く含む。
- 3 褐灰色土 As-A粒若干含む。
- 4 灰色土 As-A含む。
- 5 褐灰色土 As-Aを多量に含む。
- 6 暗灰褐色土 As-Aを含む、粘性・しまりあり。
- 7 暗灰色土 6層に類するが、6層より粘性強い。

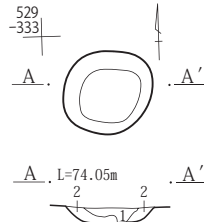


第11図 Ⅶ区 1・3号土坑

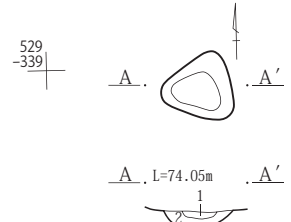
Ⅵ区 1号ピット



Ⅵ区 2号ピット



Ⅵ区 3号ピット



Ⅵ区 1号ピット A-A'

- 1 暗灰褐色土 As-Aまばらに含む。
- 2 暗褐色土 酸化鉄粒含む。

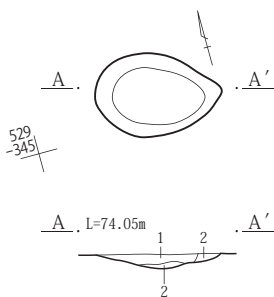
Ⅵ区 2号ピット A-A'

- 1 暗灰褐色土 As-Aまばらに含む。
- 2 暗褐色土 酸化鉄粒含む。

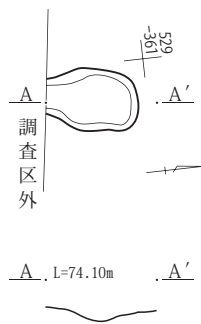
Ⅵ区 3号ピット A-A'

- 1 暗灰褐色土 As-Aまばらに含む。
- 2 暗褐色土 酸化鉄粒含む。

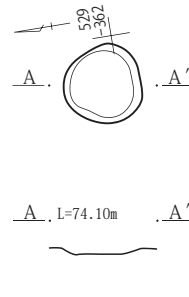
Ⅵ区 4号ピット



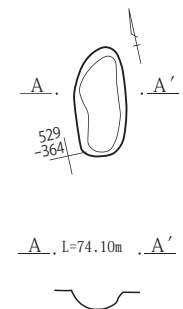
Ⅵ区 5号ピット



Ⅵ区 6号ピット

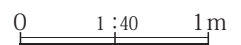


Ⅵ区 7号ピット

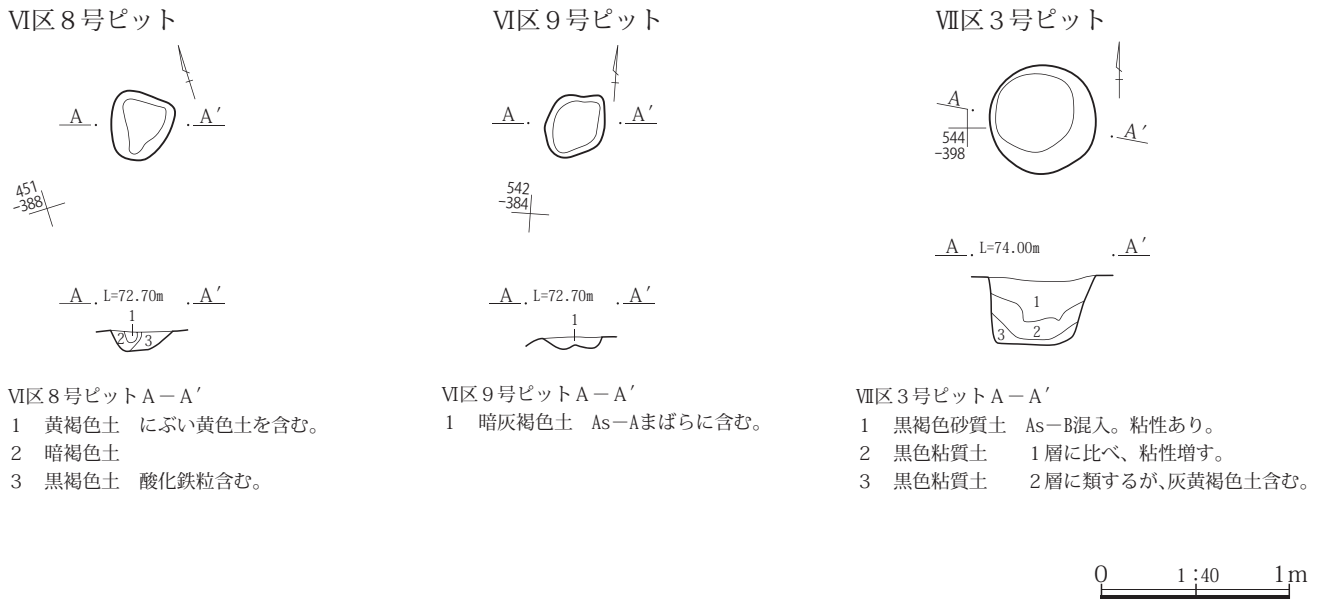


Ⅵ区 4号ピット A-A'

- 1 暗灰褐色土 As-Aまばらに含む。
- 2 黒褐色土 酸化鉄粒含む。



第12図 Ⅵ区 1～7号ピット



VI区8号ピット A-A'
 1 黄褐色土 にぶい黄色土を含む。
 2 暗褐色土
 3 黒褐色土 酸化鉄粒含む。

VI区9号ピット A-A'
 1 暗灰褐色土 As-Aまばらに含む。

VII区3号ピット A-A'
 1 黒褐色砂質土 As-B混入。粘性あり。
 2 黒色粘質土 1層に比べ、粘性増す。
 3 黒色粘質土 2層に類するが、灰黄褐色土含む。

第13図 VI区8・9号ピット・VII区3号ピット

第4表 中世ピット一覧

遺構名称	形状	位置			規模(m)		備考
		X座標	Y座標	長軸(径)	短軸	深さ	
VI区1号ピット	楕円形	X=34,529	Y=-66,332	0.43	0.32	0.03	
VI区2号ピット	円形	X=34,529	Y=-66,333	0.47	-	0.07	
VI区3号ピット	不整形	X=34,529	Y=-66,339	0.37	0.34	0.08	
VI区4号ピット	楕円形	X=34,530	Y=-66,345	0.67	0.46	0.04	
VI区5号ピット	不明	X=34,529	Y=-66,361	(0.50)	0.34	0.06	
VI区6号ピット	円形	X=34,529	Y=-66,363	0.42	-	0.03	
VI区7号ピット	楕円形	X=34,529	Y=-66,364	0.59	0.29	0.10	
VI区8号ピット	方形	X=34,542	Y=-66,388	0.37	0.33	0.10	
VI区9号ピット	方形	X=34,543	Y=-66,384	0.35	0.32	0.04	
VII区3号ピット	円形	X=34,544	Y=-66,398	0.57	-	0.35	

第3節 井戸

第479集上新田新田西遺跡・上新田赤塚遺跡では、未報告であったV区5号井戸の遺物を報告する。併せて、遺構及び所見について再掲載する。

V区5号井戸(第14図、P.L.16)

位置 X=34,526、Y=-66,328

形状・規模 平面形状は円形を呈する。径1.15mを測る。深さは1.50mであった。

方位 -

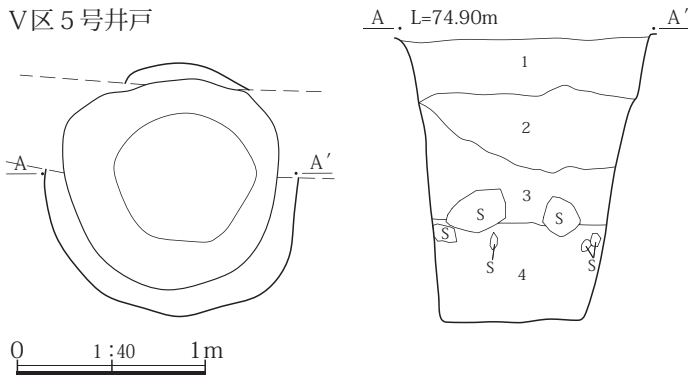
重複 なし

土層 ブロック土を多く含み、人為的に埋戻されたものと考えられる。

出土遺物 常滑陶器甕1点・在地系土器片口鉢が出土している。

所見 常滑陶器甕は中世頃のものであり、片口鉢は14世紀中頃のものと思われることから、中世の遺構であると考えられる。

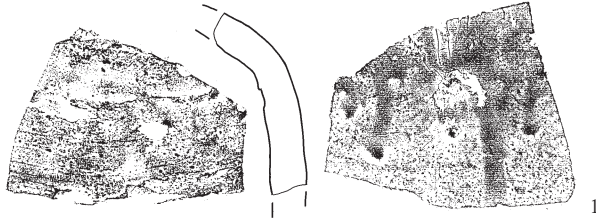
V区5号井戸



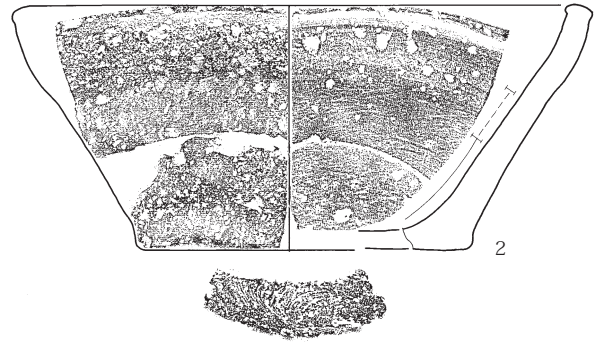
V区5号井戸A-A'

- 1 暗褐色土 全体に砂質でザラつきあり。粘性ややあり。径3～10cmの茶褐色ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 全体に砂質でザラつきあり。径5～15cmの茶褐色ブロックを含む。
- 3 黒褐色土を主体とした茶褐色土の小ブロックとの混土层。粘性やや強い。
- 4 黒褐色土 黒褐色の粘質土中に径1～2mmの茶褐色ブロックを含む。3層と比べブロックの粒は小さい。

0 1:40 1m



0 1:3 10cm



第14図 V区5号井戸・出土遺物

第4節 溝

溝は14条調査した。そのうちVI区では6条、VII区では5条が中近世の遺構である。溝から出土する遺物はほとんどなく、埋没土や出土面から帰属時期を考察した。

VI区1号溝(第15図、P L. 2)

位置 X=34,531～34,520、Y=-66,319～-66,315

VI区調査区西寄りを北西から南東に貫通している。

形状・規模 全長は(29.5)mである。溝の幅は、上端0.92m～0.51m・下端0.52m～0.22m・深さ0.18m～0.12mである。皿状を呈している。北西から南東に勾配がついており比高差は0.03m、勾配率は0.3%である。

方位 N-18°-W

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。埋没土中にブロックの混入が少ないため、自然埋没が想定される。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Bの混土を含んでおり、中世に属する遺構と考えられる。遺構の位置・規模から、I区5

号溝と同一遺構と考えられる。I区5号溝はI区北東部に位置し、北西から南東に貫通している。上端1.0m・深さ0.20mを測る。

VI区2号溝(第16・17・18図、P L. 2・16)

位置 X=34,531～34,523、Y=-66,332～-66,330

VI区中央部に位置し、調査区をやや北東から南西にかけて貫通している。

形状・規模 全長は(7.6)mである。溝の幅は、上端は3号溝と切合っており不明、下端0.35m～0.15m・深さ0.20m～0.17mである。皿状を呈している。南西から北東に勾配がついており比高差は0.02m、勾配率は0.3%である。

方位 N-16°-E

重複 3号溝と重複しているが、土層(第16図A-A')より2号溝の方が新しい。

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 在地系土器鍋1点・木片2点・木杭4点・砥石1点が出土しており、木片・木杭・砥石の7点を図示した。木片の樹種はスギであり、木杭はクリであった。

所見 埋没土中にAs-Aを含んでおり、近世以降に属する遺構と考えられる。遺構の規模・位置から、I区2号溝と同一遺構と推定される。I区2号溝はI区中央に位置し、上端0.70m・深さ0.10mを測る。VI区2号溝とは調査区境で約0.30mずれている。その理由は不明である。VI区2号溝南端に続く溝はI区で確認されていないことから同一遺構と推定される。

VI区3号溝(第16図、P L.2)

位置 X=34,531～34,523、Y=-66,332～-66,330
VI区中央部に位置し、調査区をやや北東から南西にかけて貫通している。

形状・規模 全長は(7.6)mである。溝の幅は、上端は2号溝と重複しているが(3.54)m～(2.12)mを測り、下端(3.10)m～(1.86)m・深さ0.10m～0.04mである。底面は凹凸が激しい。南西から北東に勾配がついており比高差は0.02m、勾配率は0.3%である。

方位 N-16°-E

重複 2号溝と重複しているが、土層断面観察(第16図A-A')により3号溝の方が古い。

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Bの混土を含んでおり、中世に属する遺構と考えられる。

VI区4号溝(第19図、P L.3)

位置 X=34,534～34,533、Y=-66,361～-66,360
VI区中央部西寄りに位置し、溝北端は調査区外へと続いている。

形状・規模 全長は(1.16)mである。溝の幅は、上端0.48m～0.36m・下端0.34m～0.28m・深さ0.08mである。逆台形状を呈している。比高差は調査した範囲では確認されなかった。

方位 N-3°-E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Bの混土を含んでおり、中世に属する遺構と考えられる。

VI区5号溝(第19図、P L.3)

位置 X=34,532～34,529、Y=-66,364～-66,363

VI区中央部西寄りに位置し、溝南端は調査区外へと続いている。

形状・規模 全長は(1.16)mである。溝の幅は、上端0.48m～0.36m・下端0.34m～0.28m・深さ0.11m～0.06mである。皿状を呈している。北から南に勾配がついており比高差は0.01m、勾配率は0.4%である。

方位 N-3°-E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 南端部の立ち上がりは不明瞭であった。第1面の調査で確認された遺構であり、中世以降に帰属すると考えられる。

VI区6号溝(第20図、P L.4)

位置 X=34,535～34,533、Y=-66,382～-66,381

VI区西側南寄りに位置している。

形状・規模 全長は(1.92)mである。溝の幅は、上端0.66m～0.28m・下端0.56m～0.20m・深さ0.03mである。皿状を呈している。比高差は調査した範囲では確認されなかった。

方位 N-3°-W

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Bの混土を含んでおり、中世に属する遺構と考えられる。

VII区2号溝(第20図、P L.5・16)

位置 X=34,546～34,544、Y=-66,413～-66,407

VII区東側に位置し、溝北端は調査区外へと続いている。

形状・規模 全長は(6.7)mである。溝の幅は、上端1.00m～0.68m・下端0.74m～0.56m・深さ0.05m～0.03mである。皿状を呈している。西から東に勾配がついており比高差は0.03m、勾配率は0.4%である。

方位 N-73°-W

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

第4章 中近世の遺構と遺物

出土遺物 須恵器碗底部片が1点出土している。器面の磨滅が激しいことから、流れ込んだものと見られる。
所見 南端部の立ち上がりは不明瞭であった。埋没土中にAs-Bの混土を多量に含んでおり、中世に属する遺構と考えられる。

Ⅶ区5号溝(第20図、P L.6)

位置 X=34,546～34,544、Y=-66,413～-66,407
 Ⅶ区調査区中央東寄りに位置し、溝北端は調査区外へと続いている。
形状・規模 全長は(5.6)mである。溝の幅は、上端0.38m～0.24m・下端0.28m～0.12m・深さ0.05mである。逆台形状を呈している。北から南に勾配がついており比

高差は0.11m、勾配率は1.9%である。

方位 N-2°-W

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

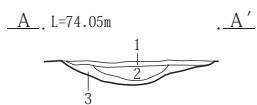
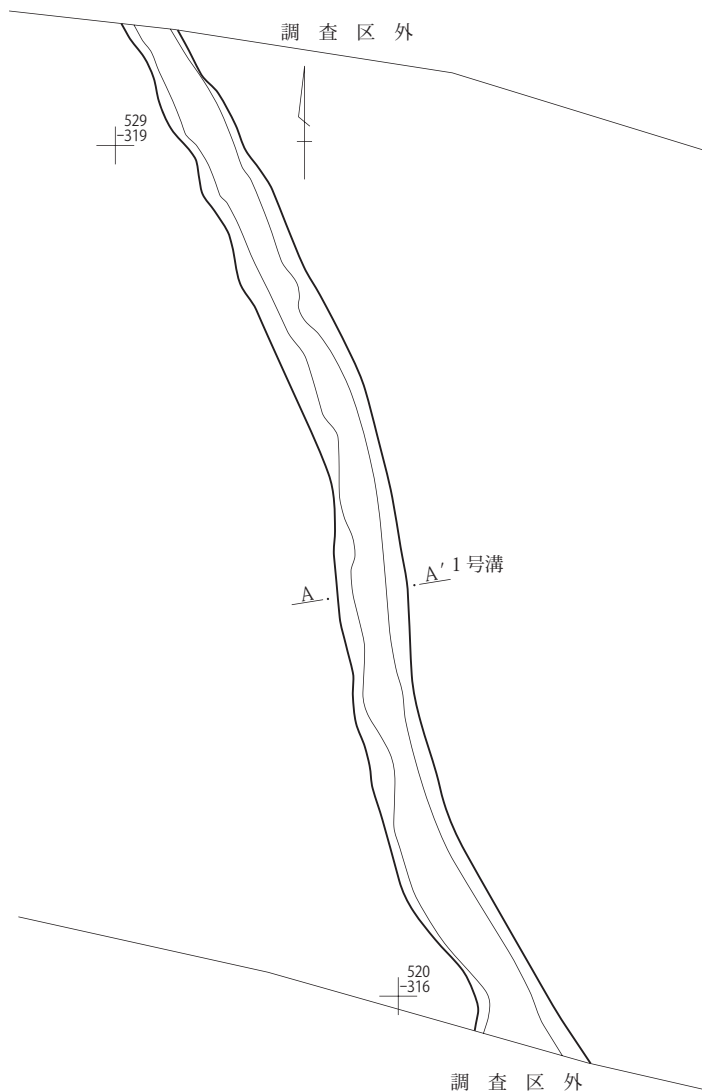
出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Aを含んでおり、近世に属する遺構と考えられる。

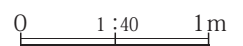
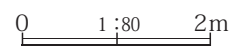
Ⅶ区6号溝(第20図、P L.6・7)

位置 X=34,536～34,535、Y=-66,423 Ⅶ区調査区中央東寄りに位置し、溝南端は調査区外へと続いている。
形状・規模 全長は(1.04)mである。溝の幅は、上端0.24m～0.20m・下端0.20m～0.16m・深さ0.13mである。

Ⅵ区1号溝



- Ⅵ区1号溝A-A'
- 1 にぶい黄褐色砂質土 As-B、ローム粒混入する。
 - 2 As-B 黒褐色土ブロック混入。
 - 3 黒色砂質土 As-B多量に含む。



第15図 Ⅵ区1号溝

方形状を呈している。比高差・勾配は不明。

方位 N-4°-W

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Aを含んでおり、近世に属する遺構と考えられる。

Ⅶ区7号溝(第20図、P L.7)

位置 X=34,538~34,536、Y=-66,471~-66,470

Ⅶ区中央部西寄りに位置し、溝南端は調査区外へと続いている。

形状・規模 全長は(2.40)mである。溝の幅は、上端0.50m~0.20m・下端0.32m~0.14m・深さ0.07m~0.01mである。皿状を呈している。南から北に勾配がついており比高差は0.02m、勾配率は0.8%である。

方位 N-3°-E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 第1面の調査で確認された遺構であり、中世以降に帰属すると考えられる。

Ⅶ区9号溝(第20図、P L.6)

位置 X=34,543~34,541、Y=-66,424~-66,423

Ⅶ区調査区中央東寄りに位置し、溝北端は調査区外へと続いている。

形状・規模 全長は(2.78)mである。溝の幅は、上端0.36m~0.22m・下端0.20m~0.10m・深さ0.08m~0.03mである。逆台形状を呈している。北から南に勾配がついており比高差は0.04m、勾配率は1.4%である。

方位 N-4°-E

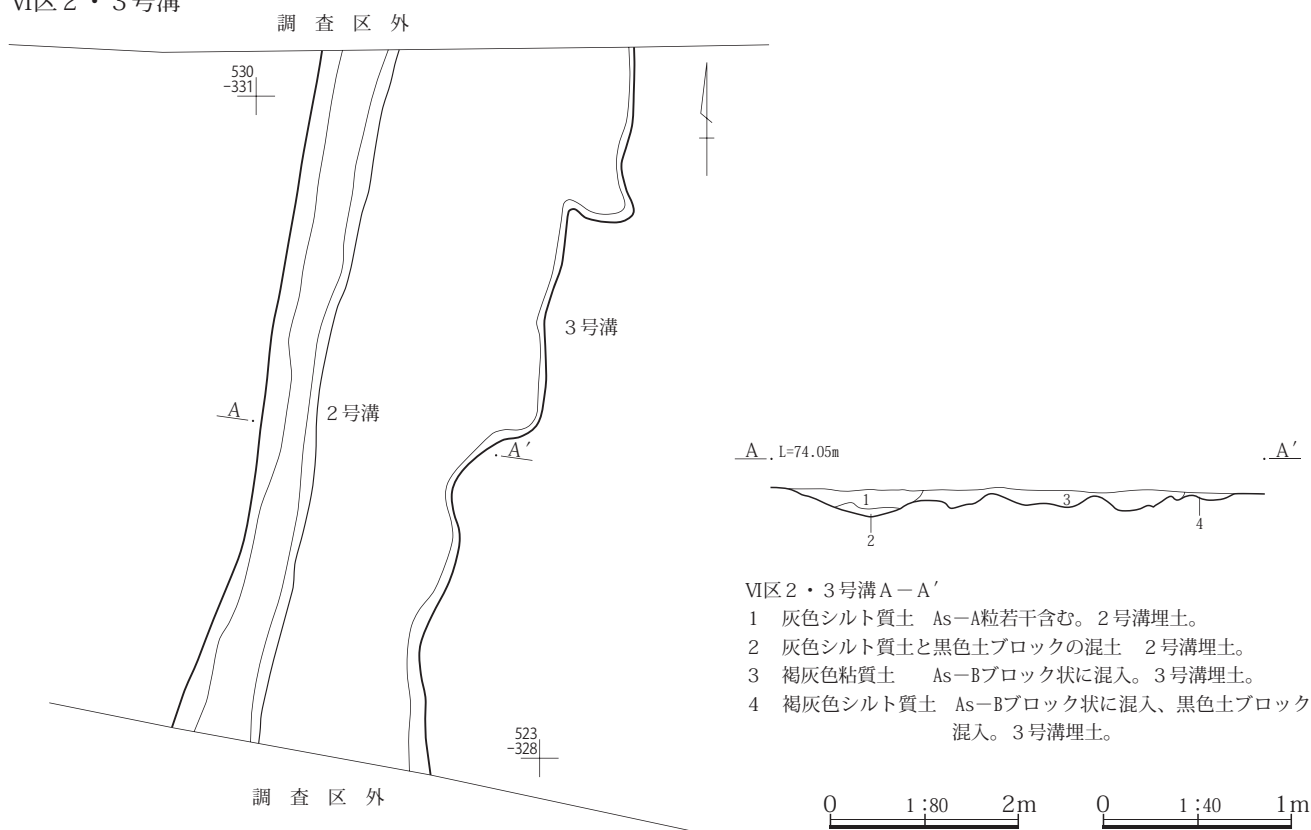
重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-Aを含んでおり、近世に属する遺構と考えられる。

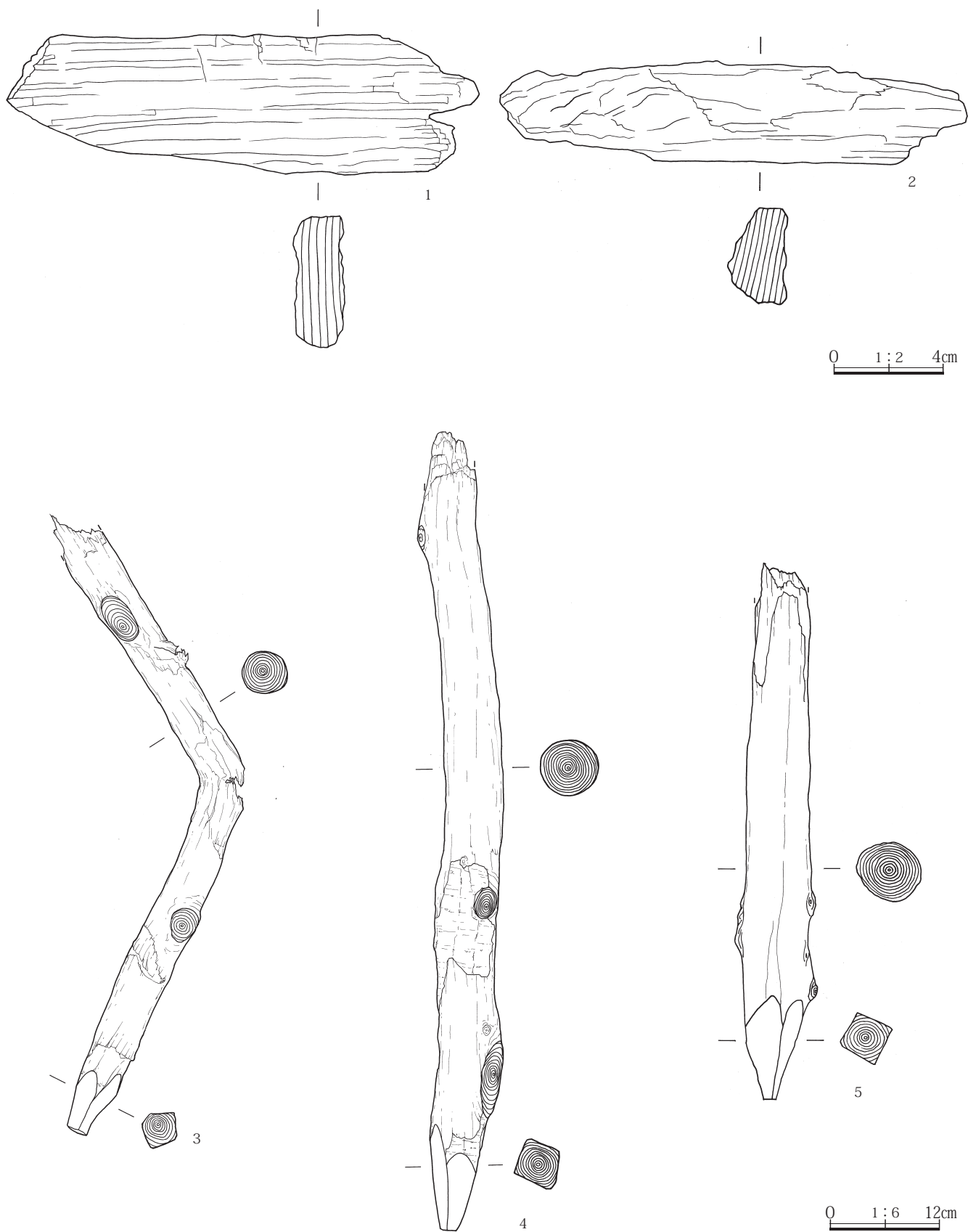
Ⅵ区2・3号溝



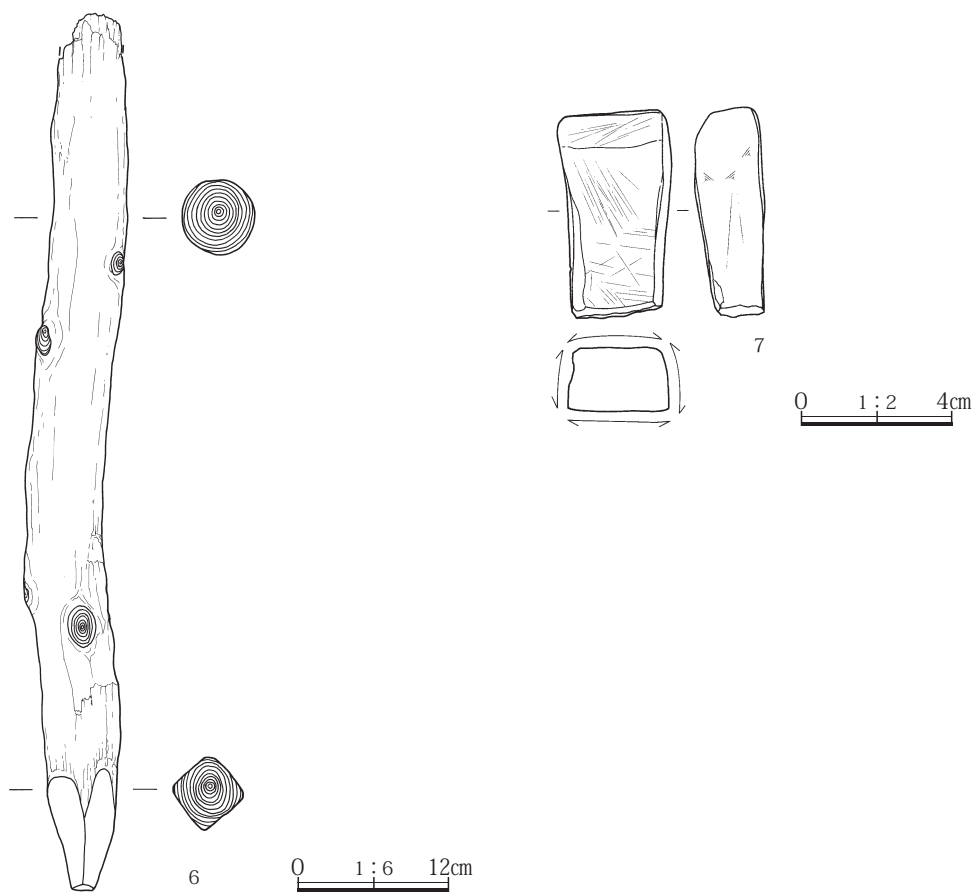
Ⅵ区2・3号溝 A-A'

- 1 灰色シルト質土 As-A粒若干含む。2号溝埋土。
- 2 灰色シルト質土と黒色土ブロックの混入。2号溝埋土。
- 3 褐灰色粘質土 As-Bブロック状に混入。3号溝埋土。
- 4 褐灰色シルト質土 As-Bブロック状に混入、黒色土ブロック混入。3号溝埋土。

第16図 Ⅵ区2・3号溝

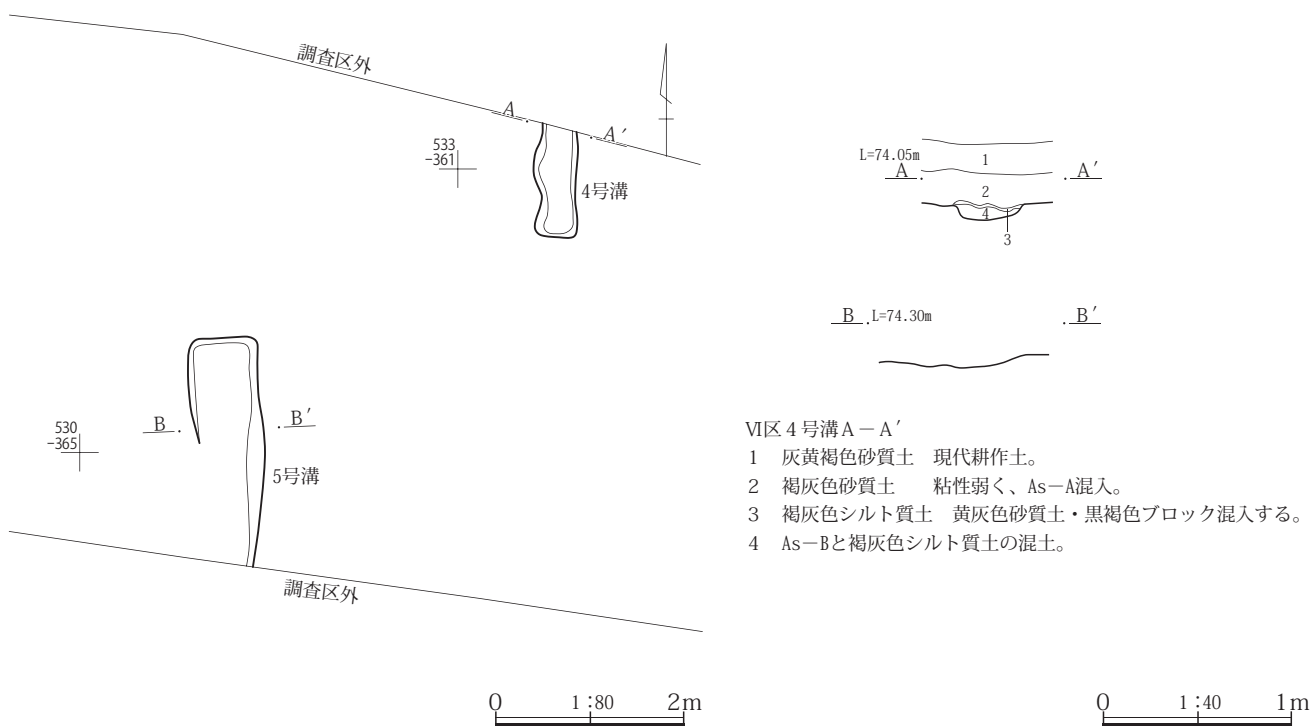


第17図 VI区2号溝出土遺物(1)



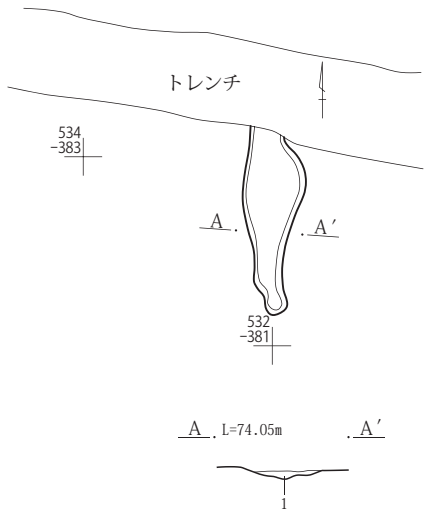
第18図 VI区2号溝出土遺物(2)

VI区4・5号溝



第19図 VI区4・5号溝

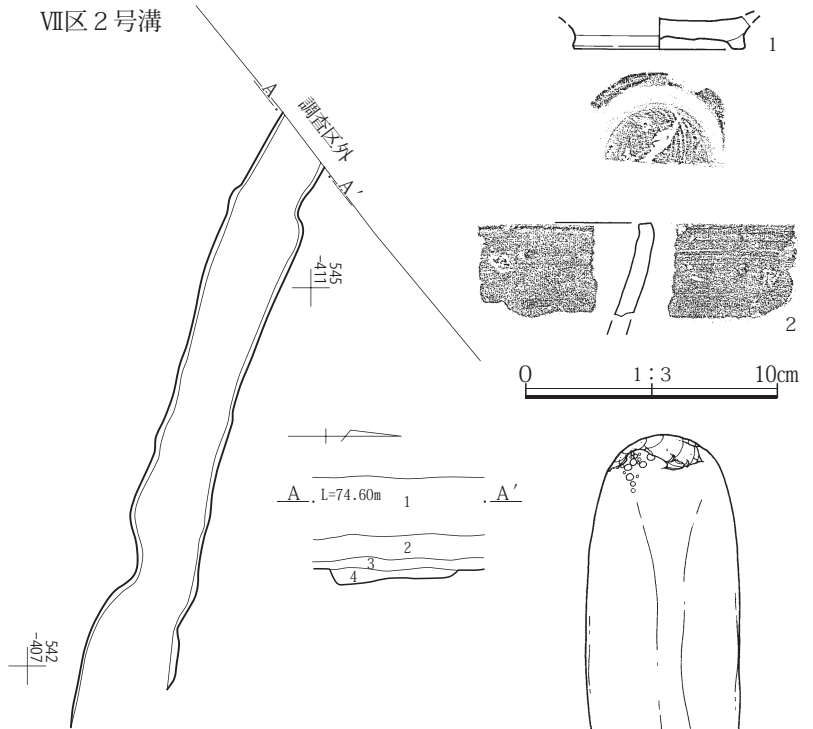
Ⅵ区6号溝



Ⅵ区6号溝A-A'

1 褐灰色砂質土 黒褐色ブロック・As-A含む。

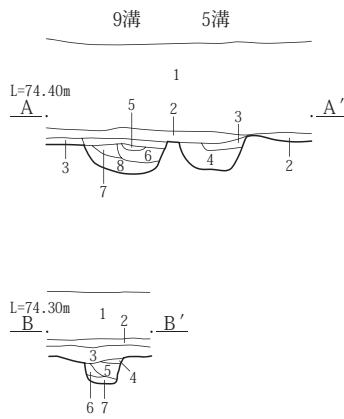
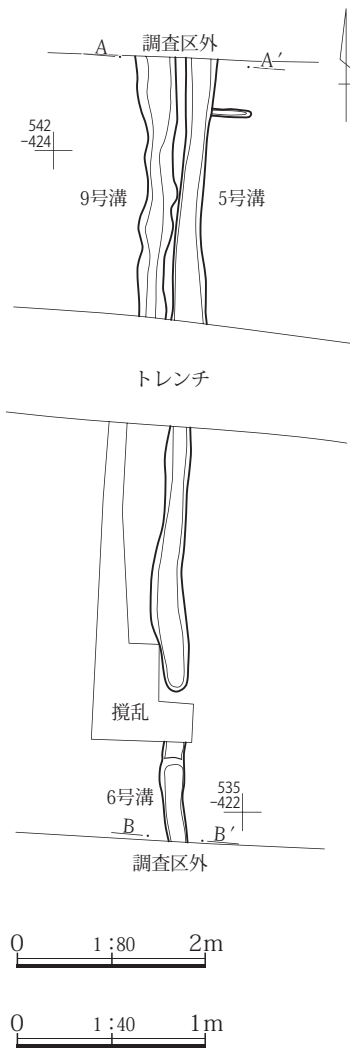
Ⅶ区2号溝



Ⅶ区2号溝A-A'

- 1 灰黄褐色砂質土 現表土及び盛土。
- 2 褐灰色砂質土 やや粘性あり。As-A混入する。旧耕土。
- 3 灰褐色土 As-B小ブロック、ローム粒含む。
- 4 黒褐色砂質土 As-B多量に混入する。

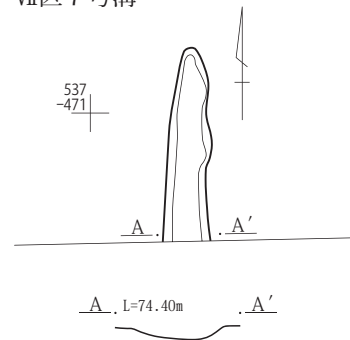
Ⅶ区5・6・9号溝



Ⅶ区5号溝・9号溝(近世面)A-A'

- 1 黒褐色土 現表土
- 2 褐灰色土 鉄分酸化層、しまりあり。
- 3 灰黄褐色土 しまり強い。
- 4 暗褐色土 As-A多量に含む。
- 5 にぶい黄褐色土 塊状の酸化鉄分含む。
- 6 灰黄褐色土 As-A含む。黄褐色粒含む。
- 7 灰黄褐色土 6層に類するがAs-A少ない。
- 8 褐灰色土 As-A少量含む。

Ⅶ区7号溝



Ⅶ区6号溝(近世面)B-B'

- 1 黒褐色土 現表土
- 2 褐灰色土 鉄分酸化層、しまりあり。
- 3 褐灰色土 黒褐色土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 As-A少量含む。
- 5 灰黄褐色土 As-A多量に含む。
- 6 黒色土 ブロック状に堆積する。
- 7 灰黄褐色土 黒色砂質土含む。As-A堆積層。

第20図 Ⅵ区6号・Ⅶ区2・5～7・9号溝・出土遺物

第5節 復旧坑

Ⅶ区において2か所の復旧坑群が確認された。いずれも浅間A軽石を多量に含む灰黄褐色土で埋まっており、天明三年の浅間山噴火に伴うA軽石の被災から復旧するために掘削された土坑群である。

Ⅶ区1群(第22図、P.L.8)

位置 Ⅶ区中央区に位置する。

形状・規模 全部で26基確認した。それぞれの坑の形状は帯状であった。端部を揃えるように意識して、掘削されていた。東西16.8m・南北7.8mである。もっとも大きな坑は全長(4.32)m、幅は上端0.84m～0.70m・下端0.62m～0.58m・深さ0.12m～0.06mである。もっとも小さな坑は全長(0.28)m、幅は上端0.34m～0.28m・下端0.26m～0.18m・深さ0.02mである。

方位 N-13°-E

重複 なし

出土遺物 なし

は帯状であった。端部を揃えるように意識して、掘削されていたが、調査区外に延びている。確認された範囲は東西3.00m・南北2.50mである。もっとも大きな坑は全長(1.19)m、幅は上端0.36m～0.24m・下端0.26m～0.12m・深さ0.08m～0.01mである。もっとも小さな坑は全長(0.50)m、幅は上端0.42m～0.30m・下端0.28m～0.18m・深さ0.01mである。

方位 N-80°-W

重複 なし

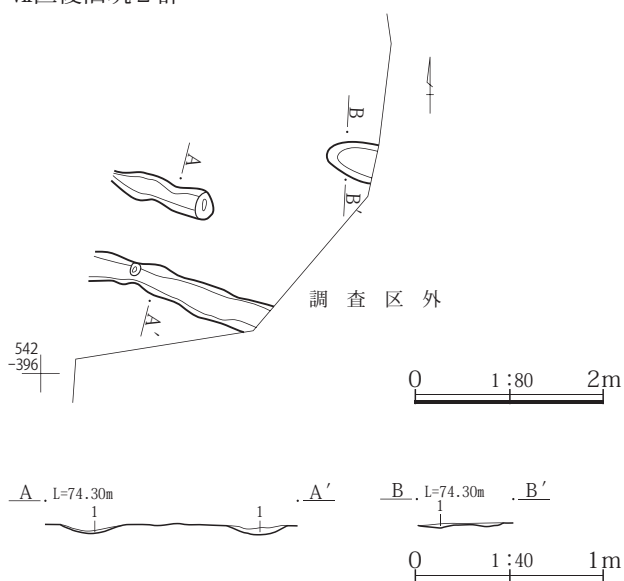
出土遺物 なし

Ⅶ区2群(第21図)

位置 Ⅶ区東端南寄りに位置する。

形状・規模 全部で3基確認した。それぞれの坑の形状

Ⅶ区復旧坑2群



Ⅶ区復旧坑2群 A-A'、B-B'
1 灰黄褐色土 As-A堆積層。

第21図 Ⅶ区復旧坑2群

第5章 古代の遺構と遺物

第1節 概要

本章で報告するのは、表土直下及び浅間Bテフラより下位で確認した遺構である。Ⅵ区・Ⅶ区どちらからも遺構が確認された。検出された遺構の種類と数は、第5表の通りである。Ⅵ区・Ⅶ区は低地帯になっており、住居などは確認されなかった。

Ⅶ区で竪穴状遺構が4基確認された。土坑はⅥ区・Ⅶ区あわせて6基が確認された。井戸は1基確認された。

溝はⅦ区で3条確認された。Ⅶ区では水田の痕跡が検出されたが、畔等は確認されなかった。

第2節 竪穴状遺構

竪穴状遺構はⅦ区で4基確認された。調査時は住居を想定して調査を行ったが、明瞭な住居プラン等が確認されず、竪穴状遺構とした。

Ⅶ区1号竪穴状遺構(第23・24図、P L.16)

位置 X=34,549～34,543、Y=-66,408～-66,402

Ⅶ区東端部中央に位置する。

形状・規模 形状は不整形を呈する。長軸5.06m、短軸4.50m、深さ0.05mを測る。

面積 19.52㎡

方位 N-30°-E

重複 2号竪穴状遺構と重複するが、1号竪穴状遺構の方が古い。

埋没土 埋没状況は不明である。

出土遺物 土師器大型製品片40点・中型製品片1点・小型製品片6点・土師器不明製品片38点、須恵器小型製品

片11点が出土した。須恵器甕1点・土師器甕1点を図示した。

所見 調査時、竪穴住居を念頭に置いたが明瞭なプランとならず竪穴状遺構とした。用途は不明である。須恵器片・土師器片が出土することから古代の遺構と考えられる。

Ⅶ区2号竪穴状遺構(第25・26図、P L.13・16)

位置 X=34,550～34,547、Y=-66,404～-66,399

Ⅶ区東端部中央に位置する。

形状・規模 形状は不整形を呈する。長軸5.00m、短軸3.18m、深さ0.05mを測る。

面積 11.78㎡

方位 N-85°-E

重複 1号竪穴状遺構と重複するが、2号竪穴状遺構の方が新しい。

埋没土 埋没状況は不明である。

出土遺物 土師器大型製品片11点・小型製品片2点・土師器不明製品片18点、須恵器大型製品片1点・小型製品片1点が出土した。須恵器椀2点・須恵器杯1点・土師器小型甕2点・土師器甕2点・須恵器長頸壺1点を図示した。

所見 調査時、竪穴住居を念頭に置いたが明瞭なプランとならず竪穴状遺構とした。用途は不明である。出土した遺物の特徴から9世紀の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

Ⅶ区3号竪穴状遺構(第27図、P L.14・17)

位置 X=34,543～34,541、Y=-66,409～-66,405

第5表 古代検出遺構一覧

調査区/遺構	住居	掘立柱建物	竪穴状遺構	土坑	ピット	井戸	溝	水田跡
上新田新田西遺跡Ⅰ区								
上新田新田西遺跡Ⅱ区				3	5			
上新田新田西遺跡Ⅴ区	3			10	147		10	
上新田新田西遺跡Ⅵ区				4				
上新田新田西遺跡Ⅶ区			4	2	9	1	3	1
合計	3		4	19	161	1	13	1

Ⅶ区東端部中央に位置する。

形状・規模 形状は不整形を呈すると考えられる。遺構南半分は復旧坑と重複により、遺構の検出ができなかった。長軸4.00m、短軸(1.50)m、深さ0.06mを測る。

面積 (5.46)m²

方位 N-75°-E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明である。

出土遺物 須恵器椀1点。

所見 調査時、竪穴住居を念頭に置いたが明瞭なプランとならず竪穴状遺構とした。用途は不明である。出土した須恵器椀は器面磨滅が顕著であり、時期を考察することができなかったが、本遺構は古代の遺構と考えられる。

Ⅶ区4号竪穴状遺構(第28図、P L.14・17)

位置 X=34,546~34,542、Y=-66,416~-66,412

Ⅶ区東端部北東端に位置する。

形状・規模 形状は不整形を呈すると考えられる。遺構西側部分は調査区外であり、南側部分は調査工程上、未調査となった。長軸(3.20)m、短軸(2.00)m、深さ0.01mを測る。

面積 (5.46)m²

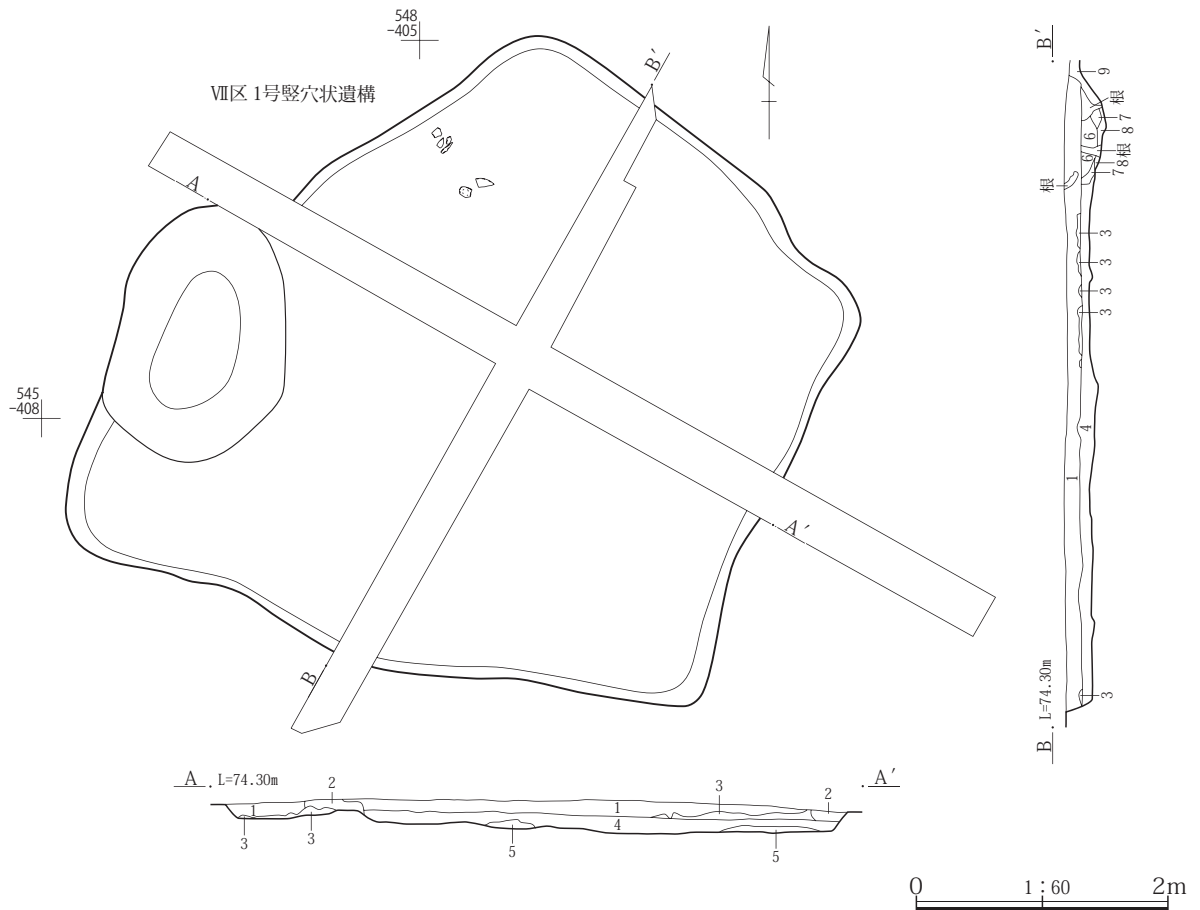
方位 —

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明である。

出土遺物 土師器不明製品片1点、須恵器椀1点。

所見 調査時、竪穴住居を念頭に置いたが明瞭なプラン



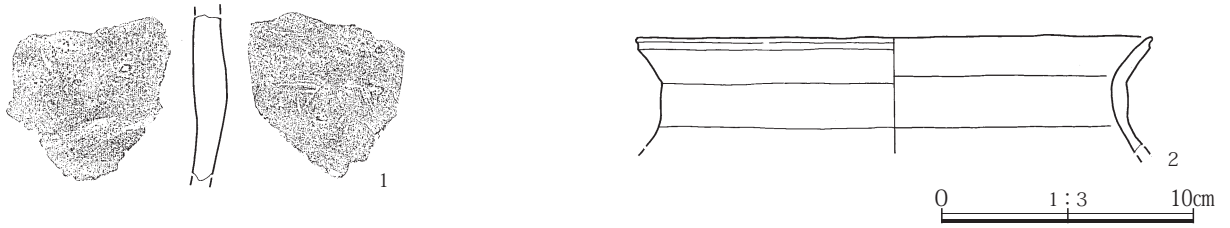
Ⅶ区1号竪穴状遺構 A-A'、B-B'

- | | |
|--------------------------------|--------------------|
| 1 黒褐色粘質土 As-C混入。下位に灰黄褐色ブロック混入。 | 6 黒色粘質土 As-C混入。 |
| 2 灰黄褐色粘質土 明黄褐色ブロック多く混入。As-C混入。 | 7 黒褐色土 明黄褐色ブロック混入。 |
| 3 明黄褐色粘質土 黒褐色土ブロック混入。 | 8 明黄褐色土 ロームブロック含む。 |
| 4 にぶい黄褐色土 黒褐色土ブロック混入。 | 9 褐色土 2号竪穴状遺構埋土。 |
| 5 にぶい明黄褐色ローム 粘性あり。 | |

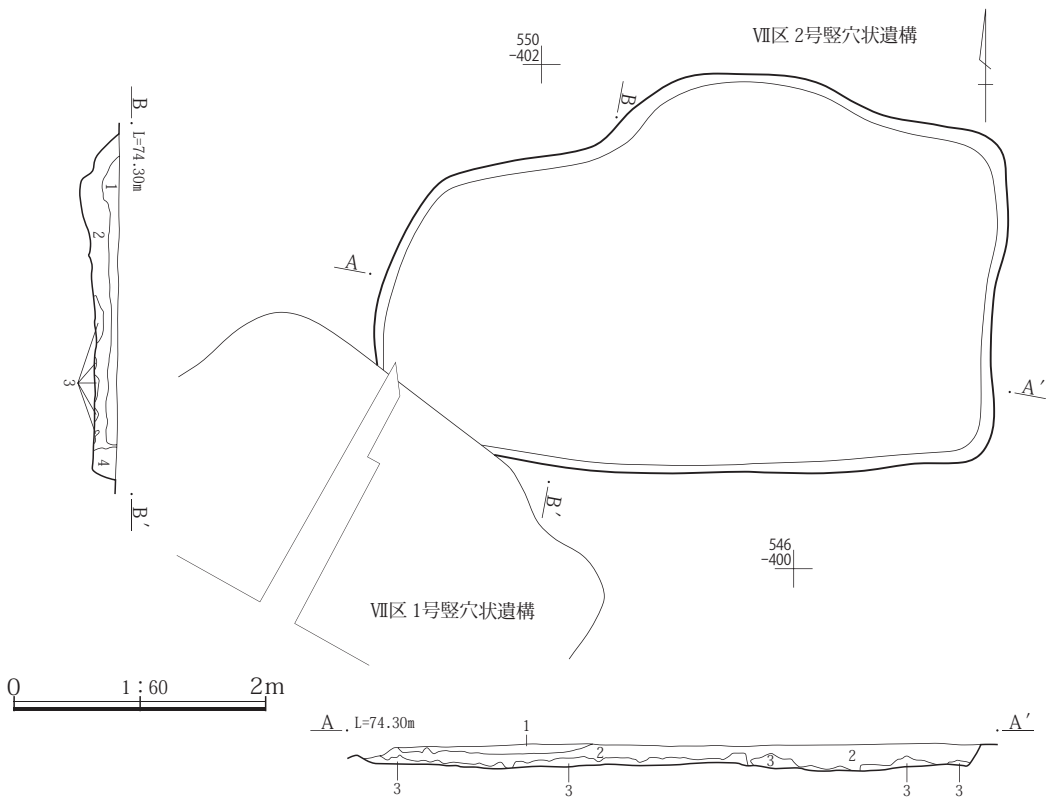
第23図 Ⅶ区1号竪穴状遺構

とならず竪穴状遺構とした。用途は不明である。出土した須恵器碗は器面磨滅が顕著であり、時期を考察するこ

とができなかったが、本遺構は古代の遺構と考えられる。

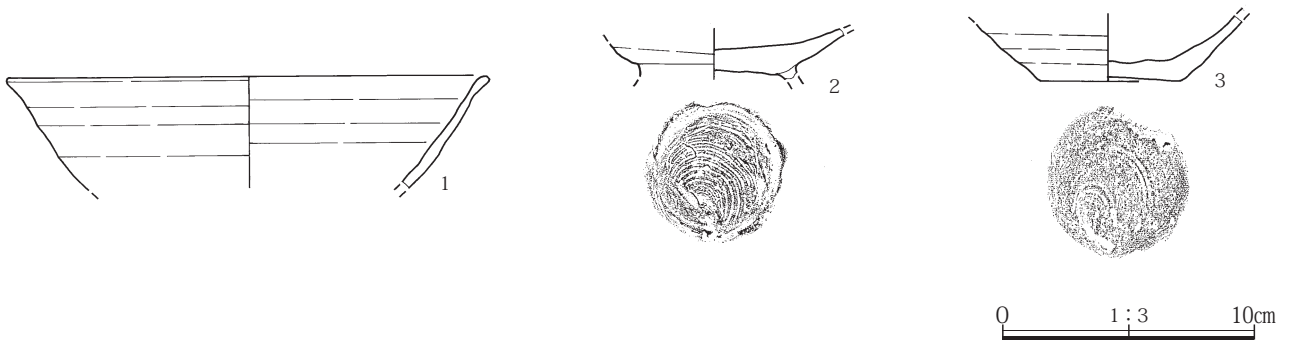


第24図 VII区1号竪穴状遺構出土遺物

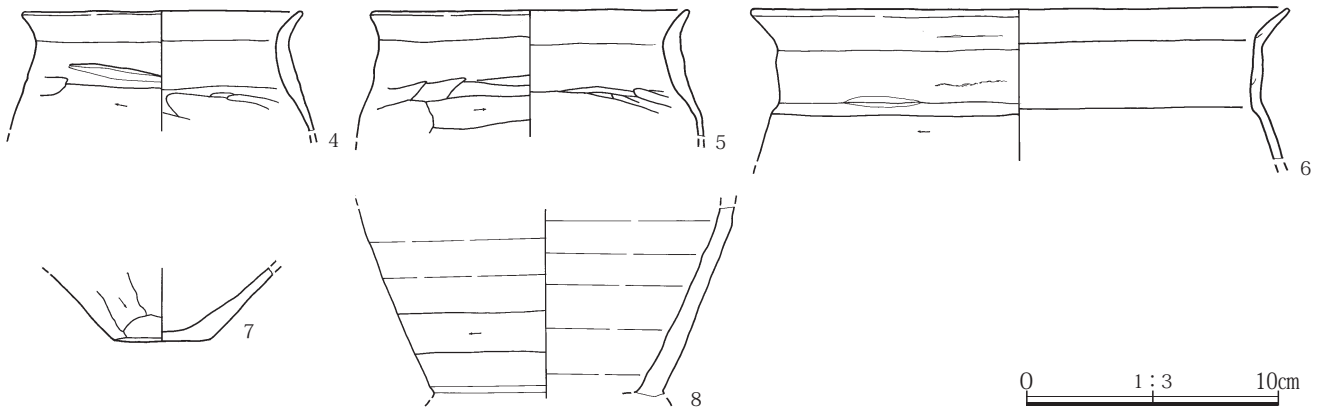


VII区2号竪穴状遺構A-A'、B-B'

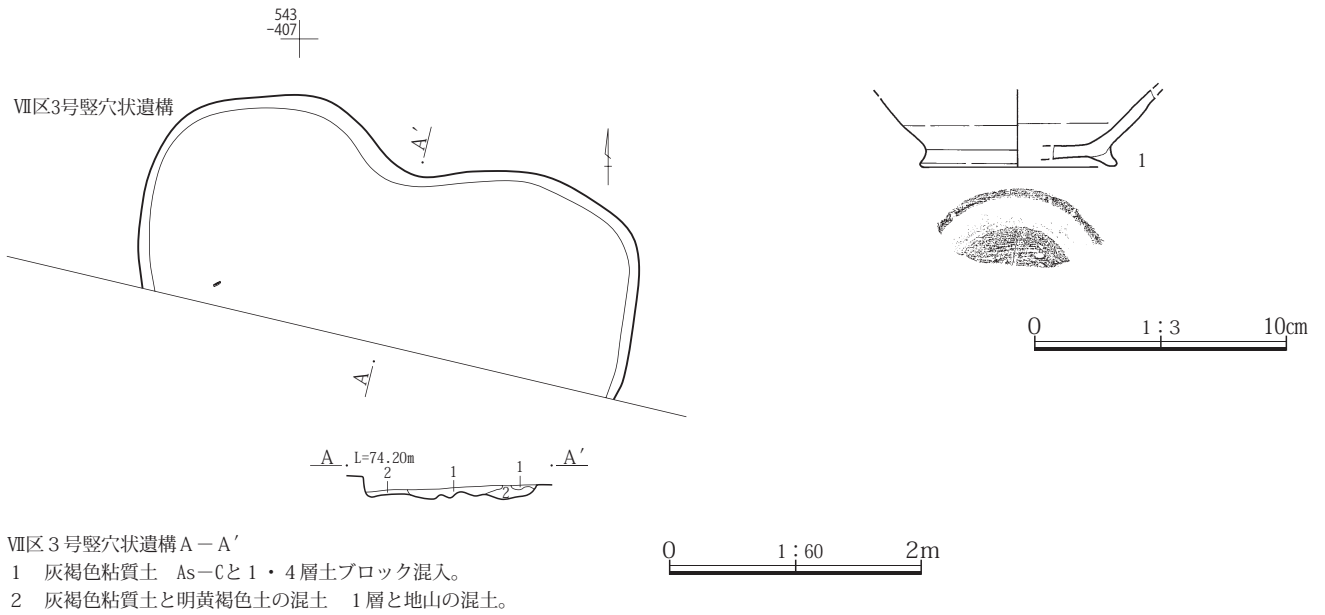
- 1 黒褐色土 As-Cと若干の明黄色ブロック混入する。
- 2 黒褐色粘質土 As-Cと明黄褐色ブロック混入。
- 3 明褐色土 ロームブロック層、粘性あり。
- 4 黄灰色土 粘性ややあり。As-Cと多量の明黄褐色ブロック混入する。



第25図 VII区2号竪穴状遺構・出土遺物



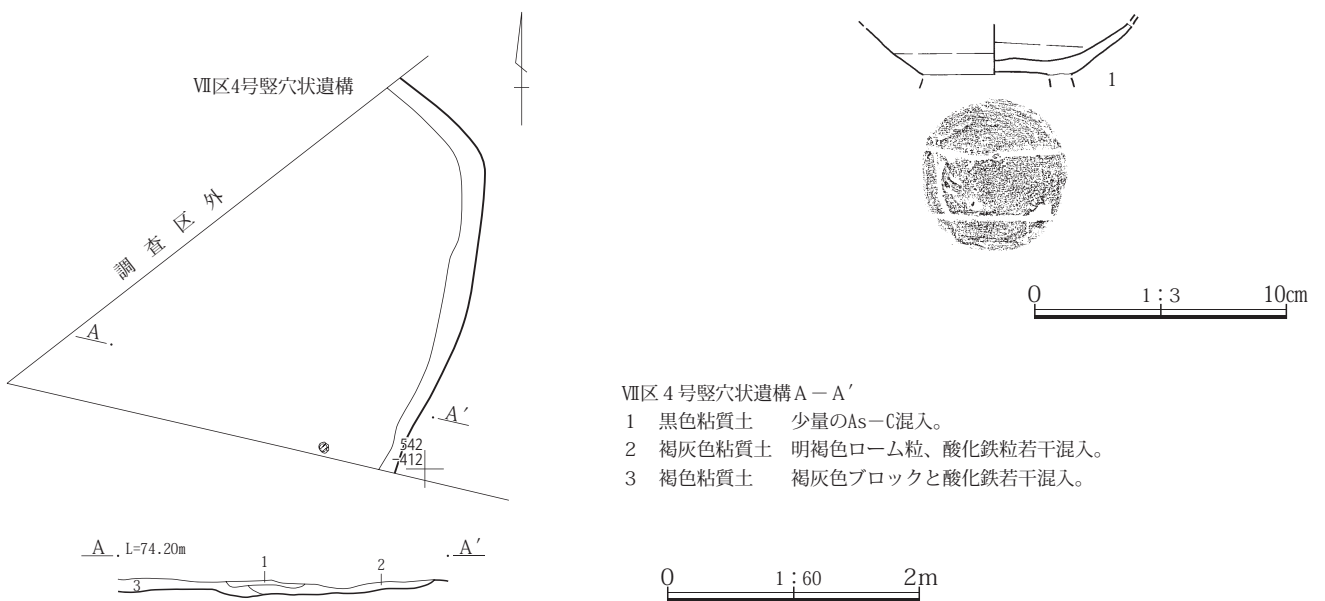
第26図 VII区2号竖穴状遺構出土遺物



VII区3号竖穴状遺構 A-A'

- 1 灰褐色粘質土 As-Cと1・4層土ブロック混入。
- 2 灰褐色粘質土と明黄褐色土の混土 1層と地山の混土。

第27図 VII区3号竖穴状遺構・出土遺物



VII区4号竖穴状遺構 A-A'

- 1 黒色粘質土 少量のAs-C混入。
- 2 褐灰色粘質土 明褐色ローム粒、酸化鉄粒若干混入。
- 3 褐色粘質土 褐灰色ブロックと酸化鉄若干混入。

第28図 VII区4号竖穴状遺構・出土遺物

第3節 土坑・ピット

土坑・ピットは、円形もしくは円形に準ずる形状を呈している遺構を土坑・ピットとした。規模の違いで名称を分けているが、形態・機能等に差がないと考えられるためここでは同じ分類とする。古代の土坑はⅥ区6基・Ⅶ区2基を調査した。ピットはⅦ区10基を調査した。ピットの規模・形状等は第6表にまとめた通りである。土坑について詳述する。

Ⅵ区7号土坑(第29・30図、P L . 9・17)

位置 X=34,533、Y=-66,389

形状・規模 平面形状は不整形を呈する。長軸2.06m、短軸0.81m～0.54mを測る。深さは0.16mであった。

方位 N-6°-W

重複 なし

土層 埋没状況は不明である。

出土遺物 土師器大型製品片53点・中型製品片3点、土師器不明製品片32点が出土した。土師器鉢1点・土師器甕1点を図示した。

所見 出土した土師器は器面磨滅が顕著であり、時期を考察することができなかったが、本遺構は古墳時代の遺構と考えられる。

Ⅵ区8号土坑(第29図、P L . 9)

位置 X=34,537、Y=-66,388

形状・規模 平面形状は楕円形状を呈する。長軸0.81m、短軸0.39mを測る。深さは0.04mであった。

方位 N-3°-W

重複 なし

土層 埋没状況は不明である。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。

Ⅵ区9号土坑(第29図、P L .10)

位置 X=34,538、Y=-66,387

形状・規模 平面形状は長方形形状を呈する。長軸0.79m、短軸0.33mを測る。深さは0.07mであった。

方位 N-3°-E

重複 なし

土層 埋没状況は不明である。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。

Ⅶ区10号土坑(第29・30図、P L .10・17)

位置 X=34,541、Y=-66,385

形状・規模 平面形状は楕円形状を呈する。長軸0.65m、短軸0.47mを測る。深さは0.05mであった。

方位 N-75°-E

重複 なし

土層 レンズ状に堆積しており自然埋没土と考えられる。

出土遺物 土師器大型製品片2点・土師器不明製品片3点が出土した。土師器高杯1点・土師器甕1点・土師器台付甕1点を図示した。

所見 出土した土師器は器面磨滅が顕著であるが、土師器高杯は形状から古墳時代前期のものと思われる。本遺構は古墳時代前期の土坑と推定する。

Ⅶ区2号土坑(第29図、P L .10)

位置 X=34,543、Y=-66,456

形状・規模 平面形状は楕円形状を呈するものと考えられる。長軸0.94m、短軸(0.58)mを測る。深さは0.18mであった。

方位 N-83°-E

重複 なし

土層 埋没状況は不明である。

出土遺物 なし

所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。

Ⅶ区4号土坑(第29図、P L .10)

位置 X=34,531、Y=-66,375

形状・規模 平面形状は楕円形状を呈するものと考えられる。長軸1.35mを測る。深さは0.09mであった。

方位 N-49°-E

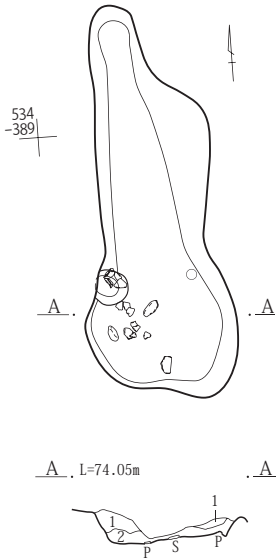
重複 なし

土層 埋没状況は不明である。

出土遺物 なし

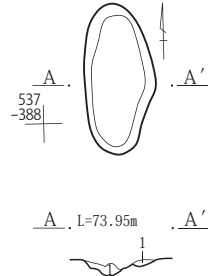
所見 調査区際にて確認された遺構であり、全体は把握できなかった。埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。

VI区7号土坑



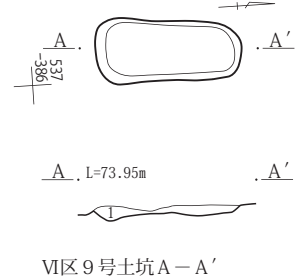
- VI区7号土坑A-A'
- 1 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
 - 2 にぶい黄色土 灰黄褐色土を含む。土中铁分の酸化が見られる。

VI区8号土坑



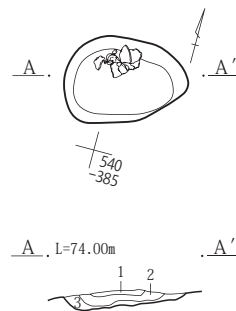
- VI区8号土坑A-A'
- 1 黒褐色土 灰黄褐色土ブロック、褐灰色土を含む。しまり・粘性あり。

VI区9号土坑



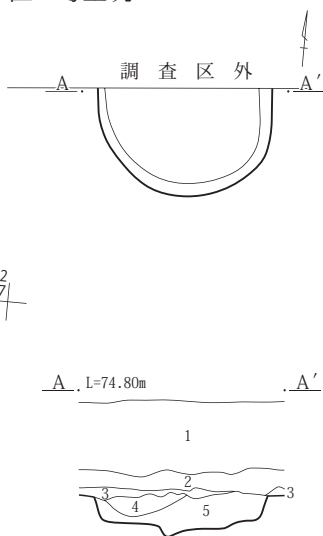
- VI区9号土坑A-A'
- 1 黒褐色土 灰黄褐色土を含む。

VI区10号土坑



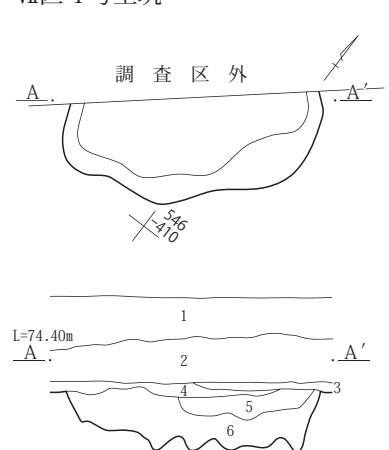
- VI区10号土坑A-A'
- 1 黒褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む。しまりあり、粘性弱い。
 - 2 黒褐色土 暗褐色土少量含む。ややしまる、粘性弱い。
 - 3 にぶい黄褐色土 灰黄褐色土を含む。ややしまる、粘性あり。

VII区2号土坑

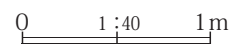


- VII区2号土坑A-A'
- 1 暗灰黄色砂質土 現代耕土。
 - 2 灰褐色土 1層よりしまりあり。鉄分の酸化顕著。
 - 3 灰褐色土 As-B含む。
 - 4 黒褐色土 黒色土ブロックを含む。粘性が強い。
 - 5 褐灰色土 砂質土を含む。締りあり、4層に比べ粘性弱い。

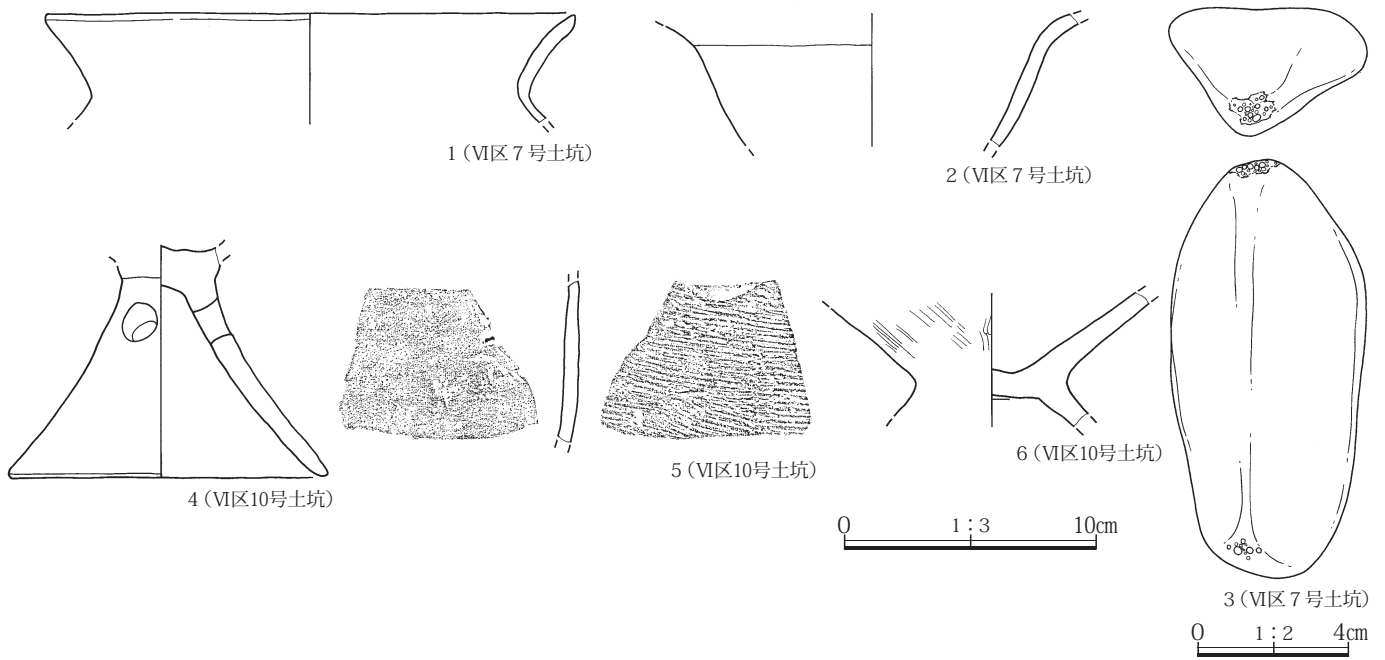
VII区4号土坑



- VII区4号土坑A-A'
- 1 褐灰色砂質土 現代客土。
 - 2 暗灰黄色砂質土 現代耕土。
 - 3 褐色土 酸化鉄粒、ローム粒含む。粘性あり。
 - 4 にぶい黄褐色粘質土 ロームブロック含む。
 - 5 黒色粘質土 灰黄褐色土含む。
 - 6 灰黄褐色粘質土 にぶい黄色ロームブロック含む。

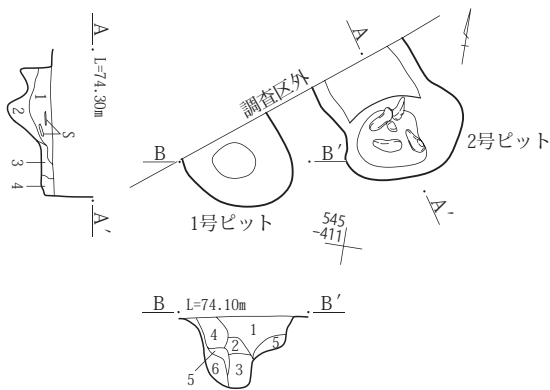


第29図 VI区7～10号土坑・VII区2・4号土坑



第30図 土坑出土遺物

Ⅶ区1・2号ピット



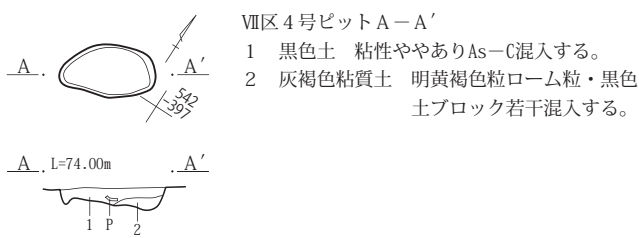
Ⅶ区1号ピットB-B'

- 1 黒褐色土 黒色土大ブロック・As-C・黄褐色粒含む。
- 2 灰褐色粘質土 黒色土ブロック・黄褐色粒含む。
- 3 黒色粘質土 黒色土ブロック・黄褐色粒少量含む。
- 4 灰褐色粘質土 2層に類似するが、黄褐色ブロック含む。
- 5 黒褐色土と灰褐色粘質土の混土 ロームブロック含む。
- 6 暗褐色土 黄橙色粒・黄褐色ブロック含む。

Ⅶ区2号ピットA-A'

- 1 黒色粘質土 酸化鉄粒・明黄褐色粒若干含む。
- 2 黒色粘質土 1層に類するが粘性特に強い。
- 3 黒褐色粘質土 1・2層に比べ色調明るい。
- 4 黒色粘質土 黄褐色粒含む。

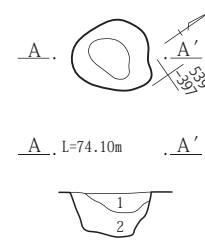
Ⅶ区4号ピット



Ⅶ区4号ピットA-A'

- 1 黒色土 粘性ややありAs-C混入する。
- 2 灰褐色粘質土 明黄褐色粒ローム粒・黒色土ブロック若干混入する。

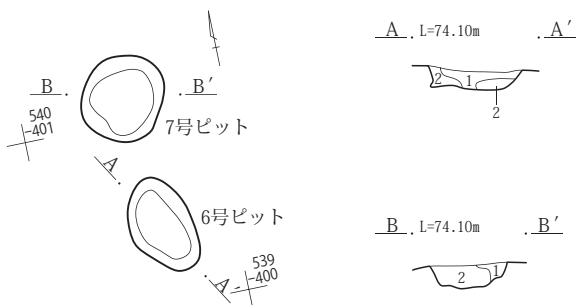
Ⅶ区5号ピット



Ⅶ区5号ピットA-A'

- 1 黒色粘質土 灰褐色土ブロック含む。
- 2 黒褐色粘質土 明黄褐色ブロック多量に含む。

Ⅶ区6・7号ピット

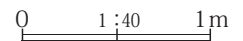


Ⅶ区6号ピットA-A'

- 1 黒色粘質土 灰褐色土ブロック含む。
- 2 黒褐色粘質土 明黄褐色ブロック多量に含む。

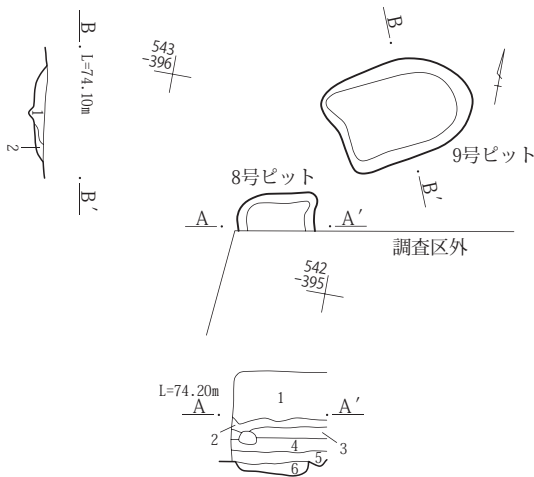
Ⅶ区7号ピットB-B'

- 1 黒色粘質土 灰黄褐色ブロック若干含む。
- 2 黒褐色粘質土 黄褐色ブロック多量に含む。



第31図 Ⅶ区1・2・4～7号ピット

Ⅶ区8・9号ピット



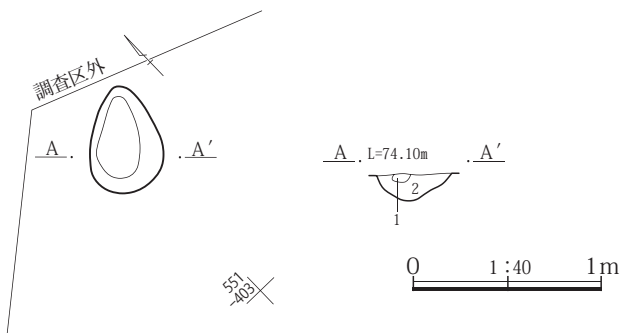
Ⅶ区8号ピット A-A'

- 1 客土
- 2 褐灰色砂質土 As-A僅かに含む。
- 3 黄灰色砂質土 As-Bと黒色粒僅かに含む。
- 4 黒色粘質土 褐灰色粘質土ブロック・As-C若干含む。
- 5 褐灰色粘質土 若干のAs-C及び少量の酸化鉄粒含む。
- 6 黒色粘質土 明黄褐色粒・As-C少量含む。8号ピット埋土。

Ⅶ区9号ピット B-B'

- 1 褐灰色土 にぶい褐色粘質土ブロック混入する。
- 2 にぶい黄褐色土 粘性強し。橙色粒少量含む。

Ⅶ区10号ピット



Ⅶ区10号ピット A-A'

- 1 黒色土 木根痕跡と考えられる。
- 2 黒褐色粘質土 にぶい黄褐色ブロック混入する。

第32図 Ⅶ区8～10号ピット

第6表 古代ピット一覧

遺構名称	形状	位置		規模(m)			備考
		X座標	Y座標	長軸(径)	短軸	深さ	
Ⅶ区1号ピット	不明	X=34,546	Y=-66,412	5.30	(0.42)	0.26	
Ⅶ区2号ピット	不明	X=34,546	Y=-66,411	(0.70)	0.58	0.13	
Ⅶ区3号ピット	円形	X=34,544	Y=-66,398	0.57	-	0.35	
Ⅶ区4号ピット	楕円形	X=34,542	Y=-66,398	0.52	0.30	0.08	
Ⅶ区5号ピット	不整形	X=34,538	Y=-66,398	0.40	0.38	0.25	
Ⅶ区6号ピット	楕円形	X=34,540	Y=-66,401	0.54	0.34	0.08	
Ⅶ区7号ピット	円形	X=34,540	Y=-66,401	0.45	-	0.09	
Ⅶ区8号ピット	不明	X=34,543	Y=-66,396	0.42	(0.20)	0.08	
Ⅶ区9号ピット	長方形	X=34,543	Y=-66,395	0.75	0.53	0.10	
Ⅶ区10号ピット	楕円形	X=34,552	Y=-66,403	0.57	0.38	0.23	

第4節 井戸

Ⅶ区で井戸を検出した。本線部調査ではV区で12基検出したが、今回調査では1基のみの検出であった。

Ⅶ区1号井戸(第33図、P L.10・17)

位置 X=34,544、Y=-66,395

形状・規模 平面形状は楕円形状を呈する。長軸1.30m・短軸1.18mを測る。深さは1.15mであった。

断面形 上端がやや開いたすり鉢形をしている。

方位 N-63°-W

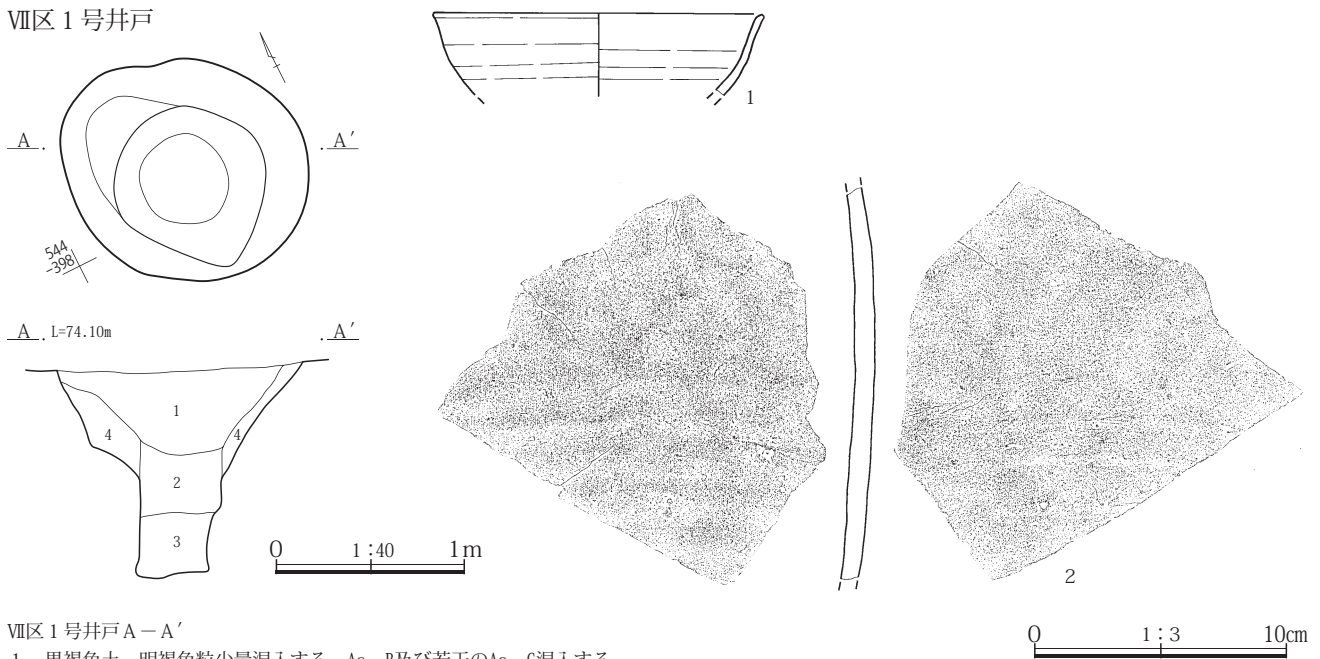
重複 なし

土層 ブロック土を多く含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物 土師器大型製品片6点・土師器不明製品片12点、須恵器小型製品片1点が出土した。須恵器杯1点・須恵器甕1点を図示した。

所見 遺物から詳細な年代を推測することができなかったが、出土遺物から古代の遺構であると考えられる。

Ⅶ区1号井戸



Ⅶ区1号井戸 A-A'

- 1 黒褐色土 明褐色粒少量混入する。As-B及び若干のAs-C混入する。
- 2 黒褐色土 明黄褐色粒僅かに含む。下位に灰褐色ブロック混入する。
- 3 黒褐色粘質土 粘性強い。
- 4 黒褐色土と暗褐色粘質土の混土 明褐色ブロック混入する。

第33図 Ⅶ区1号井戸・出土遺物

第5節 溝

溝は14条調査した。そのうちⅦ区の3条が古代の遺構である。中近世の溝同様、溝から出土する遺物はほとんどなく、埋没土や出土面から帰属時期を考察した。

Ⅶ区1号溝(第34図、P L.4)

位置 X=34,531～34,520、Y=-66,319～-66,315

Ⅶ区調査区西側北寄りを西から北東に貫通している。

形状・規模 全長は(22.5)mである。溝の幅は、上端0.64m～0.40m・下端0.42m～0.20m・深さ0.18m～0.02mである。逆台形を呈している。北西から南東に勾配がついており比高差は0.10m、勾配率は0.3%である。

方位 N-87°-E° N-69°-E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。底部付近に水性堆積層が堆積していたことから、水流が想定される。

Ⅶ区3号溝(第34図、P L.5)

位置 X=34,533～34,531、Y=-66,491～-66,492

Ⅶ区調査区西側南寄りを北西から南に貫通している。

形状・規模 全長は(3.90)mである。溝の幅は、上端0.34m～0.29m・下端0.16m～0.12m・深さ0.04m～0.02mである。皿形を呈している。北から南に勾配がついており比高差は0.01m、勾配率は0.4%である。

方位 N-86°-W° N-69°-E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。

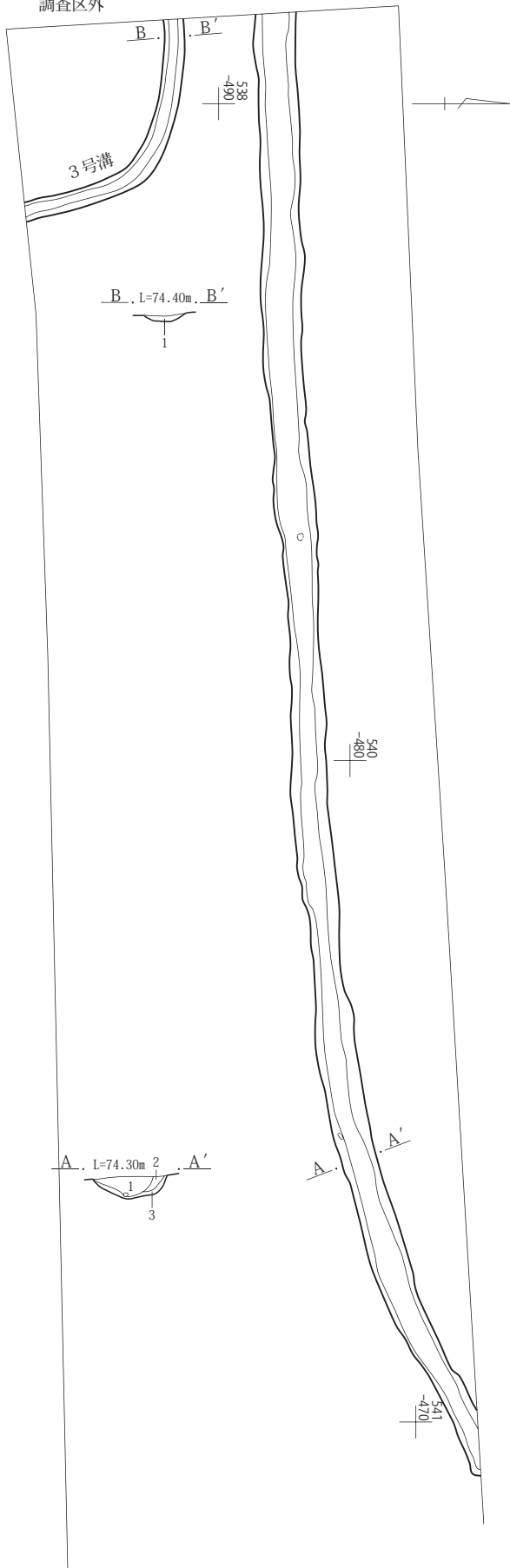
Ⅶ区8号溝(第35図、P L.8)

位置 X=34,533～34,531、Y=-66,491～-66,492

Ⅶ区調査区東側北寄りに位置している。

形状・規模 全長は4.20mである。溝の幅は、上端1.52～1.20m・下端1.02m～0.12m・深さ0.36mである。逆台形状を呈している。東から西に勾配がついており比高差は0.02m、勾配率は0.5%である。

Ⅶ区 1・3号溝
調査区外



方位 N-65° - E

重複 なし

埋没土 埋没状況は不明。

出土遺物 なし

所見 埋没土中にAs-A・As-Bを含んでおらず、As-Cを含み、第2面の調査時に検出されたことから、古代に属する遺構と考えられる。

Ⅶ区 1号溝 A-A'

- 1 灰褐色土 しまり、粘性あり。
- 2 褐灰色土 しまり、粘性あり。
- 3 にぶい褐色土 水性堆積層。砂質土含む。

Ⅶ区 3号溝 B-B'

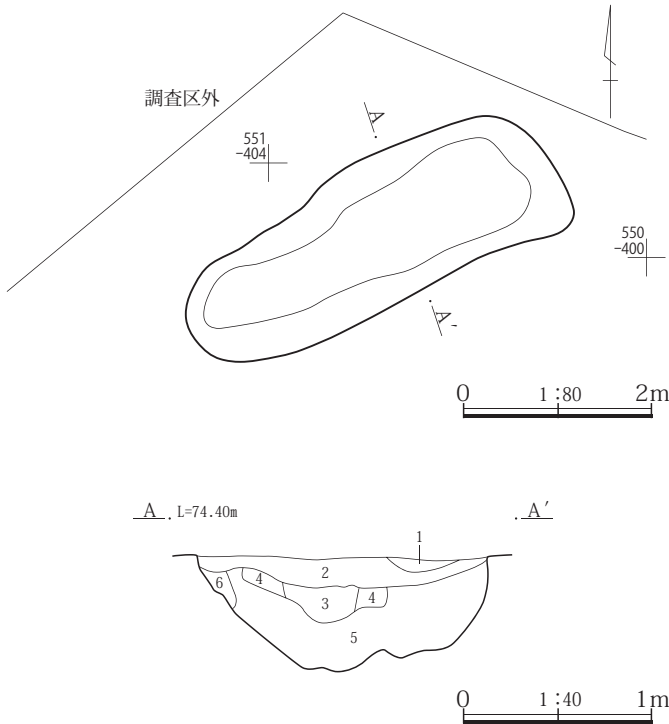
- 1 灰黄褐色土 黒褐色土ブロックを含む。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第34図 Ⅶ区 1・3号溝

Ⅶ区8号溝



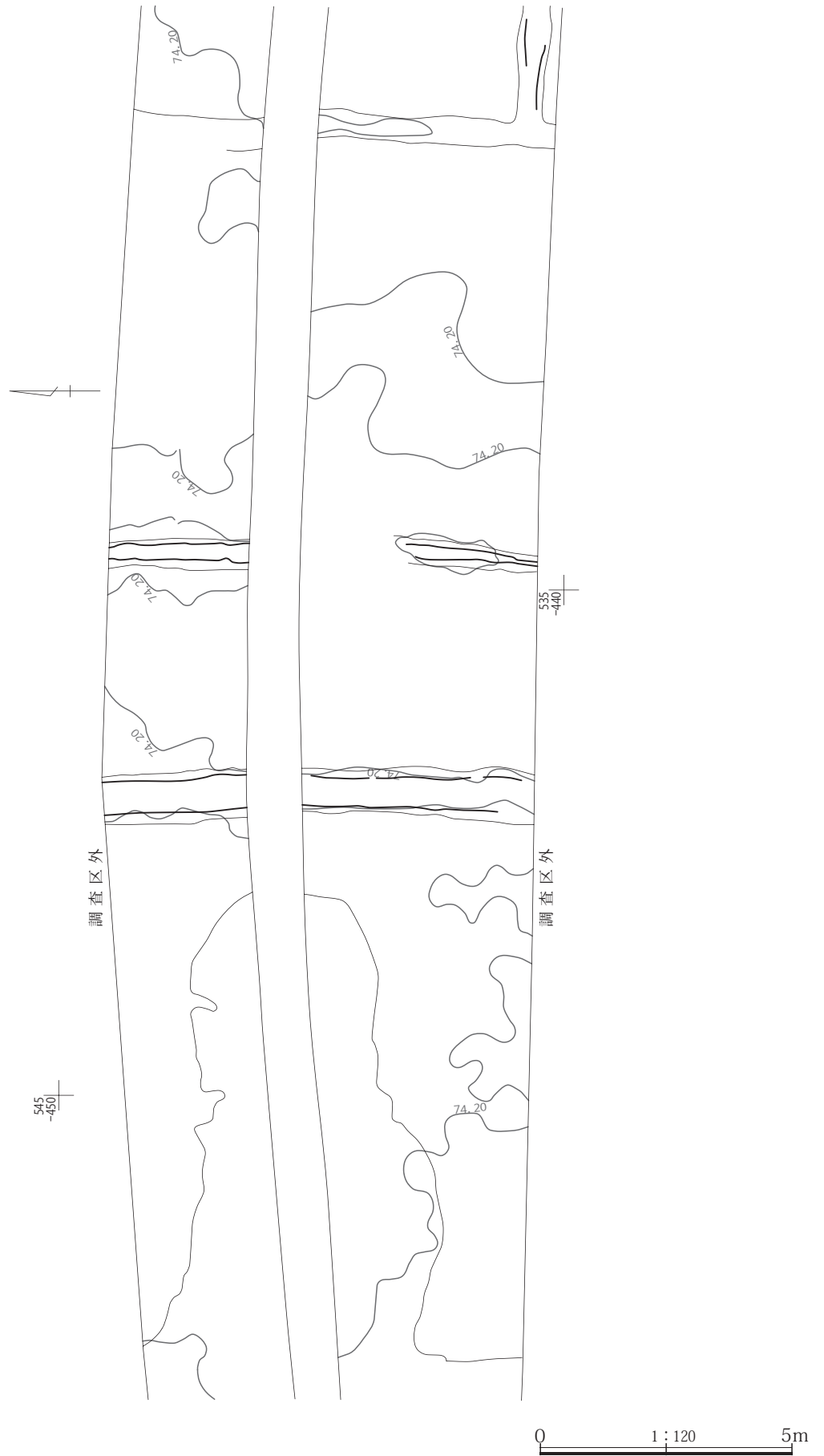
Ⅶ区8号溝(古代面) A-A'

- 1 褐灰色粘質土 黒色土ブロック混入する。
- 2 黒色粘質土 As-C少量含む。
- 3 黄橙色ローム 粘性やや弱い。
- 4 褐灰色土 粘性あり。
- 5 黒褐色粘質土 As-Cわずかに含む。
- 6 黒褐色粘質土 灰黄褐色土ブロック、As-Cわずかに含む。

第35図 Ⅶ区8号溝

第6節 水田

Ⅶ区中央部分にて水田耕作の跡を確認した。(第36図、P L.15) X=34,544 ~ 34,535・Y=-66,432 ~ -66,428、X=34,543 ~ 34,535・Y=-66,439、X=34,544 ~ 34,535・Y=-66,444 ~ -66,443付近の三カ所で細い棒状の高まりを確認した。X=34,544 ~ 34,535・Y=-66,432 ~ -66,428付近の高まりは調査区南側でT字状になっていた。その付近を中心に鋤先痕と考えられる耕作痕を確認した。細い棒状の高まりは畦畔の痕跡であると考えられる。畦畔痕跡および、水田痕跡は調査区全域では確認されなかった。確認された範囲を第36図で示した。南北約8.5m・東西約27mの範囲、面積は171.77㎡である。自然科学分析では隣接するⅡ区での水田耕作の可能性を示しており、Ⅶ区のこの範囲を水田耕作痕と捉えることに矛盾は無いと考える。



第36図 VII区水田

第7節 遺構外出土遺物

上新田新田西遺跡では、遺構外から弥生土器・土師器・須恵器・国産磁器・国産施釉陶器などが出土した。

出土点数は567点である。土師器片490点、須恵器片29点、中世遺物1点、近世遺物47点である。調査区別の出土遺物数は第7表に示した通りである。また、第7表は調査時の取り上げ位置ごとに区分をした。

古代の遺構外出土遺物のうち須恵器や土師器など器形が復元できるもの及び石製品を第37図に示した。

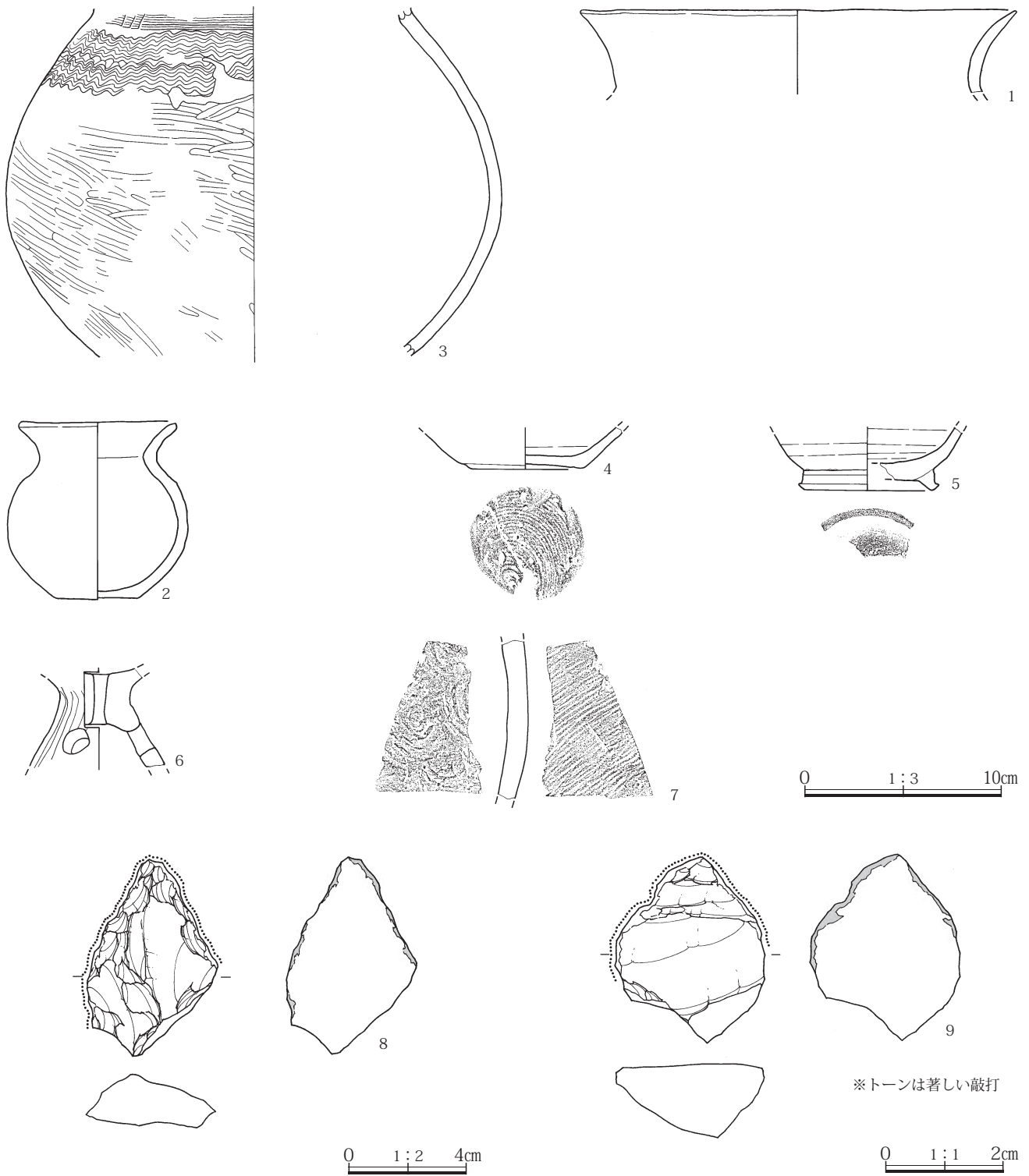
古墳時代前期以降は、本遺跡において遺構が確認されている。集落域ではないが、生活がなされていたことが考えられる。

弥生時代の遺構は確認されていないが、弥生時代の土器が出土している(第37図3)。この土器は、弥生時代後期の樽式土器甕である。頸部から体部にかけての検出であり、頸部の簾状文は3連で描かれている。また、波状文は2段描かれているが、線刻が粗い印象である。これらの点は弥生時代後期でも後半段階の土器の特徴と言

える。樽式土器の甕や壺は古墳時代前期に台などに転用されて使用されていた例もある。本遺跡では、古墳時代前期の遺構及び遺構外遺物として土器が確認された。本遺跡周辺で弥生時代後期の生活があった可能性があるが、古墳時代前期にも使用されていた可能性も考慮しておきたい。

第7表 遺構外出土遺物

区	層位・面	土師器				須恵器			中世	近世			
		小型製品	中型製品	大型製品	不明	小型製品	中型製品	大型製品	国産焼締陶器	国産磁器	国産施釉陶器	在地系焙烙・鍋	在地系皿
VI	北西部黒土中		3	10	214	2		2		7	6		
VI	南西部黒色土中				3								
VI	南西部確認面		1	1	3								
VI	西部		2	11	73								
VI	西部確認面				5					2			
VI	中央部確認面				10	1				1	3		
VI	東部確認面	1		2	13						3		
VI	西部表土				3						2		
VI	中央部			2									
VI	西端部	1		2		1		1			1		
VI	北東部										1		
VI	北東部1面表採				1								
VI	北東部確認面	8	3	34	28	5		3			1		
VI	北東部黒土中										1		
VI	北東部黒土下	1			1								
VI	北東部表土				5								
VI	中央確認面								1			1	
VI	東半部表土	1			3	1				1	4		1
VI	東部確認面			5	11	3		5		2	1	1	
VI	東部黒色土	1	1	10	12	4							
VI	西部確認面				3	1				1	4		
VI	表採				2					3			
計		13	10	77	390	18	0	11	1	17	27	2	1



第37図 遺構外出土遺物

第6章 自然科学分析

上新田新田西遺跡では、平成20年度調査時に、火山灰分析と植物珪酸体分析の自然科学分析を委託して行った。その目的は次の通りである。

本遺跡は、火山灰堆積層が薄く堆積している。また、遺構からの遺物出土が極めて少ないため、遺構の時期が不明瞭である。時期を判断する資料とすることを目的として、火山灰堆積層を同定し、層序指標を作るため火山灰分析を行った。

発掘調査ではⅡ区より火山灰堆積層下より鋤先痕など水田耕作をしたと考えられる痕跡が確認されたが、畦畔などは検出されなかった。調査地点の土地利用を検討する資料を得るため土壌の植物珪酸体分析を行った。

これらの分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託した。分析結果は以下の通りである。

第1節 上新田新田西遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

関東地方北西部に位置するいわゆる利根川扇状地とその周辺に分布する後期更新世以降の地層や土壌の中には、赤城はもちろんのこと、榛名や浅間さらに遠方の火山に由来するテフラ(火山さいせつ碎屑物、いわゆる火山灰)が数多く分布している。テフラの中には、すでに層位や噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの層位関係を明らかにすることで、遺構や遺物包含層の層位や年代に関する資料を得ることが可能となっている。

玉村町上新田新田西遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層が検出されたことから、地質調査を行って土層の層序やテフラの層相に関する記載を行うとともに、採取された試料についてテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を実施して、土層の層位や年代に関する資料を得ることになった。調査分析の対象となった地点は、Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点およびⅤ区旧石器確認坑南壁西SP0.7m東地点の2地点である。

2. 土層の層序

(1) Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点

Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点では、下位より砂混じり灰色砂質シルト層(層厚14cm以上)、黒泥層(層厚7cm)、白色細粒軽石混じり黒泥層(層厚1cm、軽石の最大径2mm)、鉄分を多く含む黄灰色泥層(層厚1cm)、白色軽石を少し含む灰色泥層(層厚5cm)、黒泥層(層厚4cm)、暗灰褐色泥層(層厚1cm)、成層したテフラ層(層厚9.2cm)、灰褐色土(層厚6cm)、灰色表土(層厚17cm)が認められる(第38図)。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質細粒火山灰層(層厚0.2cm)、灰褐色軽石を含む暗灰色粗粒火山灰層(層厚3cm、軽石の最大径7mm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)からなる。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧、1968、新井、1979)に同定される。

(2) Ⅴ区旧石器確認坑南壁西SP0.7m東地点

Ⅴ区旧石器確認坑南壁西SP0.7m東地点では、下位より垂角礫混じり灰色シルト質砂層(層厚15cm以上)、黄色がかった灰色シルト層(層厚18cm)、白色細粒軽石混じりで桃色がかった灰色シルト層(層厚9cm、軽石の最大径3mm)、桃色がかった灰色シルト層(層厚10cm)、灰白色シルト層(層厚5cm)、淘汰の良い灰白色粗粒火山灰層(層厚12cm、4層)、砂混じり灰褐色土(層厚8cm、3層)、赤色粗粒火山灰を少量含む暗灰褐色土(層厚14cm、2層)、黒色土(層厚11cm、1層)が認められる(第39図)。

なおところによっては、4層の直上に礫(最大径78mm)を含む灰色シルト層(層厚5cm)が認められるところもある。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点およびⅤ区旧石器確認坑南壁西SP0.7m東地点において、テフラ層ごとさらにテフラ以外の堆積物については基本的に厚さ5cmごとに採取された試料を対象に、指標テフラの降灰層準を求めするために、12点についてテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料12gについて超音波洗浄により泥分を除去。
- 2) 80℃で恒温乾燥。

3)実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点では、試料2と試料1から軽石または火山ガラスを検出できた。試料2には、スポンジ状に発泡した灰白色の軽石型ガラスが少量含まれている。一方、試料1には、このタイプの火山ガラスや、その粗い粒子である灰白色軽石(最大径2.0mm)が比較的多く含まれている。この試料には、ほかにさほど発泡の良くない白色軽石型ガラスも含まれている。

V区旧石器試掘坑南壁西SP0.7m東地点では、比較的粗粒の軽石やスコリアは認められなかった。ただし、火山ガラスはいずれの試料からも検出でき、とくに試料12から試料2にかけて比較的多くの火山ガラスを認めることができる。その中では、とくに試料9に多くの軽石型ガラスが含まれている。火山ガラスは、透明や白色の軽石型ガラスである。ほかに斜長石も多い。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。火山ガラスが増加する試料13には、透明や白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。重鉱物としては、やはり斜方輝石や単斜輝石が多い。一方、試料5や試料3には透明や白色のほかに、灰白色の軽石型ガラスも認められる。さらに灰色や赤色の岩片も多い。

4. 屈折率測定

(1)測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、温度変化型屈折率測定法により、Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の測定を行った。火山ガラスの測定には、古澤地質社製MAIOTを使用した。

(2)測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.514-1.520(25粒子)である。

5. 考察

Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点の試料2に含まれる火山ガラスは、色調や発泡の形態さらに屈折率などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石^{註1}(As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000)に由来すると考えられる。したがって、試

料1に含まれる灰白色の軽石や火山ガラスについてもAs-Cに由来すると推定される。ただ、試料1に含まれるさほど発泡の良くない白色の軽石型ガラスについては、その層位や特徴などから6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992)に由来する可能性が高い。したがって、試料2が採取された土層と試料1が採取された土層位については、それぞれAs-CとHr-FAが降灰した後に形成されたものと考えられる。

V区旧石器試掘坑南壁西SP0.7m東地点で認められた4層の灰白色粗粒火山灰層は、層相や試料9に含まれるテフラ粒子の特徴などから、約1.3～1.4万年前^{註2}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田・新井、1992)に同定される。また、その下位の試料13が採取された堆積物中に含まれるテフラ粒子は、その層位や特徴などから、浅間大窪沢第1軽石(As-0k1、約1.7万年前^{註2}、中沢ほか、1984、早田、1996)および浅間大窪沢第2軽石(As-0k2、約1.6万年前^{註2}、中沢ほか、1984、早田、1996)からなる大窪沢テフラ群(As-0k Group)に由来すると思われる。一方、2層中に含まれるテフラについては、層位や試料5および試料3に含まれるテフラ粒子の特徴から、約1.1万年前^{註2}に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj、早田、1990、1996など)と考えられる。

6. まとめ

上新田新田西遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、下位より浅間大窪沢テフラ群(As-0k Group、約1.6～1.7万年前^{註2})、浅間板鼻黄色軽石(As-YP、約1.3～1.4万年前^{註2})、浅間総社軽石(As-Sj、約1.1万年前^{註2})、浅間C軽石(As-C、4世紀初頭)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B、1108年)など多くのテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。

註1 浅間C軽石降下の時期は、研究者間では、古墳時代前期で概ね一致している。その暦年代については3世紀後半から4世紀初頭まで意見の分かれるところである。ここでは、火山灰考古学研究所早田勉氏の見解を用いた。

註2 放射性炭素(¹⁴C)年代。暦年とは異なることに注意。

第8表 テフラ分析結果

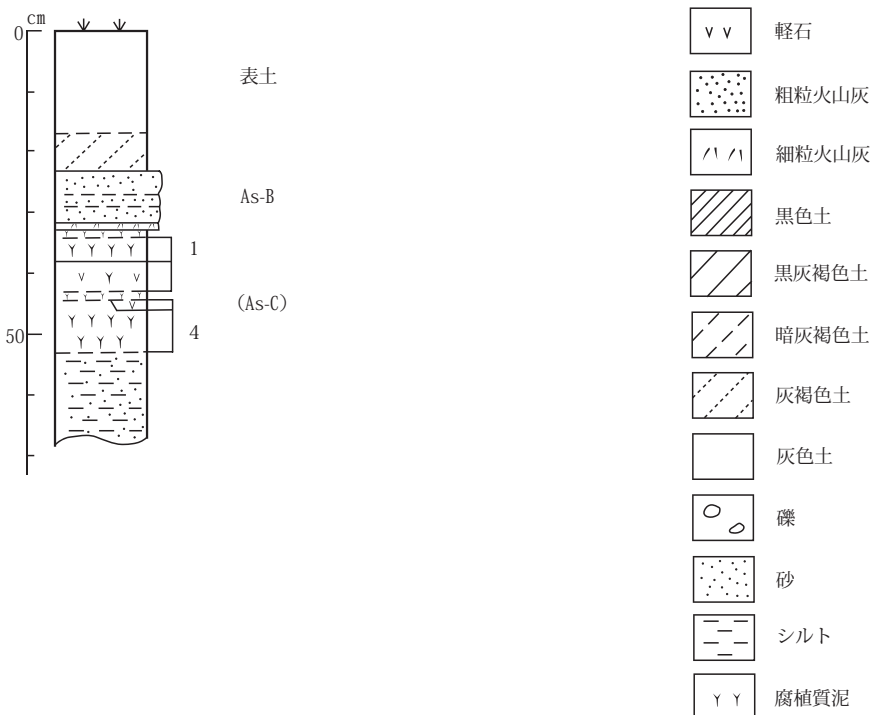
地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
II区No.148R杭西1.2m	1	*	灰白	2	**	pm	灰白
	2				*	pm	灰白
	3						
V区旧石器試掘坑南壁西SP0.7m東	1				*	pm>bw	透明,灰
	3				**	pm	透明,白,灰白
	5				**	pm	透明,白,灰白
	7				**	pm	透明,白
	9				***	pm	透明,白
	11				**	pm	透明,白
	13				**	pm	透明,白
	15				*	pm	透明
	17				*	pm	透明

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない。最大径の単位はmm。bw：バブル型，pm：軽石型。

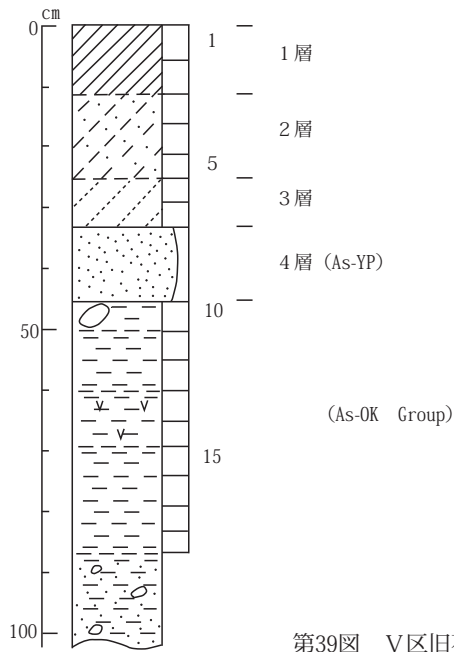
第9表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラスの屈折率(n)	測定粒子数
II区No.148R杭西1.2m	2	1.514-1.520	25

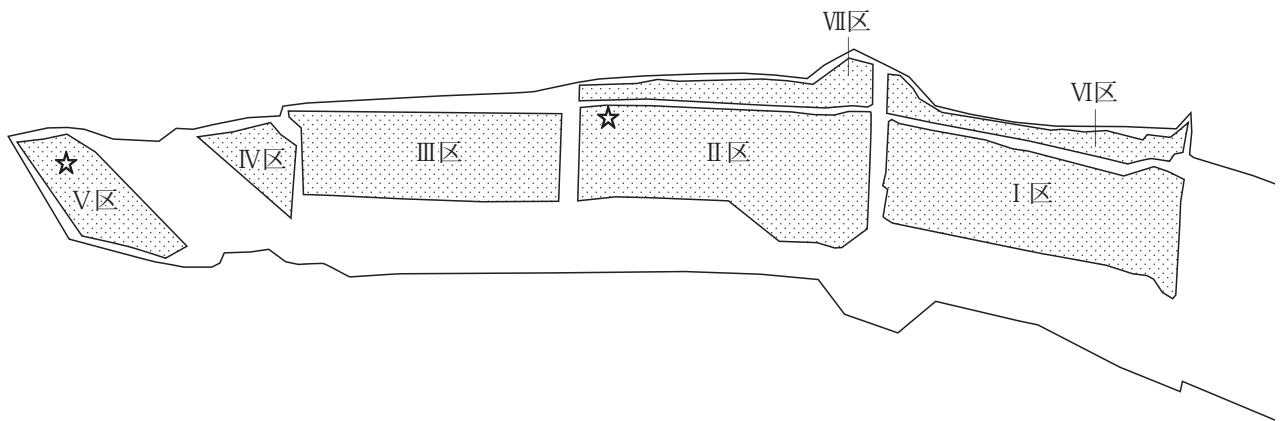
測定は温度変化型屈折率測定装置(MA10T)による。



第38図 II区 No.148R 杭 1.2m地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第39図 V区旧石器確認坑南壁西 SP0.7m東地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第40図 自然科学分析試料採取地点

第2節 上新田新田西遺跡における プラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である(杉山、2000)。

2. 試料

分析試料は、Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点から採取された計5点である。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原、1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山、2000)。

4. 分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定

および定量はイネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第10表に示した。

5. 考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山、2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点では、試料1から試料5までの層準について分析を行った。その結果、試料1、2、試料4からイネが検出された。このうち、試料1と試料2では密度が4,900個/gおよび4,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

試料4では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、試料1と試料2ではイネが比較的多量に検出され、これらの層準で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、試料4の層準でも稲作が行われていた可能性が認められた。

第6章 自然科学分析

第10表 上新田新田西遺跡におけるプラント・オパール分析結果
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料 学名	Ⅱ区No.148R杭西1.2m地点				
		1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i>	49	43		7	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	49	28	22	49	7
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	14	28	7	28	50
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	70	50	74	49	122

おもな分類群の推定生産量(単位: kg / m²・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.44	1.25		0.21	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	3.09	1.79	1.40	3.09	0.45
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.17	0.35	0.09	0.35	0.62
ネザサ節型	<i>Bambusoideae</i>	0.34	0.24	0.36	0.23	0.58

第1節参考文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 黒班～前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
- 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉(1990)群馬県の自然と風土. 群馬県史編さん室編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.37-129.
- 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて～. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く～古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第2節参考文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)～数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法～. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)～プラント・オパール分析による水田址の探査～. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第7章 調査の成果

第1節 上新田新田西遺跡の溝遺構と土地区画について

1 溝遺構と土地区画の対比

発掘調査では地境等に掘削された溝遺構等が確認されることがあるが、一般にこれらは新しい時期のものと認識される。しかし玉村町域に於ける地境は、条里区画に依るものも遺されているため、必ずしも新しいものであるとは限らない。一方、現代(圃場整備前)の土地区画は天明3年の浅間山の大噴火(所謂「浅間焼け」)の災害後に確定した地割を示すものでもあり、溝等の遺構の時期や掘削意図を検討する材料となるものである。本遺跡に於いては本次調査区域と南接する国道354号線玉村バイパス本線の調査区域で15条程の溝遺構を調査したが、これらと土地区画との関係を確認し、その性格や時期等に若干の検討を加えたいと思う。

しかし、本遺跡周辺では昭和40年代に圃場整備が実施されており、当事業団が保管する地籍図は圃場整備後のものであるため図上での確認が困難であった。このため圃場整備前の地図に代わるものとして、圃場整備前の昭和39年5月27日撮影した国土地理院所蔵の航空写真(MKT647X-C8-18)を本遺跡周辺の現況図に当て嵌めて、空中写真に見られる土地区画、或いは植生等に基づくクロープマーク(Crop Marks)等を図化し、これと遺構の位置とを比較することとした。尚、このような状態で区画図を作図したため、土地区画と図上の区画線とは必ずしも一致していないことを付記しておく。

2 上新田新田西遺跡の溝遺構と区画線

溝遺構の遺構番号は、本報告書に基づく区番号(本線のⅠ・Ⅱ区、本時調査のⅥ・Ⅶ区)と溝番号をハイフオンでつないだものとして表記することとする。また関連すると見られる地割やクロープマーク等は想定される種類の後にアルファベットを附して表記することとする。

さて本線の溝のうちⅠ-1号溝は水路Aと記した水路に沿って在る。しかしⅠ-1号溝は水路Aの南に在ってその区画線とは一致せず、走行の方向も若干ずれがある

ため、Ⅰ-1号溝が圃場整備時の水路に先行する水路であった可能性が考慮される。

Ⅰ-2号溝は鉤形に屈曲する溝であるが、南縁の東北東-西南西走行部分は水路Aの南側に沿い、Ⅰ-1号溝より水路Aに近い位置に在るが、東縁の北北東-南南西走行部分は道路Bの西縁にほぼ重なっている。この道路Bに対してはⅠ-2号溝の東に近接し南北に直列に位置するⅠ-3・4号溝が重なって在り、Ⅰ-2号溝の北側にはⅠ-2号溝に延長すると判断されるⅥ-2号溝が道路Bの西側に沿って位置している。これらの状況から西側のⅠ-2・Ⅵ-2号溝と東側のⅠ-3・4号溝は対になって道路Bの側溝を形成していた可能性が考慮されるが、Ⅰ-2号溝が鉤形に屈曲することから道路Bの地割は踏襲されていたと思われるものの、古くは水路Aは道路Bを跨いで掘削されていなかったことが窺われる。

道路Bの西側には本遺跡を南北に横断して位置する道路Cが在る。Ⅶ区のⅦ-5・6・9号溝はこの道路Cに沿って掘削されていた溝である。さて道路Bが地形の変換点に沿って普請されたものと考えられるのに対し、道路Cは条里区画に依拠していた道路であろう。従ってⅦ-5・6・9は古代以来の維持されてきた土地区画に沿って掘削されたものである。

地境付近に掘削された溝にはⅠ-6号溝とⅦ-1号溝がある。このうちⅦ-1号溝は調査区北西部付近を東西～東北東に走る地境Dにほぼ乗っている。またⅠ-6号溝は調査区南東付近を北北東-南南東方向に弧状を呈して通過する地境E付近に在り、その走行は地境Eより若干時計回りに傾いており、南部はほぼ地境に乗っており、北部は東に離れている。尚、地境D・Eは共に自然地形に依拠した地境であると判断される。

3 区画線に乗らなかった溝遺構

その他、地境に乗らなかった溝にはⅠ-5・7号溝とⅦ-1号溝及びⅦ-2号溝があった。

このうちⅦ-2号溝は南側に突き出した弧状を呈するクロープマークのマークFの南側に位置しているもので、そのラインはマークFに並行に近いものであった。従ってⅦ-2号溝にかつては見られたクロープマークの

原因となった弧状の縁辺を持つ地形或いは構造物の縁辺に掘削されたものと考えられる。

一方、I-5・7号溝とVI-1号溝は近接する地境とは斜方向に掘削されていて、航空写真に現れた土地区画との関連は否定される。

第2節 本遺跡調査成果

上新田新田西遺跡(2)の調査については3・4章で報告した通りである。ここでは得られた成果について、本線部分である上新田新田西遺跡についても触れながら述べてみたい。

縄文時代では、今回調査では遺構・遺物は確認されなかった。本線部V区では遺構外遺物として縄文土器片3点及び打製石斧1点・石鏃2点が出土している。遺構は確認されなかった。

弥生時代は、遺構は確認されなかったがⅦ区から樽式土器甕が1点出土している。本線部分調査では遺構・遺物は確認されなかった。Ⅶ区から出土した樽式土器は、弥生時代後期後半段階のものである。本遺跡周辺では上新田中道東遺跡において樽式土器及び北総地域の後期弥生土器に類似した弥生土器が出土している。出土点数が少ないため断定することはできないが、本遺跡周辺にて生活活動域があったことが考えられる。

古墳時代前期の遺構は土坑1基が確認された。出土遺物等から古墳時代前期の土坑と判断した。埋土からは浅間C軽石は確認されなかった。出土した高杯は脚部のみであるが、形状及び穿孔の状況から東海西部系有段高杯を模したものであり、浅間C軽石降下以降のものであると推測する。本遺跡では遺構外出土遺物として、小型甕・器台が出土している。これら遺物はいずれも若狭徹氏・深澤敦仁氏による古墳時代前期編年^{註1}の前期中段階以降の特徴を有している。

本線部分調査では古墳時代前期の遺構・遺物は確認されなかった。本遺跡西に隣接する下斉田遺跡^{註2}では古墳時代前期の住居及び方形周溝墓が確認されている。遺構の時期は遺物の特徴などから若狭・深澤編年の前期古段階から中段階とみられる。本遺跡で遺構・遺物が確認されたのはⅥ区・Ⅶ区の低地帯である。5章で報告したⅡ区の自然科学分析の結果から古墳時代前期の稲作の可

能性も考えられる。下斉田遺跡が集落域であり、本遺跡が生産域であったと仮定することも可能であろう。しかし、下斉田遺跡報告書のまとめでは下斉田遺跡の集落は遺跡西側を流下する井野川流域の開発に伴うものと位置付けている。その位置付けについては、今後の本地域での調査の増加を待って、検討したい。

古代の遺構としては土坑・溝・水田等が確認された。遺物から遺構の時期が特定できたのはⅦ区2号竪穴状遺構のみであった。8世紀後半から9世紀前半ごろの遺物と判断した。他の竪穴状遺構からは、遺物が出土しているが少量であるため時期については言及することができなかった。出土した遺物はその形状から2号竪穴状遺構の遺物とあまり変わらない時期のものと考えられる。

Ⅶ区で確認された水田は、浅間B軽石に覆われていた。そのため、B軽石降下時を下限とする。耕作時期の上限を特定することはできなかった。隣接するⅡ区でも同時性と見られる水田が確認された。

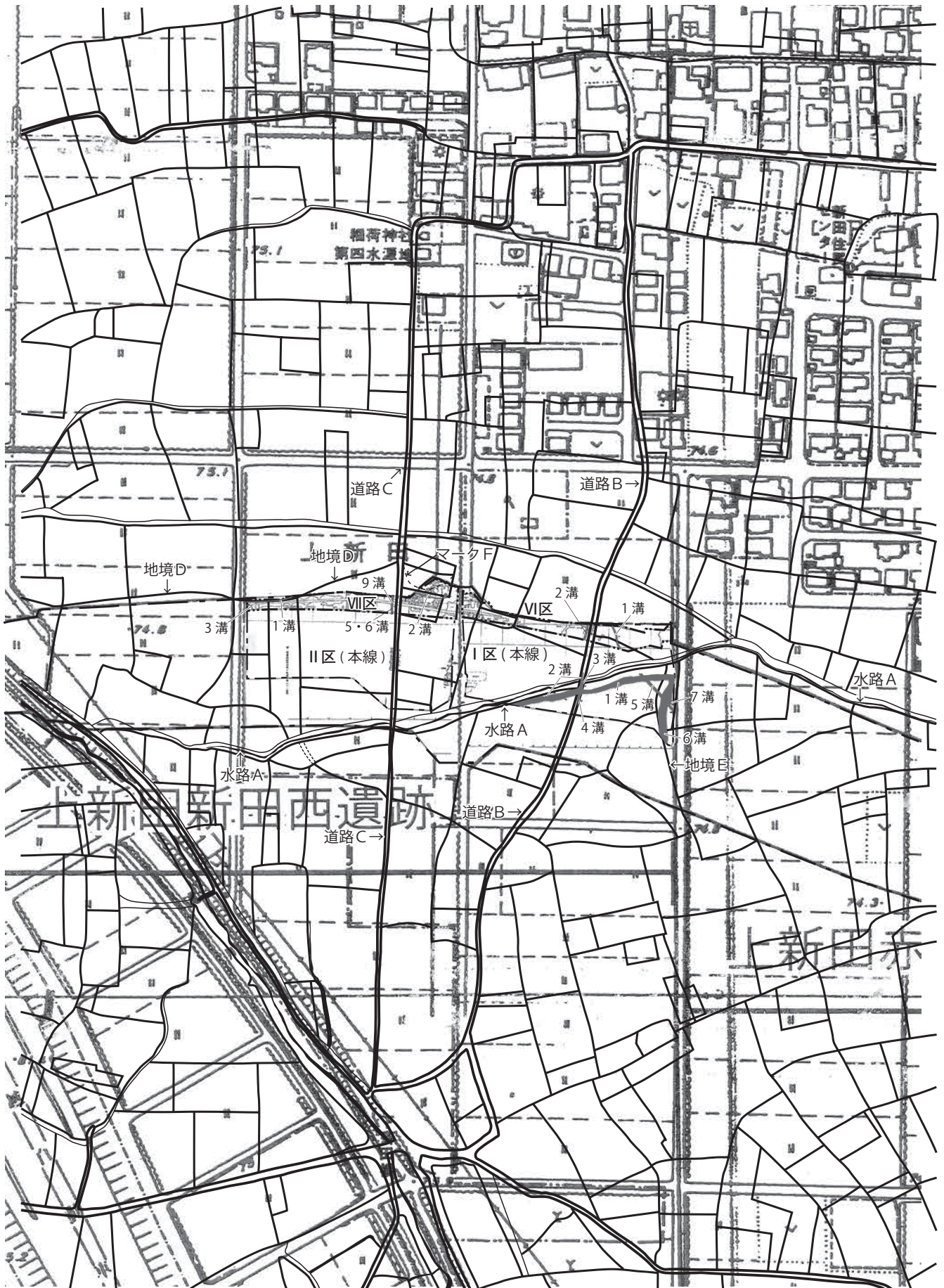
生産域である水田に対しての居住域は今回の調査では検出されなかった。しかし、本線部調査では微高地であるV区において古代の住居が3軒確認された。報告書では遺物を奈良・平安時代としている。隣接する下斉田遺跡でも同時期と見られる住居が10軒確認されている。V区と下斉田遺跡は同一微高地にあり、集落を形成していたと仮定できよう。遺構の位置関係・地形からその集落に対しての生産域としてⅡ区・Ⅶ区の水田と考えることも可能である。しかし、調査範囲が非常に限定的であり、得られたデータも少ないためあくまでも推測の域を出ない。古墳時代前期集落同様、今後の調査の進展を待ちたい。

中世では、いわゆるB軽石混土層を地山とする遺構を検出した。時期が確認できる遺構としてはV区5号井戸のみであった。

近世では浅間A軽石からの復旧坑群が確認された。近隣遺跡でも中道東遺跡や下斉田重土薬師遺跡などで確認されており、地域での復興が進められていたことがうかがえる。

註1 若狭徹・深澤敦仁2005「北関東における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊新潟県考古学会

註2 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1987『下斉田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡』



第 41 図 上新田新田西遺跡 溝遺構と圃場整備前土地区画

出土遺物観察表

第11表 遺物観察表

V区5号井戸

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.16	1	常滑陶器 甕	埋土 肩部片			にぶい赤褐	断面は灰色、器表はにぶい赤褐色。肩部上面に自然釉がかかり、下部に流れる。	中世
第14図 PL.16	2	在地系土器 片口鉢	埋土 1/8	口 (23.0) 底 (13.0)	高 9.6	暗灰	断面は灰色、器表付近はにぶい橙色、器表は暗灰色。内面中位以下は使用により器表が摩滅し、にぶい橙色部分が露出。底部回転糸切無調整。口縁部は内湾気味で、端部は内側に突き出る。	14世紀後半頃

VI区2号溝

挿図 PL.NO.	No.	器別 器形	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	成形・整形の特徴	木材
第17図 PL.16	1	木製品 木片	VI区2号溝 No.1	17.0	5.0	1.8	97.0	木材破片で明瞭な加工痕跡等は見られない	スギ
第17図 PL.16	2	木製品 木片	VI区2号溝 No.2	17.0	3.6	2.6	63.0	木材破片で明瞭な加工痕跡等は見られない	スギ
第17図 PL.16	3	木製品 杭	VI区2号溝 No.2の下	67.2	5.3	5.3	1533.0	樹皮付丸木杭、先端部をのこぎりで切断後斜めに四面カットし側面の枝も落としている。中ほどで折れているが、これは木材が腐朽する前の健全な状況で強い外力により折れたものとみられる。頭側は腐朽により細くとがって見える。	クリ
第17図 PL.16	4	木製品 杭	VI区2号溝 No.3	86.5	7.0	7.0	2540.0	樹皮付丸木杭、先端部をのこぎりで切断後斜めに四面カットし側面の枝も落としている。頭側は腐朽により細くとがって見える。	クリ
第17図 PL.16	5	木製品 杭	VI区2号溝 No.4	58.0	8.0	6.5	1786.0	丸木杭、先端部をのこぎりで切断後斜めに四面カットし側面の枝も落としている。頭側は腐朽により細くとがって見える。	クリ
第18図 PL.16	6	木製品 杭	VI区2号溝 No.5	69.0	6.3	6.3	1891.0	丸木杭、先端部をのこぎりで切断後斜めに四面カットし側面の枝も落としている。頭側は腐朽により細くとがって見える。	クリ
挿図 PL.NO.	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	成形・整形の特徴	石材
第18図 PL.16	7	砥石 切り砥石	2号溝覆土	5.5	3.0	1.7	45.7	四面使用。破損後、表面側の両側縁を刀子状工具により整形する。表面側に斜向する線条痕があるほか、裏面側に意匠不明の線刻がある。	砥沢石

VII区2号溝

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第20図 PL.16	1	須恵器 椀	2号溝埋土				ロクロ整形(右回転)。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第20図 PL.16	2	在地系土器 鍋	2号溝埋土 口縁部小片			暗灰	還元炎気味で口縁部は内湾気味。	中世	
挿図 PL.16	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	成形・整形の特徴	石材
第20図 PL.16	3	敲石 棒状礫	2号溝覆土	10.5	4.1	4.0	271.8	小口部両端に著しい敲打痕がある。上端側小口部は打撃されたことで、衝撃剥離痕が生じている。	

VII区1号竪穴状遺構

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第24図 PL.16	1	須恵器 甕	胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元/灰	叩き整形か。内外面ともに素文。		
第24図 PL.16	2	土師器 甕	口縁部～頸部片	口 20.0			細砂粒/良好/ にぶい橙	口縁部横撫で、口唇部外面に1条の凹線を巡らす。	器面の摩滅顕著

VII区2号竪穴状遺構

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第25図 PL.16	1	須恵器 椀	口縁部片	口 18.2			細砂粒/還元/灰 白	ロクロ整形(回転方向不明)。	
第25図 PL.16	2	須恵器 椀	体部～底部片	底 6.5			細砂粒・片岩/ 還元/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台で、貼付部から剥落。	器面の摩滅顕著
第25図 PL.16	3	須恵器 杯	体部～底部片	底 5.6			細砂粒・粗砂粒/ 還元/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り無調整。	器面摩滅
第26図 PL.16	4	土師器 小型甕	口縁部～胴部片	口 10.8			細砂粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部横撫で。胴部外面横のヘラ削りで、ヘラ先が横撫で部に及ぶ。胴部内面横のヘラ撫で。	
第26図 PL.16	5	土師器 小型甕	口縁部～胴部片	口 12.4			細砂粒・角閃石/ 良好/にぶい橙	口縁部横撫で、胴部外面横のヘラ削り、内面横～斜のヘラ撫で。	
第26図 PL.16	6	土師器 甕	口縁部～胴部片	口 21.0			細砂粒/良好/ 明赤褐	口縁部横撫で、胴部外面横のヘラ削り、内面横～斜のヘラ撫で。胴部外面横のヘラ削り、内面撫で。	頸部外面に輪積み痕

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第26図 PL.16	7	土師器 甕	底部片	底 3.9		細砂粒/良好/灰 黄褐	胴部外面縦のヘラ削り、内面撫で。底部ヘラ削り。	
第26図 PL.16	8	須恵器 長頸壺か	胴部片			細砂粒・粗砂粒/ 還元/灰	ロクロ整形(右回転)。胴部下端回転ヘラ削り。高台は付高台と思われるが欠損。	

Ⅳ区3号竪穴状遺構

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第27図 PL.17	1	須恵器 椀	体部～底部片	底 7.3	台 7.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元/灰	ロクロ整形(右回転か)。高台は底部回転系切り後の付高台。	器面の摩滅顕著

Ⅳ区4号竪穴状遺構

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第28図 PL.17	1	須恵器 椀	底部片	底 5.8		細砂粒・粗砂粒/ 還元/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転系切り後の付高台で、貼付部から剥落。	器面の摩滅顕著

Ⅵ区7号土坑

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第30図 PL.17	1	土師器 甕	口縁部片	口 20.8		細砂粒・粗砂粒/ やや軟質/明赤褐	器面の摩滅が激しく整形不明。	器面の摩滅顕著	
第30図 PL.17	2	土師器 鉢か	体部片			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	体部内外面撫でか。	器面摩滅	
挿図 PL.NO.	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	成形・整形の特徴	石材
第30図 PL.17	3	敲石 棒状礫	7号土坑	11.1	5.2	3.4	257.5	小口部両端に敲打痕がある。上端側敲打痕は明瞭で、平坦面を形成する。	

Ⅵ区10号土坑

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第30図 PL.17	4	土師器 高杯	脚部1/2	脚 12.4		細砂粒・粗砂粒/ やや軟質/橙	脚部外面の整形は器面摩滅のため不明。内面端部にハケ目の痕跡。脚部穿孔は3孔。	器面の摩滅顕著
第30図 PL.17	5	土師器 甕か	胴部片			細砂粒・粗砂粒/ やや軟質/橙	胴部外面ハケ目、内面撫でか。	器面摩滅
第30図 PL.17	6	土師器 台付甕	胴部～脚部片			細砂粒・粗砂粒/ 片岩/良好/橙	胴部外面下半縦～斜のハケ目、内面撫でか。脚部は貼付。	器面の摩滅顕著

Ⅵ区1号井戸

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第33図 PL.17	1	須恵器 杯か	口縁部片	口 11.9		細砂粒/やや軟質/ 橙還元/灰白	ロクロ整形(右回転)。	体部下内外面 吸炭
第33図 PL.17	2	須恵器 甕	胴部片			細砂粒/還元/灰	内外面撫で。	

Ⅵ区遺構外

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第37図 PL.17	1	土師器 甕	口縁部片	口 21.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部外面斜のハケ目、頸部外面縦のハケ目。内面撫でか。	器面の摩滅顕著 器胎吸炭
第37図 PL.17	2	土師器 小型甕	1/2	口 7.8 底 4.0	高 8.8	細砂粒/やや軟質/ 橙	内外面ともに器面の摩滅が顕著で整形不明。	

Ⅶ区遺構外

挿図 PL.NO.	NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第37図 PL.17	3	弥生 甕	1号竪穴No.1 肩部～胴部			細砂、細礫/褐橙/ 良好	頸部に3連止め縷状文、肩部に2帯の櫛描波状文を廻らせ、外面無文部はミガキ。内面ナデ。施文具は8歯、16mm。		
第37図 PL.17	4	須恵器 杯	底部片	底 5.6		細砂粒/還元/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り無調整。	器面摩滅	
第37図 PL.17	5	須恵器 杯	体部～底部片	底 6.5	台 6.4	細砂粒/還元/灰	ロクロ整形(右回転)。高台は角高台状で付高台。		
第37図 PL.17	6	土師器 器台	脚部片			細砂粒/良好/に ぶい黄橙	脚部外面縦のヘラ磨き、内面撫で。脚部の穿孔は3孔。		
第37図 PL.17	7	須恵器 甕	胴部片			細砂粒/還元/灰	叩き整形。外面平行叩き、内面当て具は青海波文。	器胎内は酸化	
挿図 PL.NO.	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	成形・整形の特徴	石材
第37図 PL.17	8	火打石 剥片	Ⅱ区カクラン	3.3	2.2	0.9	6.1	両側縁が敲打され、著しく潰れる。	玉髓
第37図 PL.17	9	火打石 剥片	Ⅱ区カクラン	3.1	2.6	1.3	10.1	上端側両側縁が敲打され、著しく潰れる。裏面側に礫面が大きく残る。	石英

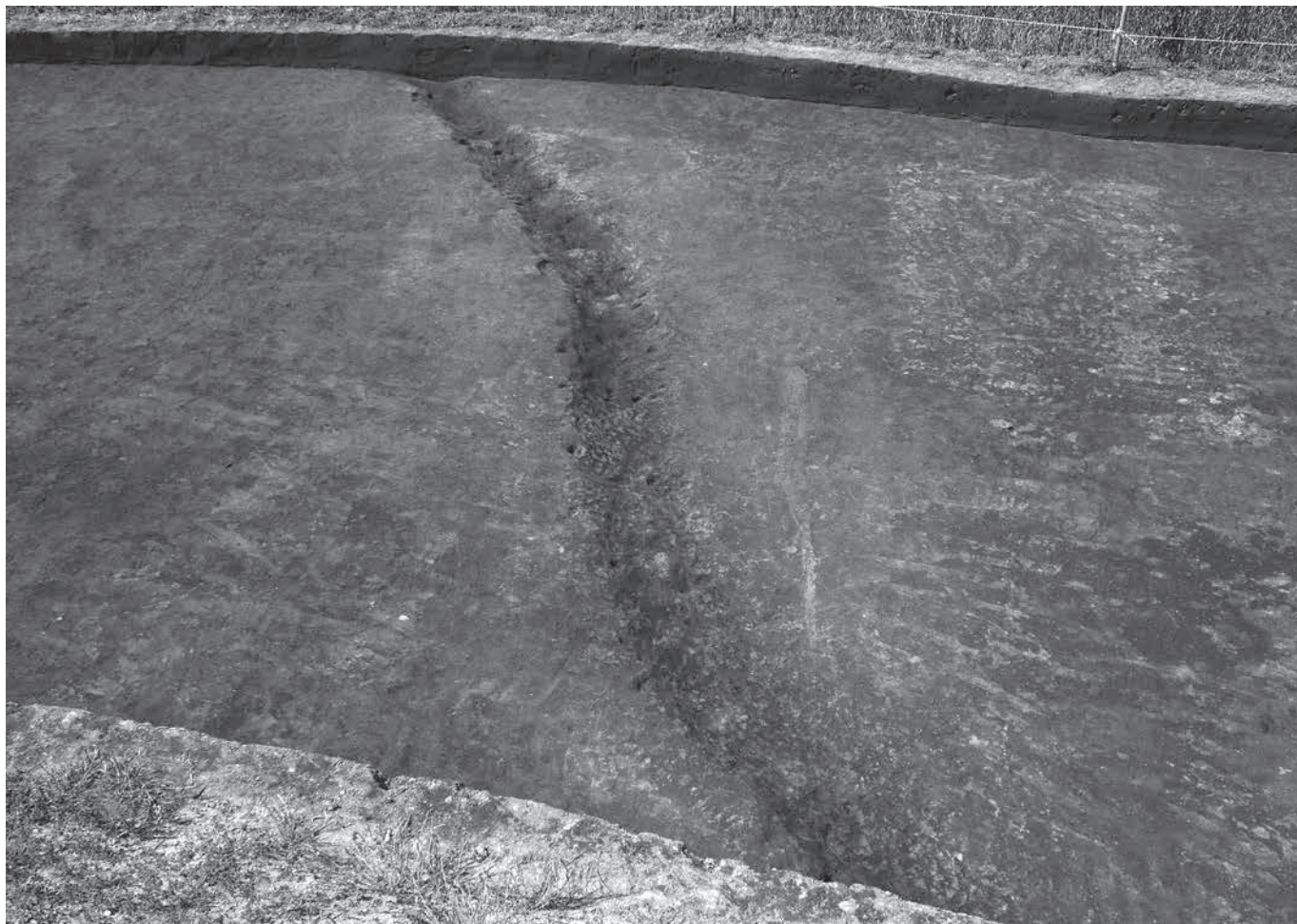
写真図版



1 上新田新田西遺跡全景(北から)



2 Ⅶ区2面全景(北から)



1 VI区1号溝全景(南から)



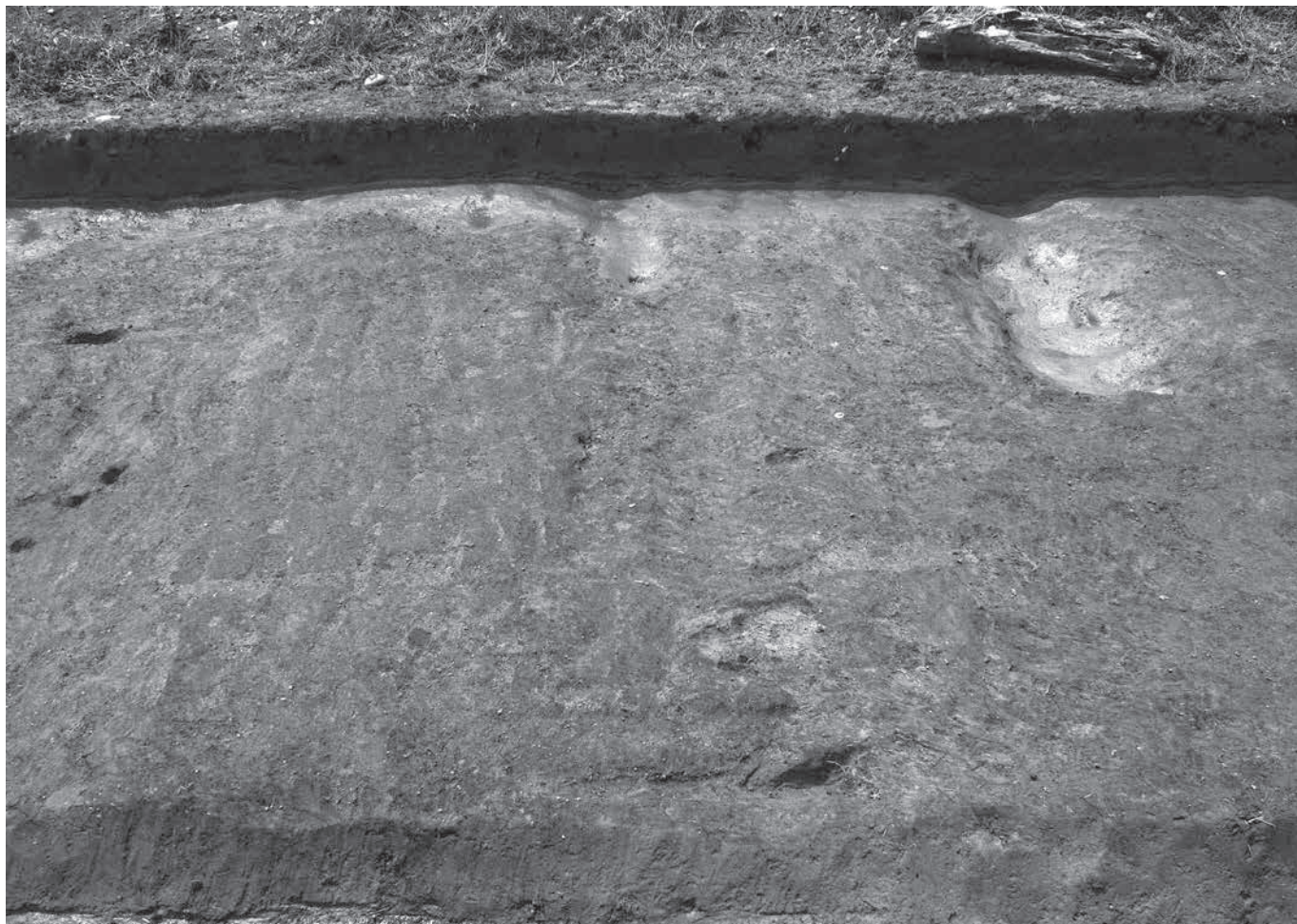
2 VI区2・3号溝全景(南から)



1 VI区 4号溝全景(南から)



2 VI区 5号溝全景(北から)



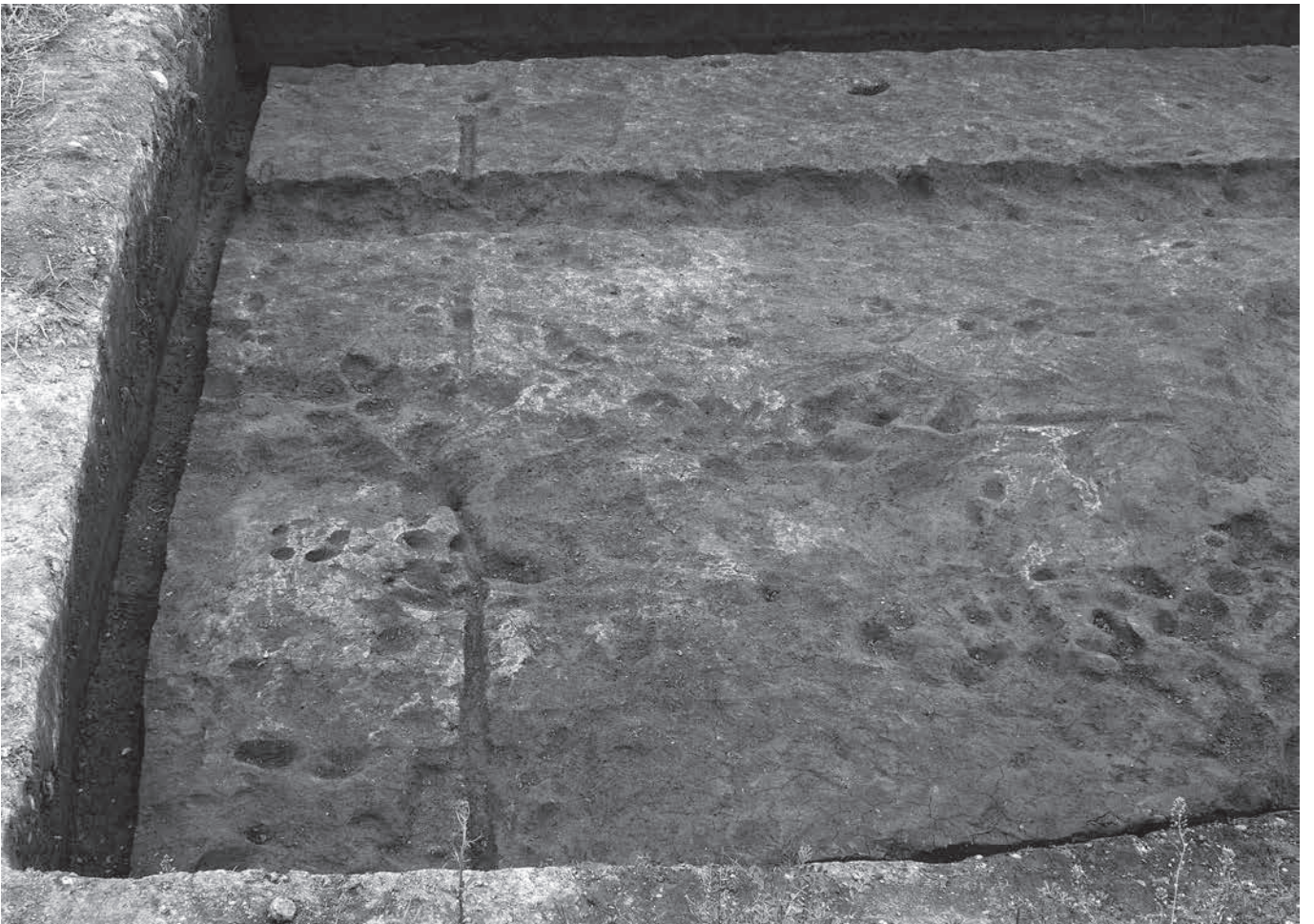
1 VI区6号溝全景(北から)



2 VII区1号溝全景(西から)



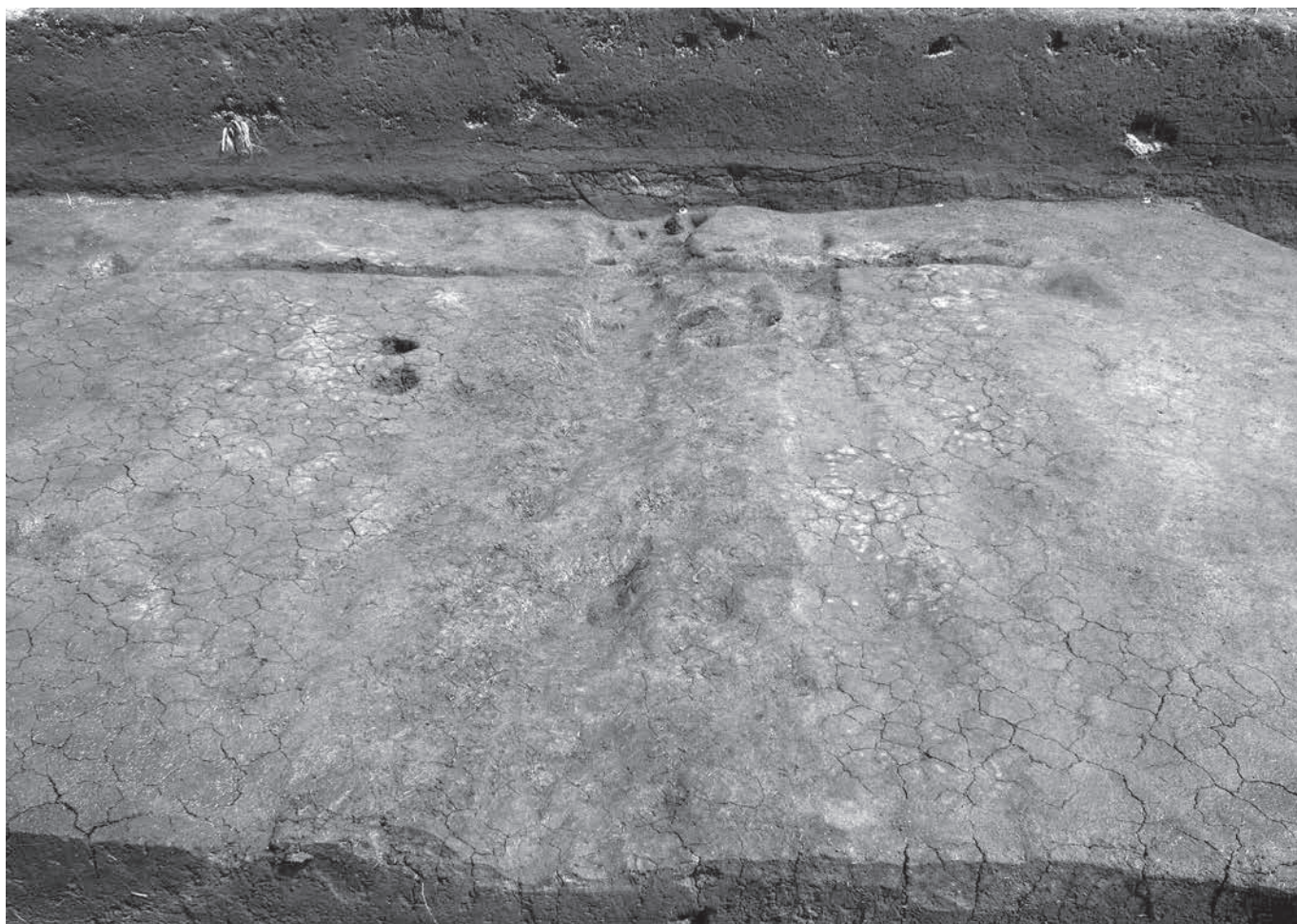
1 VII区 2号溝全景(東から)



2 VII区 3号溝全景(南から)



1 VII区5・6号溝全景(南から)



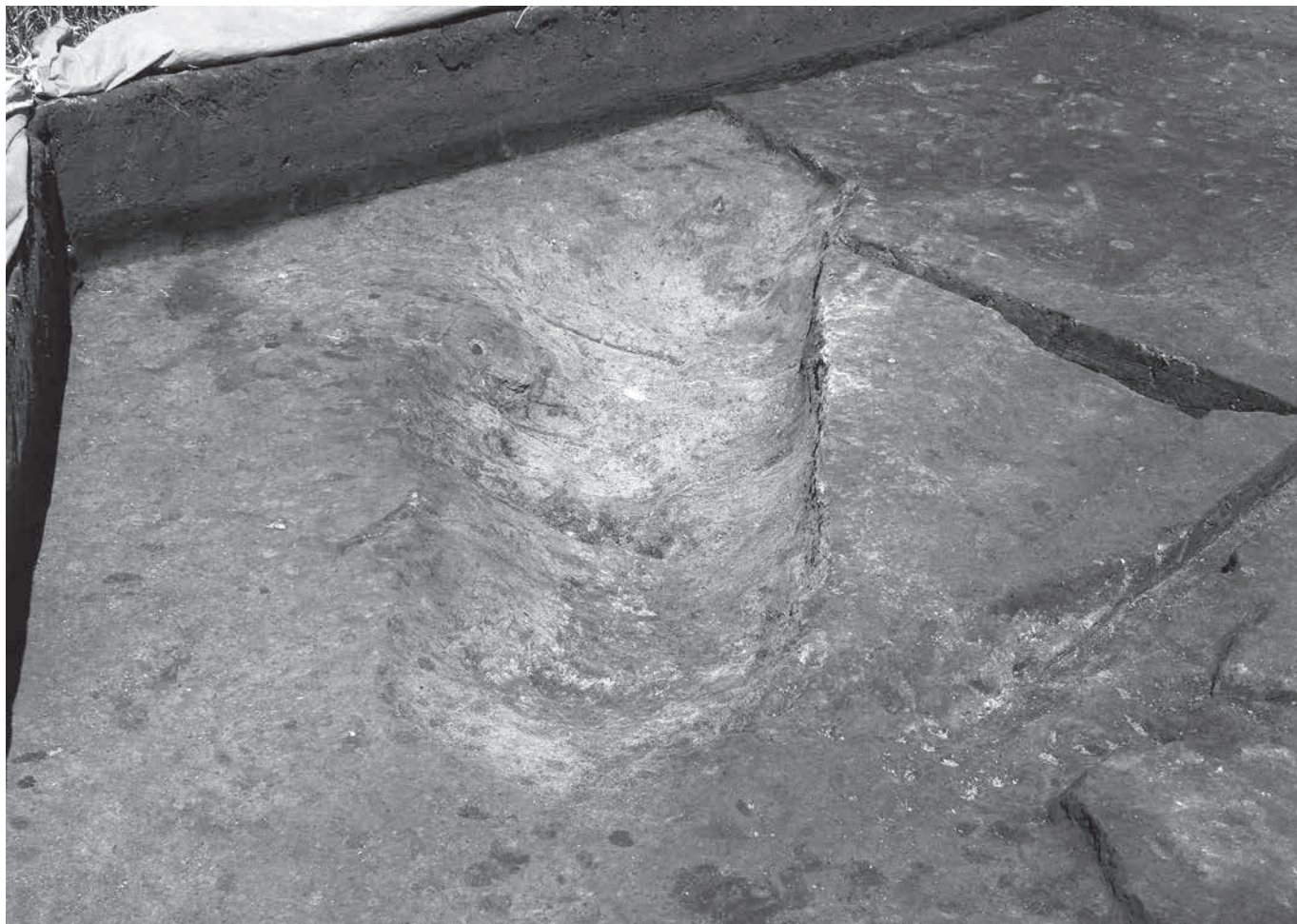
2 VII区5・9号溝全景(南から)



1 VII区6号溝全景(北から)



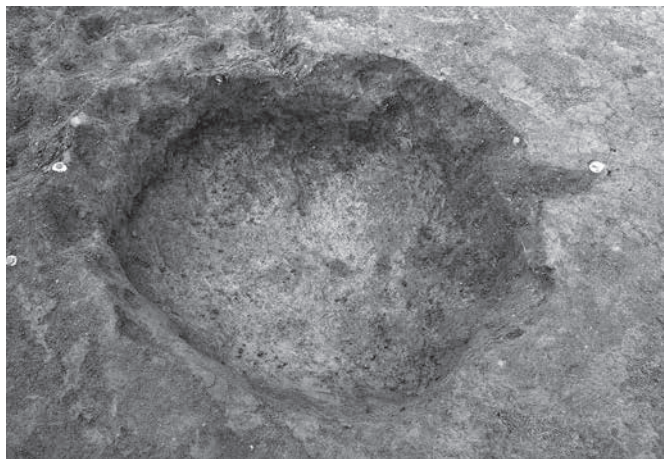
2 VII区7号溝全景(北から)



1 VII区8号溝全景(南西から)



2 VII区1群復旧坑全景(南から)



1 VI区1号土坑全景(南から)



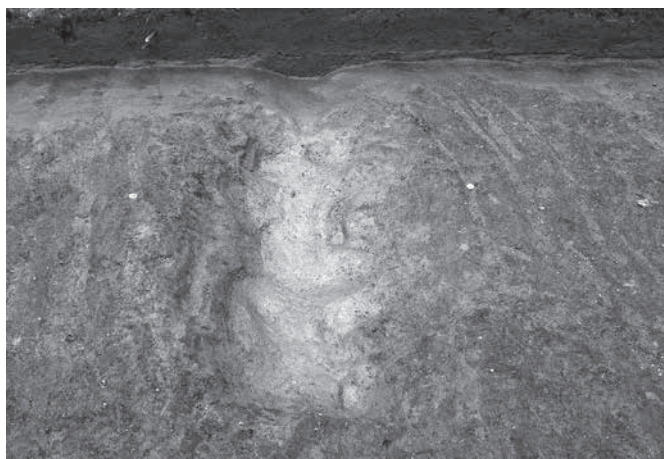
2 VI区2号土坑全景(東から)



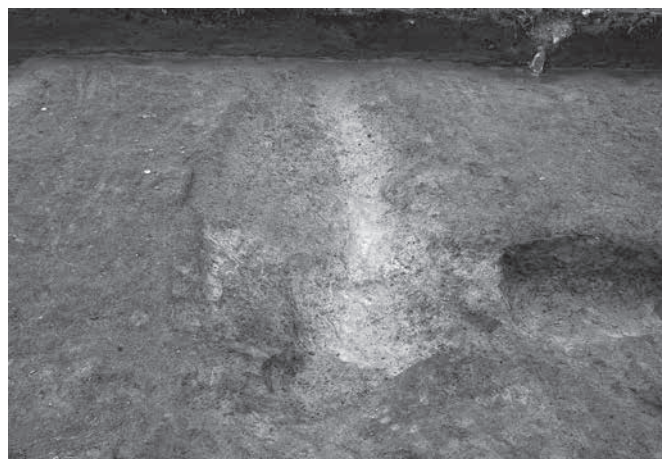
3 VI区3号土坑セクション(北から)



4 VI区4号土坑全景(東から)



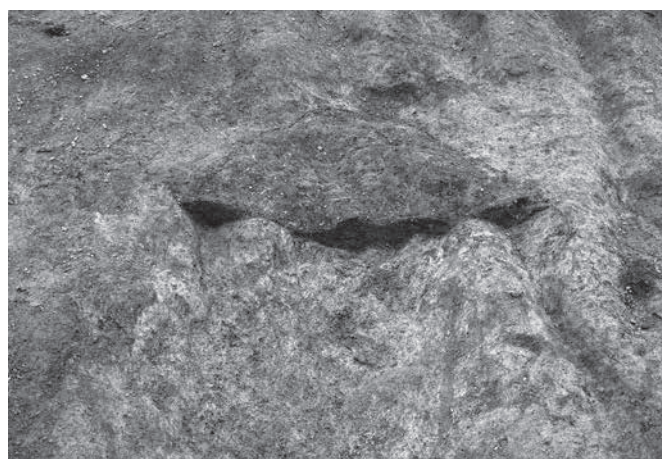
5 VI区5号土坑全景(北から)



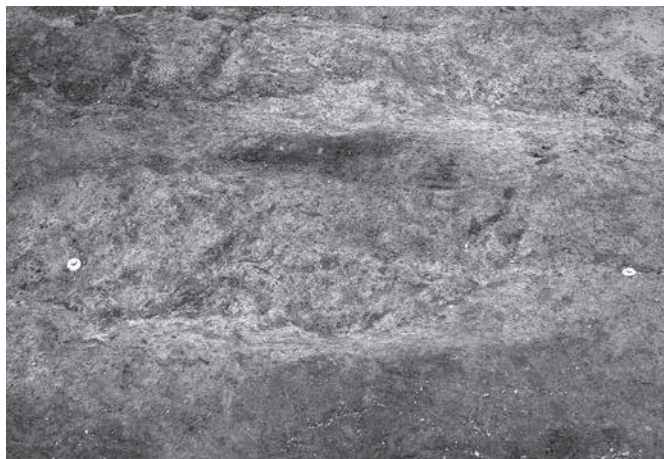
6 VI区6号土坑全景(北から)



7 VI区7号土坑全景(北から)



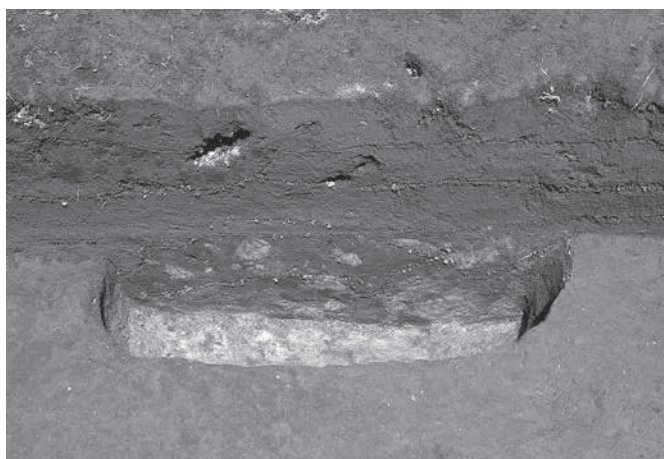
8 VI区8号土坑セクション(北から)



1 VI区9号土坑全景(東から)



2 VI区10号土坑全景(南から)



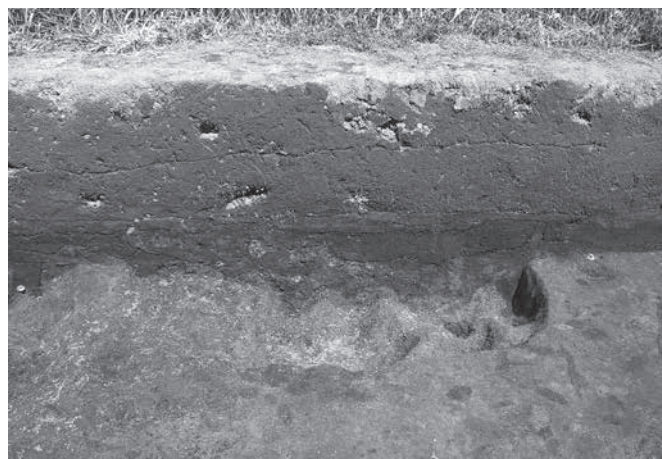
3 VII区1号土坑全景(南から)



4 VII区2号土坑全景(北から)



5 VII区3号土坑セクション(南から)



6 VII区4号土坑セクション(東から)



7 VII区1号井戸セクション(南から)



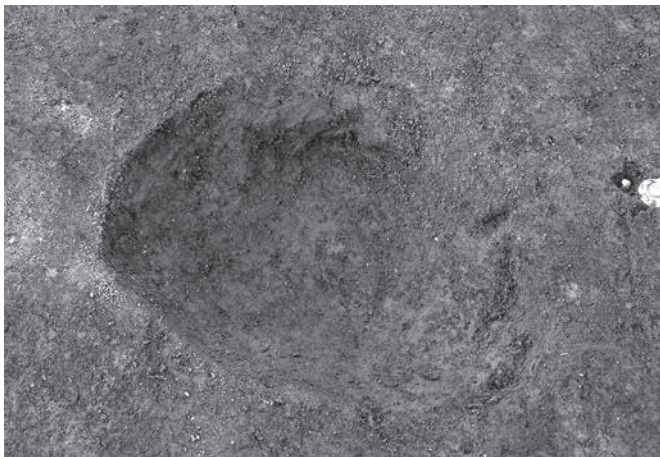
8 VII区調査風景(東から)



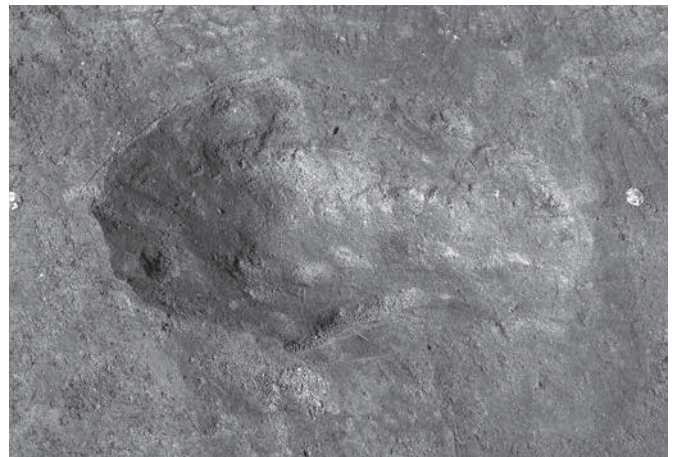
1 VI区1号ピット全景(南から)



2 VI区2号ピット全景(南から)



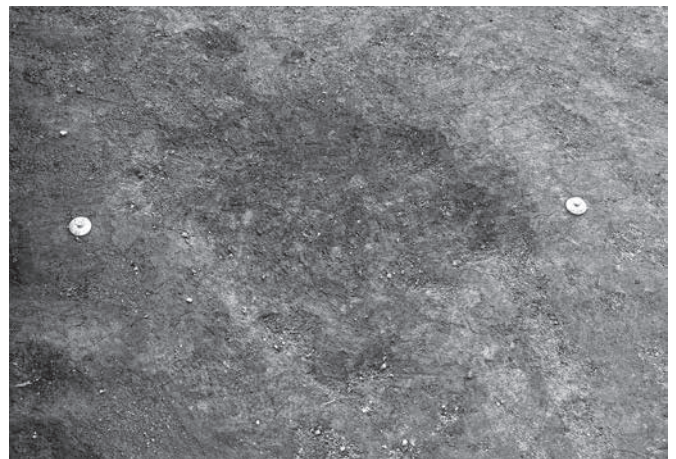
3 VI区3号ピット全景(南から)



4 VI区4号ピット全景(南から)



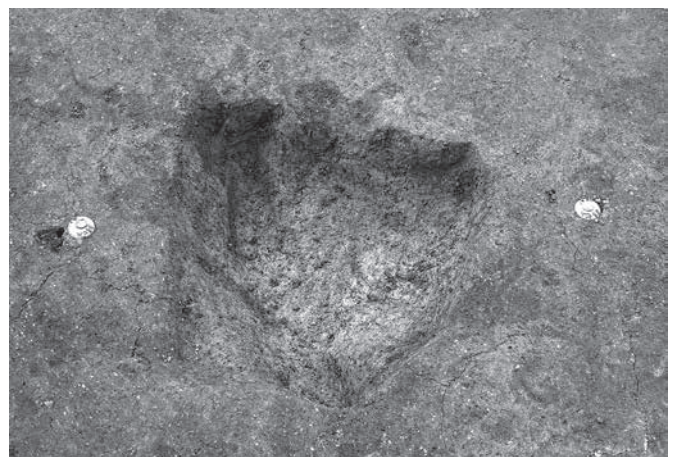
5 VI区5号ピット全景(東から)



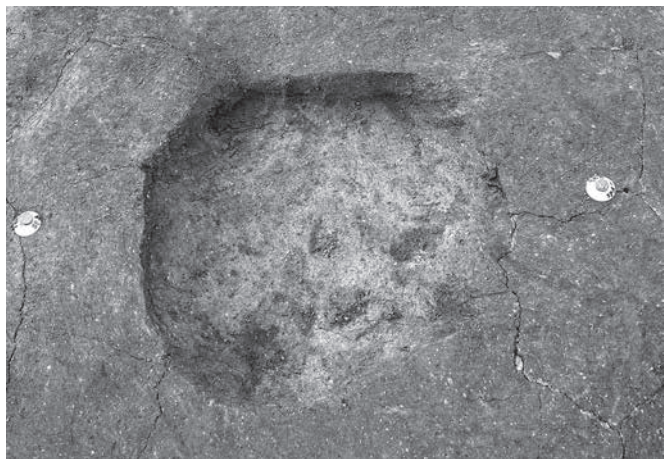
6 VI区6号ピット全景(東から)



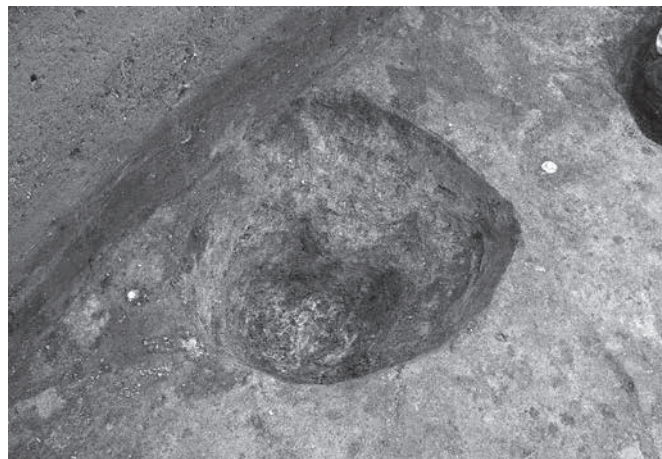
7 VI区7号ピット全景(北から)



8 VI区8号ピット全景(南から)



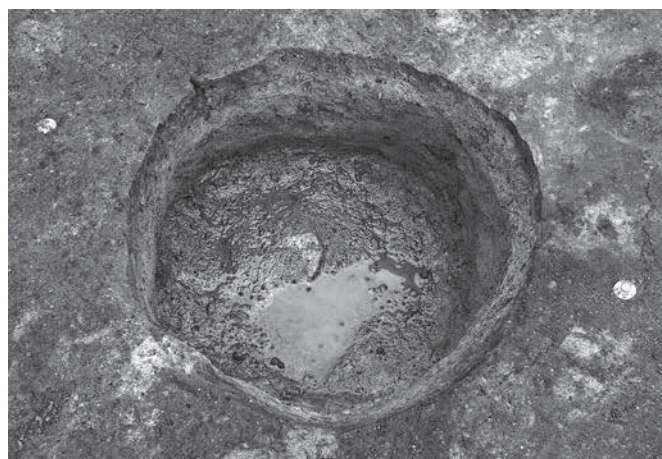
1 VI区9号ピット全景(南から)



2 VII区1号ピット全景(南から)



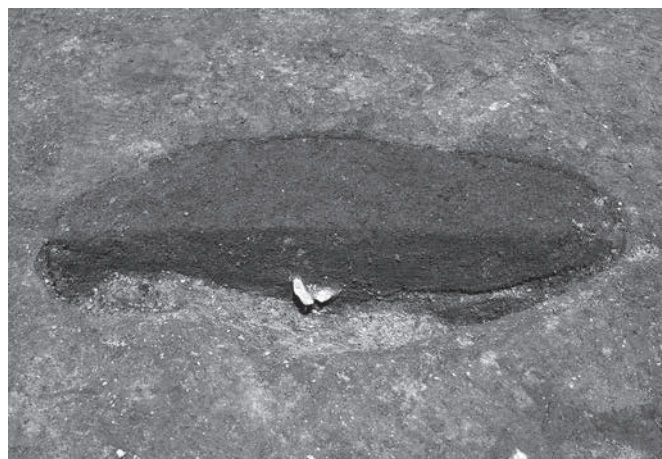
3 VII区2号ピットセクション(東から)



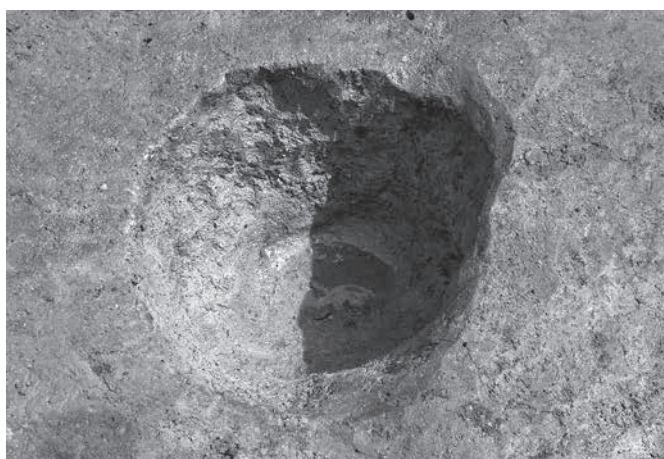
4 VII区3号ピット全景(南から)



5 VII区4号ピット全景(南東から)



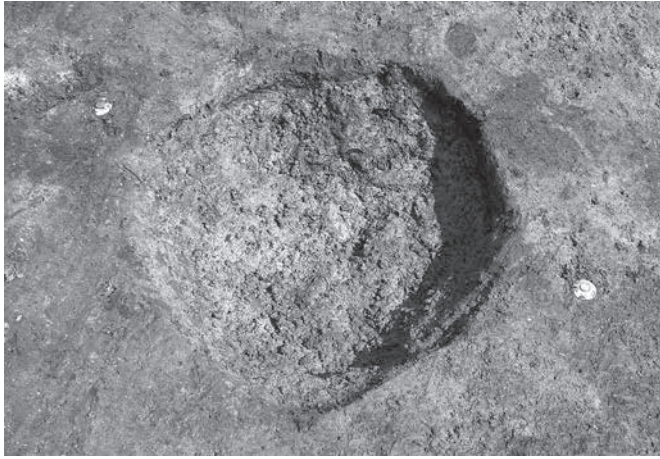
6 VII区4号ピットセクション(南東から)



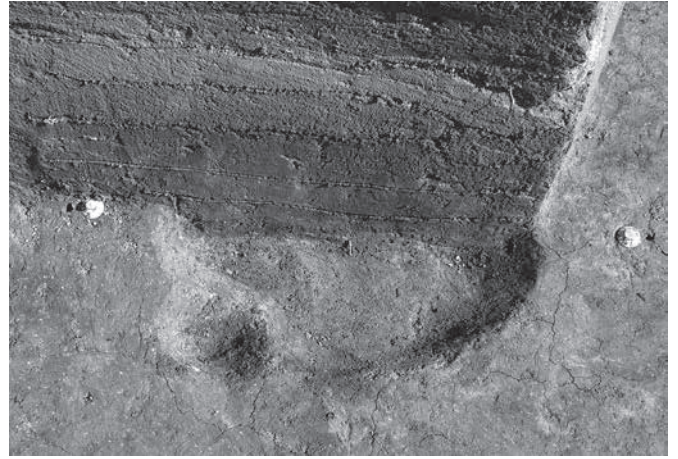
7 VII区5号ピット全景(南から)



8 VII区6号ピット全景(南東から)



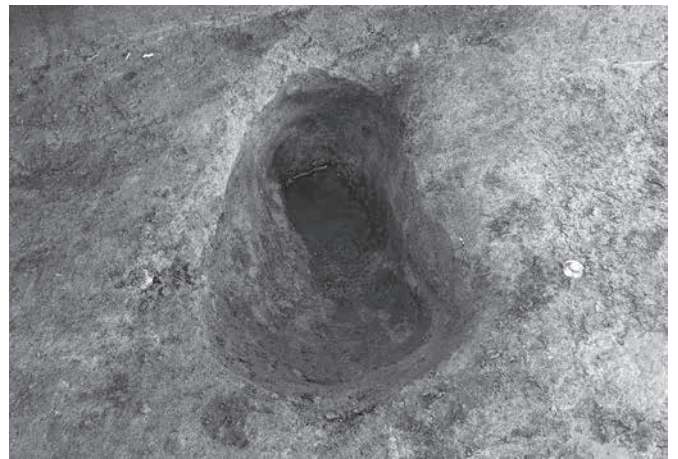
1 VII区7号ピット全景(南東から)



2 VII区8号ピット全景(北から)



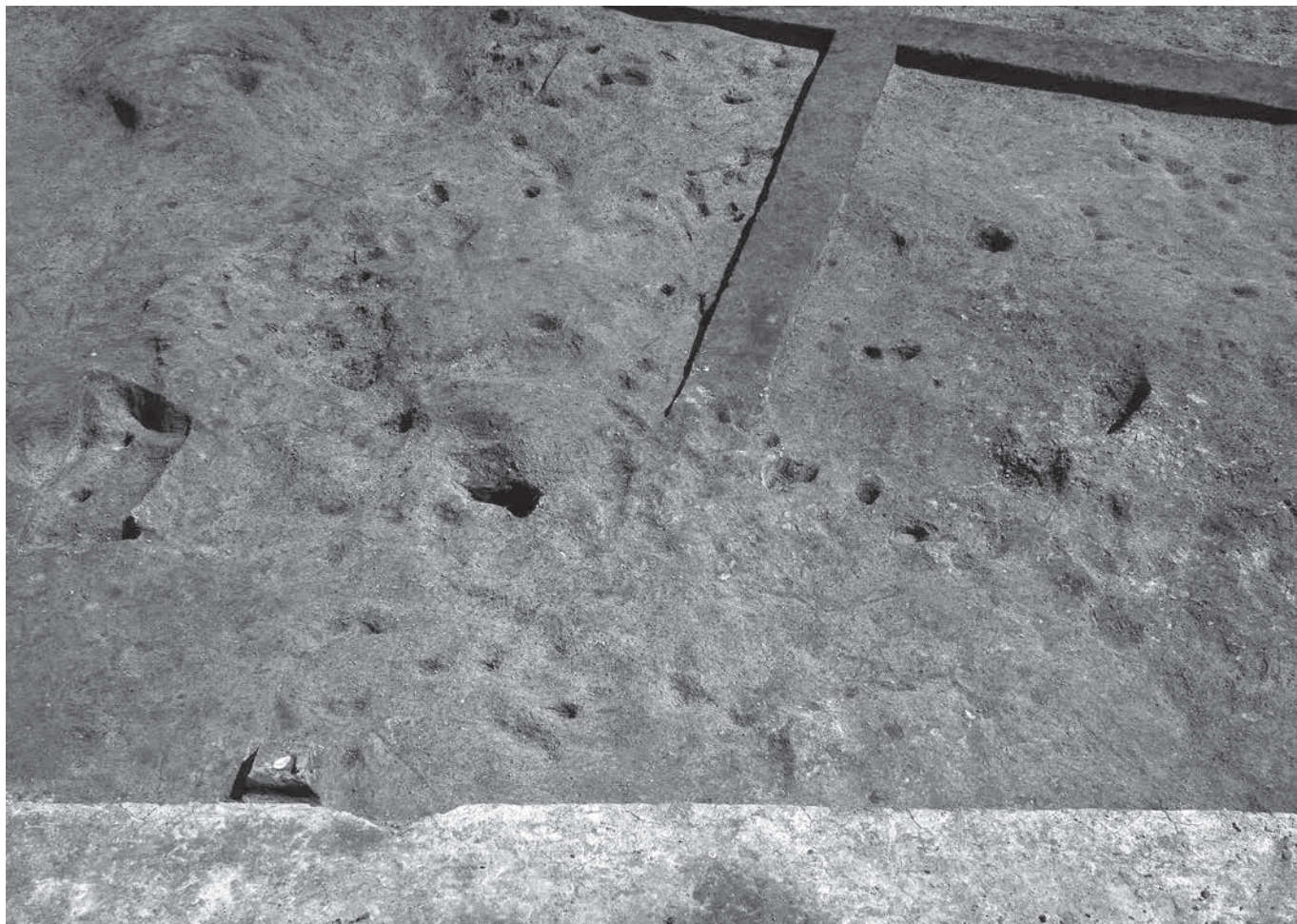
3 VII区9号ピット全景(南西から)



4 VII区10号ピット全景(南から)



5 VII区2号竪穴状遺構全景(南から)



1 VII区3号竖穴状遺構(南から)



2 VII区4号竖穴状遺構(南から)



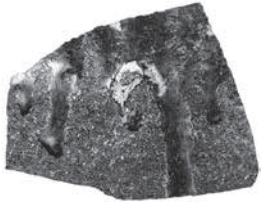
1 VII区As-B下水田全景(南東から)



2 VII区As-B下水田全景(南東から)

PL.16

V区5号井戸出土遺物



14図-1



14図-2

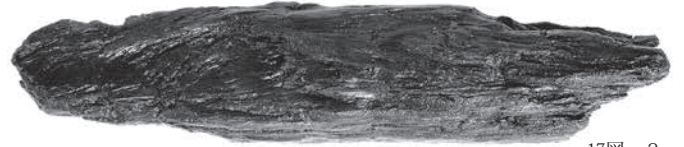


20図-2

VI区2号溝出土遺物



17図-1



17図-2



17図-3



17図-4



17図-5



18図-6



18図-7

VII区2号溝出土遺物



20図-1



20図-3

VII区竪穴状遺構出土遺物



24図-1



24図-2



25図-1



25図-2



25図-3



26図-4



26図-5



26図-6



26図-7



26図-8

Ⅶ区竪穴状遺構出土遺物



27図-1



28図-1



30図-1



30図-2



30図-4



30図-5



30図-6

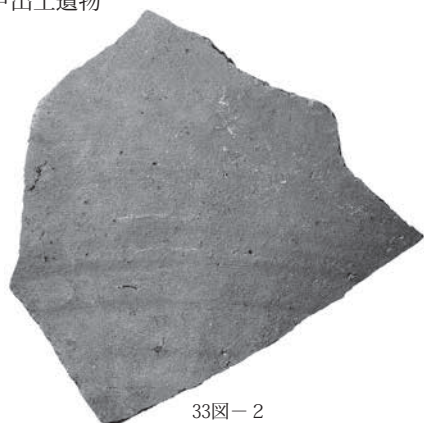


30図-3

Ⅶ区1号井戸出土遺物



33図-1



33図-2

遺構外出土遺物



37図-1



37図-2



37図-3



37図-4



37図-5



37図-6



37図-7



37図-8



37図-9

報告書抄録

書名ふりがな	かみしんでんしんでんにしいせき
書名	上新田新田西遺跡(2)
副書名	国道354号(玉村バイパス)社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第9集
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第570集
編著者名	関晴彦/長谷川博幸
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130630
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かみしんでんしんでんにしいせき
遺跡名	上新田新田西遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんさわぐんたまむらまちかみしんでん
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町上新田
市町村コード	10464
遺跡番号	0677
北緯(世界測地系)	361831
東経(世界測地系)	1390542
調査期間	20100401-20100531
調査面積	2,041
調査原因	道路建設
種別	生産域
主な時代	古代/中世/近世
遺跡概要	古代-竪穴状遺構4+土坑6+ピット9+井戸1+溝3+水田1 / 中・近世-土坑8+ピット9+溝11+復旧坑2
特記事項	天明三年被害復旧坑
要約	低地部である本遺跡からは、古代の水田・溝、天明三年被害の復旧坑など生産に関わる遺構が検出されている。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第570集

上新田新田西遺跡(2)

国道354号(玉村バイパス)社会資本総合整備
(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年(2013)年6月30日 刊行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

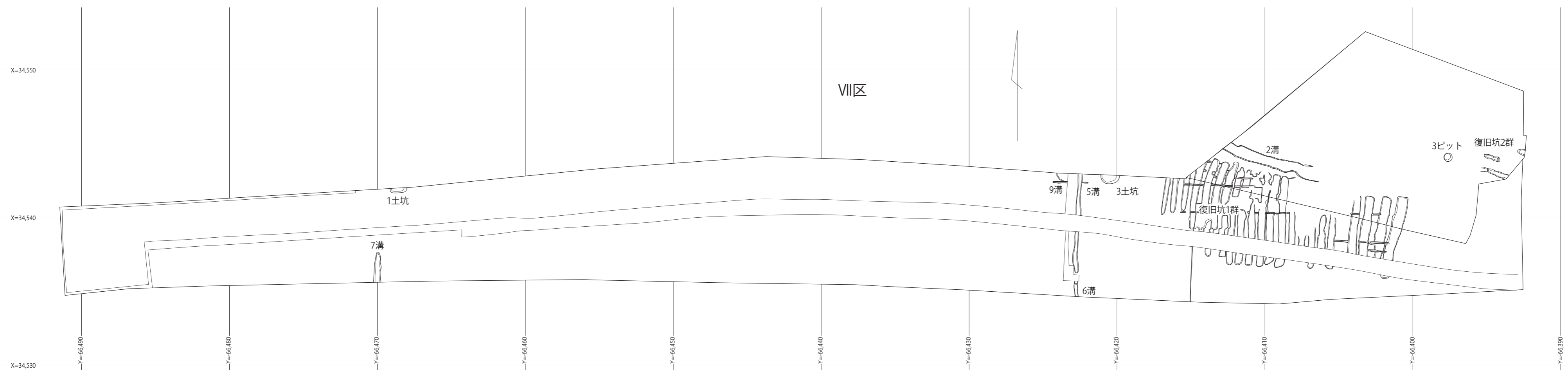
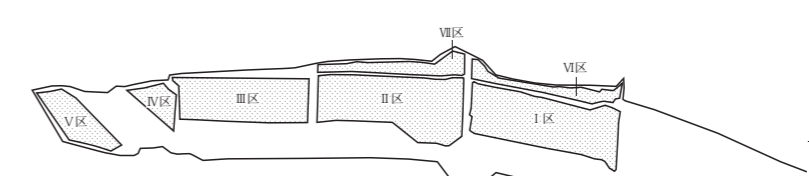
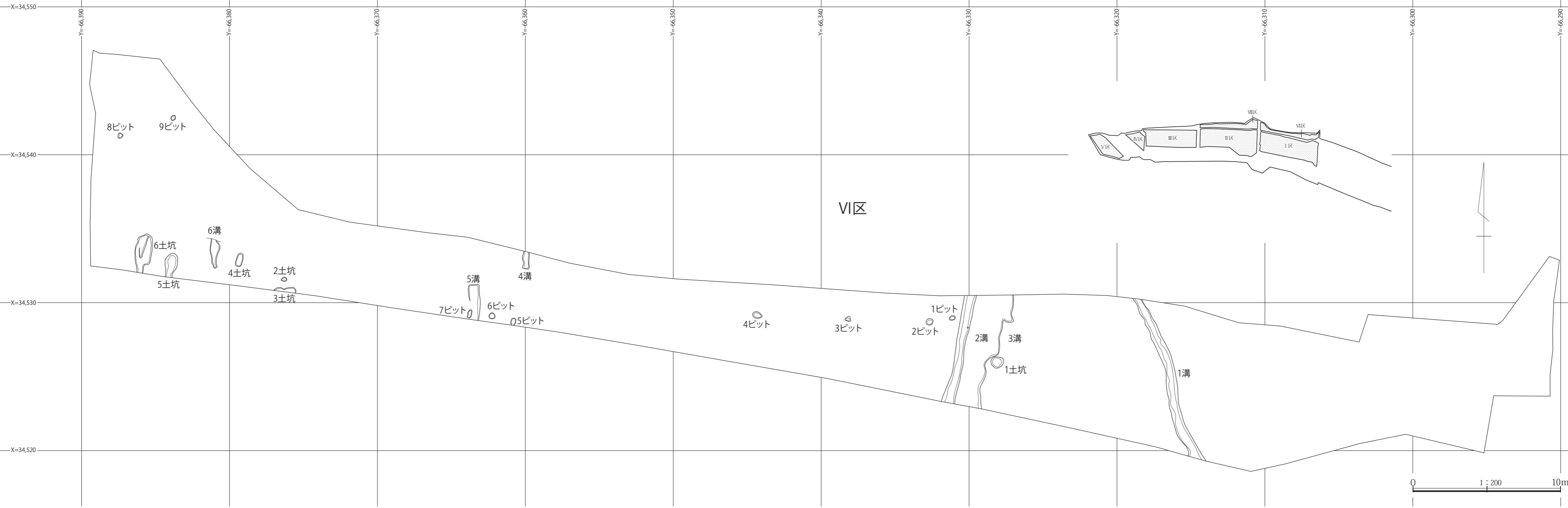
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第570集

上新田新田西遺跡(2)

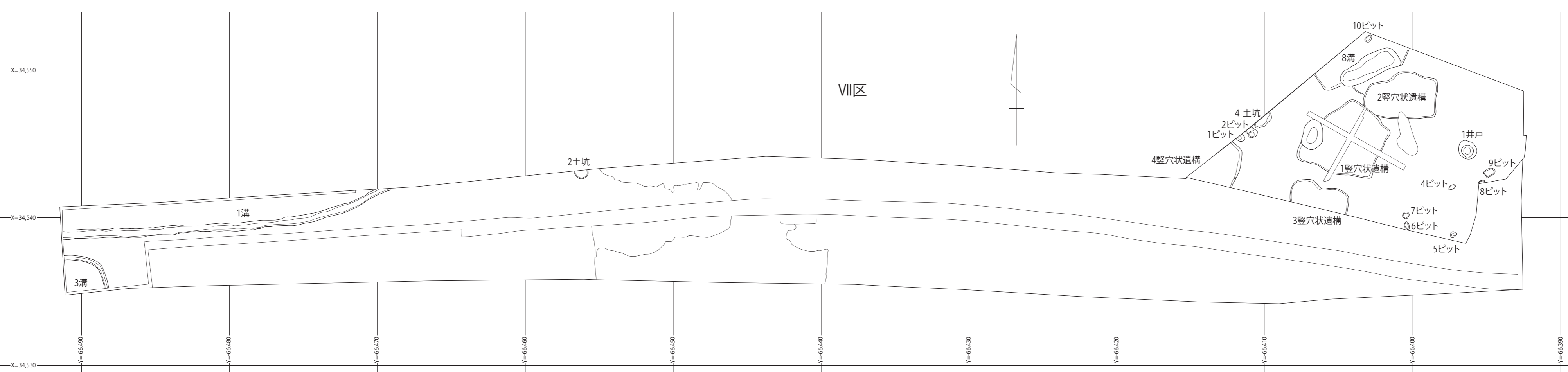
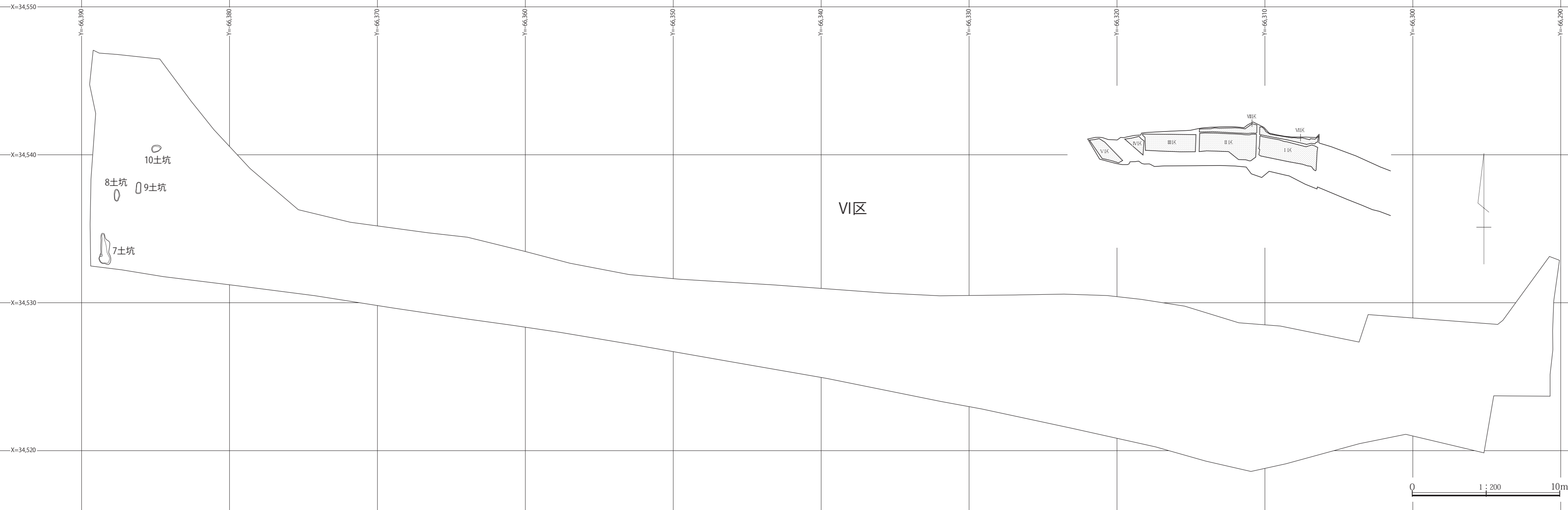
付 図

付図1 上新田新田西遺跡(2)中・近世面(1/200)

付図2 上新田新田西遺跡(2)古代面(1/200)



付図1 上新田新田西遺跡(2)中・近世面



付図2 上新田新田西遺跡(2)古代面

